みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

２．研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009597

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究（2016年度より「特別研究」）」「共同研究」「各個研究」という３種類の研究を柱としている。

「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年４月より法人化第２期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。2016年度においては、第３期中期目標期間を通して、大学共同利用機関としての特徴を活かした研究の推進を進めるため、「機関研究」の枠組みを改め、「特別研究」として、研究プロジェクトの発展的改組を行った。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の１つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、教員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、31件の共同研究、約70件の各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2018年度には『国立民族学博物館研究報告』43巻１号～３号が刊行されるとともに、SES（Senri Ethnological Studies）、SER（『国立民族学博物館調査報告』またはSenri Ethnological Reports）、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する４件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する２件のプロジェクトが加わり、合わせて６件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。４年目となる2017年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト７件、合計11件のプロジェクトを実施した。2018年度は、４件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト５件、合計９件のプロジェクトを実施した。各プロ

ジェクトが標本資料のソースコミュニティなどと協業してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことによりデータベース・コンテンツの格納件数が、17,661件（206,190レコード）となった。研究成果の公開促進を目的として、2018年度より新設した国際発信プログラムにより、『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集』を２冊刊行した。開発型プロジェクトでは、研究成果の総括となる国際シンポジウムを２件、国際学術協定にもとづいた国際連携展示を１件、データベースの構築や研究情報の深化を目的とした国際ワークショップを４件、開催した。また、民博のホームページ上において、日本語及び英語でフォーラム型情報ミュージアムに関する情報と構築したデータベースの公開を行うとともに、日本学術振興会ワシントンオフィスとの共催で、第23回Science in Japan Forum ‘Memory and the Museum’ を、本館主催の国際シンポジウム「ミュージアムの未来――人類学的パースペクティブ」を開催し、プロジェクト全体の成果の国際発信と一般社会への発信を進めた。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく４分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は海外直接収集資料としてアメリカの銀製宝飾品関連資料、国内購入資料としてインドのカリガート絵画を収蔵した。また、日本の彫金道具資料（園コレクション）、世界の楽器資料（大西コレクション）、日本のビーズバッグ等を寄贈受入した。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2018年度は、マイクロ資料3,508件（北米学位論文約1,005件、図書2,127件、新聞雑誌８タイトル376件）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、インターネットを介して広く公開・利用されており、2018年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が485件、文献複写受付は3,494件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,633冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを１つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2018年度には278件の問合せに対応した。

また、蔵書点検３か年計画の１年度目として、約22万冊の蔵書の点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2018年度は引き続き資料の整理作業を行い、丸谷彰、江口一久、栗田靖之・別府春海、内田勣、小林保祥アーカイブの目録をWeb公開した。また、研究アーカイブズ資料の利用について手順を簡素化する利用細則の改正を行い、受入について寄贈受入れ規則を新たに制定した。

2-1　みんぱくの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第３期中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を新しい統一テーマとして掲げ、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する西欧文明および科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた一方で、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題であり、これらの課題は人間生活のあらゆる面に影響を及ぼし、多くの問題をもたらしている。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定する。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざす。

2018年度は、プロジェクト「生物・文化的多様性の歴史生態学――稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」において、2018年３月に実施した国際シンポジウム「歴史生態学からみた人と生き物の関係」の成果刊行準備を進めた。また、プロジェクト「食料生産システムの文明論」において、2019年３月に国際シンポジウム ‘Making Food in Human and Natural History’ を開催した。そして新たに、プロジェクト「パフォーミング・アーツと積極的共生」を開始し、2018年11月にみんぱく公開講演会「音楽から考える共生社会」を開催した。

2018年度特別研究一覧

プロジェクトリーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学――稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に	環境問題と生物多様性	2016-2018
野林厚志	食料生産システムの文明論	食料問題とエコシステム	2017-2019
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生	マイノリティと多民族共存	2018-2020

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

1　テーマ区分：①環境問題と生物多様性

プロジェクトリーダー：池谷和信・岸上伸啓

研究課題：生物・文化的多様性の歴史生態学――稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に

先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えること、また、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア）、砂漠（アフリカ）、森林（アマゾニア、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考えることが主要な研究テーマとなる。

研究目的

本プロジェクトの目的は、先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えることである。また、本研究は、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア、日本）、砂漠（中央アジア）、森林（アマゾニア、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考える試みでもある。

実施状況

- みんぱく公開講演会「スイカで踊る、クジラを祭る――生き物と人　共生の風景」東京・日経ホール　2016年11月10日
- 特別研究プレシンポジウム　2017年３月26日（館外外国人：カナダ１名）【要旨集】
- 特別研究国際シンポジウム　2018年３月19-21日【要旨集】（館外外国人：６名　米国１名、フランス２名、ブラジル１名、バングラデシュ１名、英国１名）
- 国立民族学博物館主催研究会（パレオアジア文化史学B01班会議との共催）、2018年３月22日（海部陽介・井原泰雄、セルジェ・バウシェ）

この他、2018年度は、出版準備（出版社への申請ほか）をおこなった。

研究成果の概要

- 【先行研究】Ikeya, K. 2017 環境人類学の動向 *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45
- 【シンポジウム】池谷和信 2018「地球の生き物と人との共生を求めて――民博・特別研究のシンポジウムから」民博通信 162、12-13頁
- 【シンポジウム】Ikeya, K. 2018 *MINPAKU Anthropology Newsletter* 46

特別研究に関連した成果の公表実績

- 2018年３月19日～21日、国際シンポジウム「歴史生態学からみた人と生き物の関係」では、歴史生態学から見た人と生き物の関係というタイトルの公開シンポジウムが開催された。ここでは、英語と日本語の間での同時通訳が行われることで、一般の方々を含めての数多くの参加者を得ることができた。

  英文論集の出版を行う予定である。

2　テーマ区分：②食料問題とエコシステム
プロジェクトリーダー：野林厚志
研究課題：食料生産システムの文明論

研究目的

人類にとって食とは生態学的、栄養学的充足を満たす以上の役割がある。すなわち、食とは最も原初的な富の形態であり、生産（採集や狩猟も含む）、貯蔵、交換といった諸行為を通じて、より大きな経済活動を構築する端緒を与えた。同時に、地域の環境と密接にむすびついた食は、土地の人々にとって社会的、文化的アイデンティティの表明となり、同時に共食や贈与交換に代表されるコミュニケーション手段の役割も果たしてきた。これらはその範囲を広げることにより、国家や共同体の統合原理を構成する要素ともなり、近年では「ガストロディプロマシー（美食外交）」に見られる国家間の経済的、政治的関係を深めるための外交手段としても注目されている。

本来、食とは個体が生命を維持するための要素であり、地球の生態循環のなかで機能するものである。したがって、現代社会における大量生産、大量廃棄という食糧資源のあつかわれかたは、これまで人類社会が経験してこなかった文明の新たな暗部ともいえる。政治経済的な脈絡の中で生態学的適応に乖離している現代社会の食の実相が生成されるメカニズムを、従来のマクロな食糧問題へのアプローチに対し、文化人類学的な切口でとらえることが本研究の主要な目的である。

本研究課題では人類が食を操作してきた営みを批判的に検討する。具体的には、食料生産のシステムが、家庭、地域社会、国家、経済地域園をどのように接合しているのか、個々のレベルで生じる格差と食料生産、供給、消費との関係、伝統文化、食文化の維持と食料生産システムとの矛盾等を核となるテーマとして設定し、文明社会を支えてきた文化的装置として食料の生産の将来におけるありかたを見直そうとするものである。

実施状況

- 国際シンポジウムの準備会合
  前年度に全体の構成を計画しており、それぞれの内容に適切な内外の招聘研究者の人選を検討し、最終的な構成と内容を決定した。
- *MINPAKU Anthropology Newsletter* の特集編集
  MINPAKU Anthropology Newsletter 47号に、‘Food Culture’ のタイトルでの特集を編集、刊行し、国際シンポジウム報告者への事前送付を行った。
- 国際シンポジウムの開催
  2019年３月17日～20日の日程で、国際シンポジウム ‘Making Food in Human and Natural History’ を開催した。17日は、事前準備の会合と民博の見学会を、18日、19日は、国立民族学博物館において研究発表と討論を、20日は発表者、討論者による滋賀県琵琶湖東岸地域の巡見とワークショップを実施した。

研究成果の概要

シンポジウム本体は、２日間、４つのパネルで構成した。具体的には、1) Food and Ecology（野林担当）、2) Categorization of Food（河合担当）、3) Community, Sociality and Food（宇田川担当）、4) Strategy and Governance of Cuisine（韓担当）、という構成であったが、発表内容とその後の議論から、観光、フードスケープ、ローカルフードといった課題にも展開させていく必要性が強く意識された。このことから、成果刊行論集では、全体の構成を組み直したものを発展的に提案することを検討している。従前の課題（観光、フードスケープ等）が、特に海外の研究者を中心に取り上げられたのは、現在の特に人類学を中心とした食研究の動向が現れたものと考えてよい。これに対して、日本側の研究報告では、本特別研究の課題である文明という視点、またその中のサブテーマである環境との関係が意識された。同時に、発表の内容（濵田、大澤、宇田川）や討論（池谷）に日本の事例がもりこまれることによって、本シンポジウムを日本の民博で開催することの意義も示されたと考えている。

総合討論では、吉田憲司館長、本館ならび日本の食研究を牽引した石毛直道元館長にも議論に加わっていただいた。特に石毛元館長の参加を通じて日本の食研究の蓄積を内外の研究者にあらためて理解していただく機会を得ることができた。

シンポジウム本体には館内の若手研究者、在日の外国人若手研究者を得ることができた。これらの参加者が、シンポジウムでは対象とならなかった、1) 寒冷地域、熱帯地域の食生産と消費との関係、2) 科学技術と食料生産の課題、についてのコメントや質問を提示するなど、積極的な議論を展開することができた。

20日の巡見型ワークショップでは、日本のローカルフードの生産の現状、環境への配慮を重視した取組を実際の現場で議論する機会が得られた。これは海外からの招聘研究者のみならず、日本側の参加者にとってもより具体的に問題意識を深める機会となり、成果刊行へ向け大きな意義があったと考えている。

以上のことから、家庭、地域社会、国家、経済地域圏における、特に食料生産、供給、消費との関係、伝統文化、食文化の維持に、ローカルフードや観光の振興が与える影響といった視点からの食の将来におけるありかたを見直すという点においての本課題の目的はおおむね達成できたと考えている。

特別研究に関連した成果の公表実績

出版

MINPAKU Anthropology Newsletter No47. 2019

公開シンポジウム

International Symposium 'Making Food in Human and Natural History'

18-20 March 2019, National Museum of Ethnology

3　テーマ区分：③マイノリティと多民族共存

プロジェクトリーダー：寺田吉孝

研究課題：パフォーミング・アーツと積極的共生

研究目的

共生は、可視的な差別は概ね解消されているが、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」と、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような「積極的な共生」に分けることができる。本プロジェクトは、音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツが「積極的な共生」を実現するために果たしうる役割と可能性を探ることを目的とする。ここで言うパフォーミング・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなど、身体を活動の基盤とする幅広い活動をさす。元来、パフォーミング・アーツは、身体を媒体とし視覚中心的な認識体系を超える（とは異なる）人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、パフォーミング・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などの表現として利用されてきたことも事実である。そこで、本プロジェクトでは、パフォーミング・アーツが「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探りたい。

人間の集団は、その規模や地域に関わらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な指標（徴）により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団（マイノリティ）の文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域などの公的な文化表象や教育から排除される傾向がある。そのため、マイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例がこれまでに数多く報告されてきたが、パフォーミング・アーツと共生の関係をテーマにした研究は数少なく、また地域的にも限定的であった。本プロジェクトでは、世界各地で関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーミング・アーツを「積極的な共生」実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指す。

実施状況

2019年度の国際シンポジウムのテーマ設定と人選を念頭におきながら、以下の活動を行った。

① 研究集会「先住民と共生」（2018年５月18日）

② 民音研究所年次会議「ミュージキングにおける人権と包摂」参加（2018年10月６日）

③ みんぱく公開講演会「音楽から考える共生社会」開催（2018年11月２日）

④ インドにおける予備調査（2018年12月25日～2019年１月３日）

⑤ 民音研究所の訪問と意見交換（2019年３月18日）

研究成果の概要

①では、先住民によるパフォーミング・アーツの実践に関して、ロッセーラ・ラガッチ氏（国際研究協力者、トロムソ大学）、北原次郎太氏（共同研究員、北海道大学）が報告を行い、共生に向けた活動に関する情報共有と

議論を行った。②と⑤では、民音研究所が主催する年次会議に参加し、オリビエ・ウルバン所長と協働の可能性を議論した。同研究所の活動目的とする「平和構築活動に資する音楽の潜在的応用性に関する学際的探求」は、本プロジェクトの関心事項でもあるため、シンポジウムに向けて互恵的な関係を構築することを確認した。また、年次会議では、基調講演を行ったスヴァニボル・ペッタン氏（国際研究協力者、リュブリャナ大学）とも協働の可能性を検討した。③では、特別研究の広報をかねた公開講演会「音楽から考える共生社会」を東京で開催した。講演者の中村美亜氏は、九州大学が2015年より企画運営するソーシャルアートラボ（SAL）の推進者であり、人間の新しいつながりを生み出す芸能実践を支援する活動を続けている。公開講演では、中村氏が報告した音楽の「共創」に関する活動事例を通して、本プロジェクトの目的との接点を探った。④では、インド南部タミル・ナードゥ州における太鼓演奏を通じた共生への取組みを実見し、主催者であるマドラス大学教授のゴーパーラン・ラヴィンドラン氏（国際研究協力者）とシンポジウムへの参加の様態について打ち合わせをおこなった。上記のように、シンポジウムへの招聘予定者と発表に関する打合せを行い、連携機関との協働にむけた調整を行うことで、開催に向けた準備を進めた。

特別研究に関連した成果の公表実績

2018年度は本プロジェクトの初年度にあたるため、本格的な成果の公開はないが、プロジェクトの背景と趣旨の概要を『民博通信』164号（2019年３月刊行）の巻頭エッセイにおいて紹介した。また、初年度最大の事業である「みんぱく公開講演会」(③）は、プロジェクトの目的や射程について広報する機会となった。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースを作成する「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発 WG を置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。

2018年度は、「開発型プロジェクト」４件、「強化型プロジェクト」５件を実施し、２つのデータベースを新たに公開した。また、国際シンポジウム２件、国際ワークショップ４件を実施した。台湾の国立台湾歴史博物館との国際学術協定に基づき、国際連携展示「南方共筆――継承される台南風土描写」を国立台湾歴史博物館で開催した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年４月～2019年３月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年４月～2020年３月
飯田　卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年４月～2021年３月
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	2018年４月～2022年３月
西尾哲夫	中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	強化型	2017年４月～2019年３月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	2017年４月～2020年３月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	2018年４月～2020年３月
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築――オセアニア資料を中心に	強化型	2018年４月～2020年３月
南　真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	2018年４月～2020年３月

* 2018年度実施分
**開発型は４年以内、強化型は２年以内

「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林　厚志　2015年４月～2019年３月

実施状況

1）国際シンポジウム 'Ecological and cultural approaches to Taiwan and neighboring islands' を開催した。(2018年７月19-21日、参加者数41名)

2）本プラットフォームを活用した海外からの熟覧調査を45名（台湾40名（うち原住民族20名）、カナダ４名、アメリカ合衆国１名、2018年７月17日、18日実施）受け入れ、資料調査、研究を共同で実施した。

3）本プロジェクト推進を目的の一つとして締結している国立台湾歴史博物館との国際学術協定にもとづき、プラットフォームへの組み込みを検討している学術アーカイブス（内田コレクション）を活用した国際連携展示「南方共筆」(国立台湾歴史博物館、2018年10月２日-2019年４月14日）を共催で開催した。

4）公開中の台湾資料のプラットフォームのデータの精査を行うとともに、コレクション情報の追加のための資料整理と調査を実施した。具体的には、国文学研究資料館寄託の台湾関係資料ならびに東京大学人類学教室寄託の台湾関係資料の収集時の記録を整理し、精度確認のための調査を実施した。

5）プラットフォームへの組み込みを検討している学術アーカイブス（内田コレクション）の画像データ277件（4records）の精査を行い、掲載可能な状態にした。

6）琉球関連資料のプラットフォームへの掲載の可能性について検討した。

7）初年度に公開したプラットフォームを活用した調査、ワークショップで得られた知見をもとに、プラットフォームの完成版のシステム更新を行った（これから)。

8）台湾側の来年度の熟覧実施計画立案の支援を実施した（台中市政府文化局、台中市繊維工芸博物館準備所「108年館蔵泰雅苧麻織物研究国際交流計画」)。

成果

研究計画にもとづき、1) 国際シンポジウムを実施し、これまでの調査や各年度に実施したワークショップでの知見を統合化するための研究報告、議論を行った。報告原稿はこれらの議論をふまえたうえでの改稿を行い、Senri Ethnological Studies に論文集の刊行を申請する予定である。ソースコミュニティ当事者の原住民族側の発意で、海外からの熟覧者の受け入れ、共同研究を実施した。台湾側の熟覧は、(1) 大学と原住民族との共同計画、(2) 地域コミュニティの文化復興事業者、の２つに類型されるとともに、それぞれが単一の民族集団ではなく、異なるエスニシティの成員によって構成されていることに特徴を有した新たな取り組みとなっていた。国際連携展示は、本プラットフォームで公開している標本資料が収集された時期と重なる時期の台湾の様子を画像とその情報とで構成したアーカイブスと同時期に収集された資料を活用した共催展示であり、これらの資料についても国際共同公開を国立台湾歴史博物館と検討している。公開中のデータや今後掲載の可能性をもつデータの精査を継続して実施し、データの精確さを向上させている。

成果の公表実績

○出版

査読付き論文

2018 「エスニシティを可視化する手段としての衣服――台湾原住民族サキザヤ族の民族認定を事例として」『国立民族学博物館研究報告』42(4): 379-409。

概説

2018 「民族文化を伝える手法と課題――国立民族学博物館における取り組み」湯浅万紀子編『ミュージアム・コミュニケーションと教育活動』pp. 209-219、東京：樹村房。

その他

野林厚志　2018 「プラットフォームとしてのデータベースの活用――台湾でのワークショップの経験から」『民博通信』162：10-11。

○口頭発表

Nobayashi A.　2018 'Evoking the memory and creating a new lineage in the museum: handicraft of Taiwan indigenous peoples' The 23rd JSPS "Science in Japan" Forum, The National Museum of the American Indian, Washington, DC. 2018.6.15

野林厚志　2018 「成果なくして還元なし――学問の社会的貢献という呪縛をとこう」総研大文化フォーラム・シ

ンポジウム「ひろがる知、つながるひとの輪」国立民族学博物館、2018.11.24

○国際シンポジウム

'Ecological and cultural approaches to Taiwan and neighboring islands'（国立民族学博物館2018年７月19-21日、参加者数41名）

○台湾側刊行実績

『織藝串起部落老文物的考察――日本國立大阪民族博物館及奈良天理大學天理參考館收藏早期台灣原住民織品之日本博物館考察計畫』新北市烏來區原住民編織協會、2018。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：5,671件

レコード数：87,139件

「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」

代表者：齋藤玲子　2016年４月～2020年３月

実施状況

データベースの基礎情報として、引き続き、民博が所蔵しているすべてのアイヌ資料について、既存の標本資料詳細データベース（館内版）の情報をベースに、関連文献等を探してつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。併せて、文献の関係箇所のデジタル化を進めた。また、データベースに不慣れな利用者にも資料の検索がしやすいように、『北海道開拓記念館収蔵資料分類目録１　民族』（現・北海道博物館）を参考にして、独自の分類をおこなった。併せて、資料名について整理し、その表記を統一して、アイヌ語と英語を付す作業をほぼ終えた。

さらに、共同研究員とともに特定の資料（今年度は編み袋：サラニㇷ゚）についての熟覧調査をおこない、情報の付加に努めた。アイヌの工芸家と収蔵資料の調査をし、情報の聞き取りをおこなった。

館外の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員を共同研究員として、進捗状況をふまえて、有用なデータベースにするための議論および次年度のシンポジウムの打ち合わせもおこなった。

成果

上記のとおり、本年度も情報の収集と確認をおこない、既存のデータベースで不明だった年代や地域等の情報の修正・追加入力を進めるとともに、標本資料について書かれた文献を収集しつつ、デジタル化もおこなった。また、資料名の表記の統一とアイヌ語名・英名を付した。

さらに、共同研究員とともに編み袋（サラニㇷ゚）についての熟覧調査をおこない、技法や素材について新たな情報を付加することができた。アイヌの工芸家からも標本資料についての情報収集をすることができた。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：5,314件

レコード数：212,560件

「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」

代表者：飯田　卓　2017年４月～2021年３月

実施状況

サハラ以南アフリカ各国から収集された民博所蔵の資料の情報を整理し、日本語と英語で読めるようなテスト版データベースを制作した。資料の点数は、今年度初めの時点では20,737点としていたが、重複などが後から判明したため、最終的に20,651点になった。このデータベースは、インターネットを通じて、パスワードを知る関係者だけが見られる状態になっている。

ケニアでは、このデータベースを提示して、今後の調査協力について話しあいを進めることができた。１月には、カメルーンから複数の研究者を民博に招いてワークショップを開催し、主としてこのデータベースを閲覧しながら、カメルーンの研究者やソースコミュニティの人びとと民博の資料を活用していく話しあいを進める予定である。また２月にも、エチオピアやボツワナの資料について研究を進めていくと同時に、資料についての理解を深めてもらうための活動をどのように展開していくべきか、現地の研究者とともに討論する計画である。

今年度の前半には、地震やメールサーバーのトラブルなどのために、民博全体の情報関係業務が予期せぬかたちで集中し、それにともなってデータベースの構築が若干遅れることとなった。しかし、完成したデータベースを用いて、年度後半には予定どおり研究交流が活発化しており、来年度はこの分野での活動をさらに加速させる予定である。

成果

データベースが完成したことにより、アフリカに関わる日本の民族誌博物館のコレクション状況が一目瞭然で理解できるようになった。折りしも、フランスのマクロン大統領はアフリカの旧植民地各国に対してフランスの博物館所蔵品の一部を返還する方針を決定しており、博物館の動向は大きく注目を浴びている。民博に所属するアフリカ関係の研究者は、すぐに返還が必要だとは感じていないものの、議論を始めていくためにデータベースを徐々に公開していくことは重要であり、研究プロジェクトにおける位置づけもますます重くなっていくと予測できる。

完成したデータベースの内容は、標本資料名の表記や収集者名のプライバシー保護などに関して、いっそうの改善の余地を残している。今後はこうした点に問題がないよう完全なチェックを済ませるとともに、フランス語やポルトガル語、スワヒリ語などでも利用できるようデータベースを多言語化していく作業が残されている。

成果の公表実績

（学会口頭発表）

飯田　卓 「地理的束縛からの脱出――アフリカニストとアフリカ人のための博物館をめざして」日本アフリカ学会第55回学術大会（2018年５月27日、北海道大学、札幌）

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：20,651件

レコード数：20,651点×44項目（写真を除く）＝908,644件

（ただし一般公開ではなく、研究者を中心とした関係者による限定公開）

「中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に」

代表者：寺村裕史　2018年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトでは、広大な地域をロシア、モンゴル、中央アジアの３地域に分け、民博の中央・北アジア展示場で公開されている文化資源情報を核として、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化し、その成果をもとに中央・北アジア文化資源情報データベースを構築することを目的としている。今年度は、主に下記の調査研究を実施した。

1）主にモンゴル資料を中心に、既存の民博標本資料データベースから当該地域の標本資料に関する部分を抽出し、現地語に詳しい総研大の院生をRAとしてデータ整理作業に従事してもらった。具体的な作業内容としては、日本語の標本名と現地名の対応チェックならびに現地語の入力作業である。

2）上記１と並行して、日本語・英語の基本的なデータ整理作業も開始した。

3）ウズベキスタン資料を中心に、標本資料データベースから詳細情報を抽出しデータ整理を進めるとともに、現地（ウズベキスタン共和国・サマルカンド）に赴いて、連携機関や現地社会とのネットワーク作りのための調査・打合せを実施した。

成果

今年度は、プロジェクトの１年目であることもあり、標本資料データの抽出・整理、ならびに連携機関や現地社会とのネットワーク化のための準備作業が中心となった。そうした作業経過において、ウズベキスタンにおける現地社会のインフォーマント（ウズベク人：ウズベク語に加え、ロシア語・タジク語・日本語にも堪能）と、今後の共同研究についての打合せ・研究協力依頼ができたことは、ひとつの成果であると考えている。フォーラム型が掲げる資料情報の多言語化に関して、今後の研究の進展が期待できる。

さらには、その現地調査中に、中央・北アジア展示のサブセクション「オアシス都市のくらし」に関わる映像取材と、現地のバザール内の360°VR動画撮影も実施し、民博所蔵の標本資料と実際に現地でモノが使われている様子（物質文化）とを繋ぐ接点としての活用も検討することができた。

モンゴル資料についてはデータ整理を進める一方で、シベリア・極北の資料に関しては、どのようにデータ整理ならびに共同研究を実施していくのかについて、今後の検討課題である。

成果の公表実績

今年度からのプロジェクトであり、まだ公開した成果は特にない。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：未定

レコード数：未定

「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」

代表者：西尾哲夫　2017年４月～2019年３月

実施状況

本プロジェクトは、①片倉もとこ名誉教授が収集したアラビア半島遊牧社会に関連する資料コレクションに関する調査ならびにデータベース化、②近現代イラン民衆工芸品であるグラック・コレクションに関する調査ならびにデータベース化、③中東地域からグローバル化したコーヒー文化にかかる標（しめぎ）コレクションに関する調査ならびにデータベース化の三つのサブプロジェクトから構成される。本年度においては、昨年度に準備したフォーラム型データベースの基本プラットフォームに従い、サブプロジェクト毎に資料情報の整理・追記を行い11月末の段階でβ版を作成し、表記の修正などを進め、データベース公開の準備を進めた。

具体的には、アラビア半島遊牧社会資料のデータベース化については、協力機関である片倉もとこ記念沙漠財団との協力を進め、民博共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」との共同調査として、2018年５月および2018年12月～2019年１月に主な資料の収集地であるサウジアラビアのワーディ・ファーティマにおいて追跡調査を実施した。またフォーラム型の研究成果の可視化・高度化による社会発信を目的に、片倉コレクションをベースとした企画展（2019年６月～９月）開催に向けた準備を進めた。

グラック・コレクションのデータベース化については、ハワイのシャングリ・ラ邸イスラーム美術博物館やニューヨークのメトロポリタン博物館など海外の美術館等に所蔵される類似のイラン工芸品コレクションに精通するペルシア美術工芸の専門家を英国より招へいし、日本国内にペルシア美術工芸を所蔵する岡山オリエント美術館や大阪市立東洋陶磁美術館などの美術博物館の学芸員との情報交換を行った。コーヒーコレクションのデータベース化については、昨年度から行っていた新規に受け入れた同コレクションの成立過程および各収蔵品にかかる基本情報の整理を実施し、特に元の収集者が雑誌や著書等で標本資料に言及した文献情報およびコーヒー抽出器具の情報を追記していった。

成果

昨年度に整理したデータベース全体の設計フォーマットに従い、基礎的データの入力作業を行うとともに、フォーラム型の特色である使用地域の人々による情報追記を可能とするために多言語化（英語に加え、収集／使用地域の言語＝アラビア語やペルシア語等）のフォーマットを整理した。

アラビア半島遊牧社会資料のデータベース化については、約347点（民博所蔵189点、片倉もとこ記念沙漠財団所蔵158点）の標本資料のデータベース化作業として、主な資料の収集地であるサウジアラビアのワーディ・ファーティマで現地の博物館と協力しながら５月および12月に追跡調査を行い、情報データの追加・修正を行った。グラック・コレクションのデータベース化については、176点の標本資料のデータベース化のために、国外からペルシア美術工芸の研究者を招へいし、情報の追加を行った。その結果、本館に新たに16点のグラック氏が収集した資料が発見され、新たに資料登録を行った。コーヒーコレクションのデータベース化については、329点の標本資料のデータベース化のために、昨年度に収集した標（しめぎ）氏による関連文献およびコーヒー抽出器具の関連文献から、標本資料についての情報の追記・修正を行った。

またデータベースのソースコミュニティの人々との共有を目的に、中東地域における博物館施設のデータベース化を現代中東地域研究プロジェクトと共同で行うとともに、研究会を開催した。加えて、共創的なデータベース構築に向けて、昨年度締結したイラン国立博物館との協定に基づき、国際シンポジウムを2019年３月に開催した。さらに片倉コレクションをベースとする2019年６月開催の企画展において、フォーラム型の研究成果の可視化・高度化による社会発信を行う。

成果の公表実績

第１回現代中東地域研究国立民族学博物館拠点「文化遺産とミュージアム」研究班研究会共催研究会（2018年６月13日開催）

第２回現代中東地域研究国立民族学博物館拠点「文化遺産とミュージアム」研究班研究会共催研究会（2018年11月22日開催）

International Symposium *"Didgah-e Khavarmiyane be Farhang-e Madi*（*Middle Eastern Perspective on Material Culture,*）" National Museum of Iran, 10 March, 2019.

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：710件

レコード数：8,400件

「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」

代表者：太田心平　2017年４月～2020年３月

実施状況

本館の朝鮮半島関連の標本資料、写真・映像資料のうち、メタデータが不十分なもの3,000点について、昨年度から実施していた情報の追加作業を終えた。また、国際共同研究をしているアメリカ自然史博物館（以下「AMNH」）の朝鮮半島関連の標本資料、写真・映像資料のすべても、同様に追加作業を終えた。そして、本館が学術交流協定を有する韓国国立民俗博物館の諮問のもと、韓国のソースコミュニティと協働しはじめた。

今年度の実施内容は、４点に分けられる。(1) 本館の資料に関する10,800点のレコード（標本資料のキーワード600点＋標本資料名のハングル表記600点＋標本資料名のハングルのローマ字転写600点＋サムネイル写真3,000点＋標本資料の最終確定した日本語名3,000点＋標本資料の英語名3,000点＝10,800点）を追加した。(2) AMNH の資料に関し、本館の資料との関連づけに必要な4,412点のレコード（標本資料名のハングル表記1,088点＋標本資料名のハングルのローマ字転写1.088点＋標本資料のキーワード1,088点＋写真資料のキーワード30点＋サムネイル写真1,118点＝4,412点）を追加した。(3) 両館の資料をまとめて分類するために、本館の活動状況を AMNH の教員にも把握してもらい、かつ昨年度に仮作成したカテゴリーを彼／彼女らと修正して、より使いやすいものに見直した。(4) 韓国のソースコミュニティの２つのグループとの協働を試み、ソースコミュニティとの本格的な協働を次年度に実施できるよう計画を立てた。

なお、本プロジェクトがひとつの特徴としているキーワードによるカテゴリー分類方法は、本館と AMNH の研究者はもとより、韓国およびオランダの研究者の協力も得て、より良いものへと改善されている。

成果

上記の (1) (2) (3) は、本館の担当教員２名、AMNH の担当教員２名（Laurel Kendall, Alex de Voogt）、35歳以下の若手研究者５名との共同研究によりおこなった。この５名は、いずれも外国人留学生であり、英語圏では学術活動を行ったことがなく、うち４名は女性である。教員たちは、若手研究者たちにアルバイトやリサーチアシスタントの機会を提供しつつ、資料を熟考する研究をともにおこなった。特に３名の若手研究者たちは、AMNH の訪問研究者（Visiting Researcher）という経歴もえられた。このことから、各自の研究の進展はもちろん、彼／彼女らが研究者として活動の幅を広げていく機会も提供できた。

上記 (4) は、本館が学術交流協定を有する韓国の国立民俗博物館の諮問をえながら、研究代表者がおこなった。ソースコミュニテイの２つのグループとの協働が挙げられる。

まず、伝統文化から現代を生きるための知恵をえようとする韓国人の女性のグループと協働した。彼女らからは、このデータベースを活用することで、新たな日常の再発見がありそうだという反応をえた。たとえば、20世紀の前半に作られ、本館が所蔵するポジャギ（Pojagi; アップリケで作った風呂敷）のデータを彼女らに見せたところ、彼女らは「買い物に使うエコバッグは何の愛着も湧かないため、使い続けることがなく、結果的にあまりエコフレンドリーではないが、もともと家族の思い出がつまった古布を自分で縫い合わせて作るポジャギのバッグならば、その点を解決できるのではないか」という、彼女らの日常を改善するアイデアが出た。

また、研究代表者が20年間にわたって調査を続ける1960年代生まれの韓国民主化運動世代のグループにも、協力をえられることとなった。多くの先行研究は、彼／彼女らのライフ・ヒストリーが国家政治や世界経済への言及ばかりで埋め尽くされ、結果的に彼／彼女らのミクロな人生の個人的記憶（personal memories）が、マクロな政治

経済の社会的記憶（social memory / collective memory）に束縛されていると指摘してきた。研究代表者がおこなったこれまでの研究でも、個人の個別の記憶を掘り起こす作業はいつも困難で、民主化の進展などの国家政治や資本主義の限界などの世界経済で自分たち自身のライフ・ヒストリーを語るという強い傾向が彼／彼女らにはあった。しかし、本館が所蔵する資料のデータを見ながら語る彼／彼女らのライフ・ヒストリーは、まったく違っていた。伝統的な生活用品からは、祖父母と暮らした思い出の日々、その時に見聞きした印象深い出来事などが初めて聴き取れた。70年代や80年代の標本資料を見ながら語ってくれたことは、これまで彼／彼女ら自身も語ったことがなかったという青春時代の政治経済的でない日常だった。その作業の数日後、ある参加者は自らのブログで、「ああ、わたしの人生って、民主化運動以外にも色いろとあったんだなあ。わたしの人生は、思っていたより、豊かだったのかもしれない」と述べていた。これらの作業を次年度に進めていくことで、韓国民主化運動世代の記憶を政治経済から解放していくような、新しい研究展開が期待でき、同時に彼／彼女ら自身が自己を再発見するような契機となっていくものと期待できる。

成果の公表実績

A. de Voogt, S.C. Ota & J.W.B. Lang

2018 “Work Ethic in a Japanese Museum Environment: A Case Study of the National Museum of Ethnology” (co-authored by Alex de Voogt, Shimpei C. Ota & Jonas W.B. Lang), *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 42(4): 435–448.

S.C. Ota

In print “Academic Hypothesis and Social Reliability: On the Dual Structure of the Korean Spiritual World,” M. Hayakawa, A. Kato & K. Matsukawa (eds.) *The Interpretative Turn and Multiple Anthropologies*.

In print “The First Pancake Is Always Lumpy: Toward a Poliphonic Exhibition of Korean Ancestor Worships,” *Senri Ethnological Studies*.

太田心平

2018 「天然痘の痕」,『文部科学教育通信』445：２。

2018 「キムジャンが続くとき――女性たちの協働から、家族行事、都市型イベントへ」,『vesta』112, 味の素食の文化センター: 38–41。

2018 「データベースの自由検索が不自由なとき――標本資料の検索を変える一試み」,『民博通信』163号, 人間文化研究機構国立民族学博物館: 10–11。

上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大（編）

In print 『문화인류학에서 보는 동아시아』, 朴志煥（訳）.

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：5,806件

レコード数：15,212件

「中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築」

代表者：八木百合子　2018年４月～2020年３月

実施状況

アメリカ展示場にある中南米地域に関連する標本資料を対象にそれらに関連する背景情報を付加することで情報の高度化をおこなった。具体的には、個々の資料の基本情報に加えて、収集、使用、製作、展示に関する情報を付けたほか、参考となる文献情報と専門家による解説の二つを加えることで、資料にまつわるより詳細な情報を加えた。これらの情報については、日本語版の整備を完了し、それをもとに英語版および西語版の基本情報の枠組みを作成し多言語化に向けた準備をおこなった。

また、展示場に展示されている対象資料のほかに、本プロジェクトで重点的に取扱う関連品目（メキシコのアレブリヘ、アンデス関連の標本資料）のうち、アンデスの箱型祭壇、聖像、および焼物に関しては、実際に現地で制作者と面会し、資料に関するコメントを聴取した。さらに現在の製作状況に関する写真の撮影・収集もおこなった。

このほか、収集当時の現地の状況や製作の様子を伝える情報として、関係者よりスライドを収集した。そのうち、藤井龍彦名誉教授から借りた約8,000点のスライドをデジタルデータとして取り込み、関連する画像の選定作業をお

こない、標本資料との紐付けをおこなったほか、故友枝啓泰名誉教授のコレクションについては、写真の管理責任者に利用の許可を申し出た。

成果

今年度は日本語での情報の付加作業と関連する資料の収集を重点的におこなった。本プロジェクトの対象なる標本資料として398点を選定し、それらの背景情報の付加作業を終えた。文献および専門家の解説等の詳細情報については、引き続き可能な限り収集を続けるが、各資料には最大で30件の資料情報を付加した。また、重点資料のうちアンデス関連の箱型祭壇43点、聖像21点については、それらの情報以外に制作者または専門家からのコメントを付け、制作の参考になる画像資料をそろえた。とくに、ペルーの箱型祭壇制作の二大巨匠であるフロレンティノ・ヒメネス氏とヘスス・ウルバノ氏、および聖像制作のイラリオ・メンディビル氏の資料については、本人が他界していたため、後継者となる親族と面会し、彼らから当館が所蔵する資料に関する詳細情報を収集した。

成果の公表実績

＜口頭発表＞

八木百合子

2019 「アンデスの箱型祭壇が伝えるもの――農村の生活から歴史記憶まで」第485回国立民族学博物館みんぱく友の会講演会、千里文化財団、国立民族学博物館

2019 「アンデスの箱型祭壇――モノのポータビリティと信仰」共同研究会『モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相』国立民族学博物館

＜コラム＞

八木百合子

2019 「国立民族学博物館の収蔵品㊹　首長人形の軌跡」『文部科学 教育通信』458：２。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：標本資料398件（この他に写真画像8,268件）

レコード数：約10,000件（推計）

「民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築――オセアニア資料を中心に」

代表者：丹羽典生　2018年４月～2020年３月

実施状況

写真資料の地域ごとの分類を行った。そのうえで共同研究員との相談のもと、データベースに掲載する項目を策定した。具体的なデータとしては、ソロモン諸島、フィジー、サモア、フランス領ポリネシア、クック諸島等のオセアニア島嶼社会にて長年にわたり研究している専門家との共同のもと写真資料のデータを精査した。とくにガラパゴス諸島の関係写真資料については、日本ガラパゴス協会及び日本における同島の第一人者である伊藤秀三氏（長崎大学名誉教授）の協力のもと、本資料のもつガラパゴス研究の歴史における価値と位置づけの評価と生物種の学名の同定を行った。現地社会との関係としては、フィジーのイタウケイ信託局、フィジー国立博物館にて、また同じくソロモン諸島の国立博物館にて写真資料の情報交換と将来的な展示の開催について意見交換をした。ケンブリッジ大学博物館、カリフォルニア科学アカデミーに所蔵されている文献資料と写真データの調査及び研究者との情報交換は、それぞれ２月と３月に行う。

成果

ソロモン諸島、フィジー、サモア、フランス領ポリネシア、クック諸島における地域名称についての整理は概ね終了した。フィジーにおいては、何枚かの写真が朝枝撮影ではなく、ポストカードであることを明らかにした。ガラパゴス諸島の写真では、当時の科学調査の内容といまでは失われた自然環境や当時の在留外国人の生態を明らかにする写真が含まれていることが判明した。成果公開としての展示は、ソロモン諸島側も積極的であり、適宜進めている。

成果の公表実績

＜出版＞

丹羽典生　2018 「日本から遠く離れて①　朝枝利男とは誰か」毎日新聞夕刊２面。

丹羽典生　2018 「日本から遠く離れて②　ガラパゴス探検」毎日新聞夕刊２面。

丹羽典生　2018 「日本から遠く離れて③　スナップ写真」毎日新聞夕刊２面。

丹羽典生　2018 「日本から遠く離れて④　収容所体験と戦後」毎日新聞夕刊２面。

＜論考＞

Lucie Carreau 2018 Made to measure: Photographs from the Templeton Crocker expedition. In Lucie Carreau, Alison Clark, Alana Jelinek, Erna Lilje & Nicholas Thomas（eds.）*Pacific Presences.* Volume 2 Oceanic Art and European Museums. Leiden: Sidestone Press, pp. 139–153.

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：1,831件

レコード数：4,340件

「ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築」

代表者：南　真木人　2018年４月～2020年３月

実施状況

共同研究員を招へいし、７月に第１回研究会を開催した。1982年にバトゥレチョールで録音された音源の曲様式と奏法の分析（伊藤香里）、『季刊民族学』の特集の合評、今後の過程や文化資源の返還／協同の意義について議論した。ネパール出張では、1982年に撮影ないし録音された映像音響資料の肖像権者ないし遺族を訪問し、ウェブサイトに掲載する許諾を取得した。さらに、82年の音源と比較するためのデータベースのコンテンツとして、サーランギを演奏する音楽家のインタビューと演奏の映像取材を行った。映像を撮影できた人物や「バンド」は以下の通りである。

1.「アヌグラハー」演奏（GCAO、カトマンドゥ・ゲスト・ハウス）
2. カルナ・バハドゥール・ガンダルバ演奏（バーラト・ネパリによる指導）
3. キラン・ネパリ演奏（キルティプル出身、「クトゥンバ」）
4. ラムジ、モンゴル、スッバの演奏（GCAO、マナン・ホテル）
5. バーラト・ネパリ演奏（バクタプル出身、現スワヤンブー）
6. プリンス・ネパリ演奏（キルティプル、「スムリティ」、ニューオリンズ・レストラン）
7. クリシュナ・バハドゥール・ガンダルバ演奏、聞き取り（GCAO、ゴルカ郡ターティポカリ）
8. ディポック・ガンダルバ聞き取り（GCAO、ゴルカ郡パルンタール）
9. 別のディポック・ガンダルバ聞き取り、サーランギ製作（GCAO、タナフ郡バンサール）
10. マニシュ・ガンダルバ演奏（「ファンタスティクス」、ダルバル・ラウンジ）
11. アジャイ・ネパリ、サミュエル・ガンダルバ練習（「アダプターズ」）
12. アルジュン・ネパリ演奏、聞き取り（バクタプル）
13. マニシュ・ガンダルバ、ビクラム・ガンダルバ演奏、聞き取り（パシュパティナート）
14. プジャン・ガンダルバ聞き取り（GCAO 会長、サーランギ・レストラン）
15. アシム・シェルチャン演奏、聞き取り（「カンダラ」）
16. ダン・バハドゥール・ガエク夫妻演奏（バトゥレチョール）
17.「アダプターズ」演奏（デリマ・ガーデン・カフェ）

GCAO: Gandharba Cultural and Art Organization

成果

研究会を開催しデータベースの内容に関する議論を深めることができた。また、1982年に撮影ないし録音された映像音響資料の肖像権者ないし遺族を訪問してウェブサイトに掲載し共有する意義を説明し、公開の賛同が得られた。ただし、データベースのコンテンツが確定した段階で書面の覚書を取り交わす作業が残っている。82年の資料との比較に用いる、現在のガンダルバとサーランギの関わりを示す映像は、予定通り撮影することができた。他方、82年の音源と写真の入手は、藤井知昭名誉教授のオフィス移転などの事情で、未だ達成できていない。2019年１月末

に国際研究協力者のラム・バハドゥール・シュレスタ氏を招へいし、新規映像の整理と翻訳を依頼する予定である。

成果の公表実績

【論文】

Terada, Y.

2018　Visiting Nepal after 34 Years, *Asian-European Music Research E-Journal* 1: 29–36.
(http://www.academia.edu/37319536/VISITING_NEPAL_AFTER_34_YEARS)

【映像制作】

Minami, M. and Y. Terada　監修

2018　*Revisiting Batulecaur after 34 Years: A Village of Musicians in Nepal*（みんぱく民族誌映画）53分

南真木人・寺田吉孝・藤井知昭　監修

2018　『みんぱく映像民族誌 第30集 ネパールの楽師ガンダルバ』107分

【成果の公開】

本プロジェクトに関連する映像作品、Makito Minami and Yoshitaka Terada　監修 2018 *Revisiting Batulecaur after 34 Years: A Village of Musicians in Nepal* を以下の４ヵ所で上映した。

南真木人・寺田吉孝

2018年11月23日、ネパール国立舞踊劇場・小ホール（カトマンドゥ）、第８回国際民俗音楽映画祭（11/21–24）、長編映画部門第二位受賞、約80人

南真木人

2018年12月６日、NexUs（カトマンドゥ）、Movie Night、質疑応答、約30人

2018年12月10日、Department of Sociology and Rural Development, Prithvi Narayan Campus（ポカラ）、大学院授業、議論、院生と教員約40人

2018年12月11日、国際山岳博物館・オーディトリアム（ポカラ）、第５回国際グレートヒマラヤ祭、ボジ・バハドゥール・ガエク（ガンダルバ開発センター長）、BK パラジュリ（PN キャンパス教授）によるコメント及びフロアとの質疑応答、ダン・バハドゥール・ガエク他８人によるサーランギ演奏、約40人

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：新たに上述の17件の映像資料を入手した。

共同研究

2018年度の応募・採択状況

課題１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題２：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分			2018年度			
研究代表者		課題区分	申請	採択	継続	合計
一般	館内	課題１	0	0	7	8
		課題２	0	0	1	
	客員	課題１	0	0	1	2
		課題２	0	0	1	
	公募	課題１	10	6	10	17
		課題２	0	0	1	
若　手		課題１	1	1	3	4
		課題２	0	0	0	
計			11	7	24	31

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2019
驚異と怪異――想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2018
応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2018
○ 考古学の民族誌――考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2018
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2018
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2018
○ 医療者向け医療人類学教育の検討――保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2018
○ 個―世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤　剛	1	2015-2018
○ 確率的事象と不確実性の人類学――「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2018
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2018
もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田宗平	1	2016-2018
会計学と人類学の融合	出口正之	1	2016-2018
「障害」概念の再検討――触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬浩二郎	1	2016-2018
● 消費からみた狩猟研究の新展開――野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石高典	1	2016-2018
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2019
○ 音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2019
○ 現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2019
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2019
● テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2019
● モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	1	2017-2019
博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2020
○ 人類学 / 民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2020
○ 文化人類学を自然化する	中川　敏	1	2017-2020
○ ネオリベラリズムのモラリティ	田沼幸子	1	2017-2020
● 拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田瑞穂	1	2018-2020
○ オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間計博	1	2018-2021
○ 伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷文美	1	2018-2021
○ 心配と係り合いについての人類学的探求	西　真如	1	2018-2021
○ 統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　徹	1	2018-2021
○ グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　泰幸	1	2018-2021
○ カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて	内藤直樹	1	2018-2021

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者　松尾瑞穂
班員（館内）宇田川妙子
（館外）澤田佳世　島薗洋介　白川千尋　新ヶ江章友　田所聖志　深川宏樹　深田淳太郎
洪 賢 秀　松岡悦子　松嶋　健　山崎浩平

研究会
2018年７月８日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
松尾瑞穂（国立民族学博物館）「共同研究会の方向性と今後について」
田口陽子（一橋大学）「サブスタンス＝コードの翻訳と変容――インドにおける人格と再分配をめぐって」（仮）
白川千尋（大阪大学）「サブスタンスとリアリティ――ヴァヌアツの感染呪術をめぐって」
全体討論
2018年12月２日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
二階堂祐子（国立民族学博物館）「象徴的媒体としての遺伝情報――遺伝性疾患のある当事者のサブスタンスに関する語りから」
島薗洋介（大阪大学）「臓器移植と想像のつながり、共同体」（仮）
全体討論
2019年２月28日（木）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
山崎浩平（京都大学）「インドのヒジュラ・コミュニティにおける身体サブスタンス」
松嶋健（広島大学）「実体変化とサブスタンス」（仮）
成果刊行に向けての打ち合わせ

成果
３年目にあたる本年度は、実質的な研究報告の最終年度と位置づけ、メンバーの報告を一巡させ、来年度以降の成果取りまとめにむけての議論を行った。第１回目は呪術や人格論、再分配という人類学の古典的テーマにサブスタンス概念からアプローチし再考することが目指され、サブスタンスという概念を接合させることで見えてくるものを考察した。第２回目の研究会では医療と身体サブスタンスについて、出生前検査や臓器移植という具体的な医療現象の事例から検討を行った。第３回目は、宗教儀礼や通過儀礼における乳や血、肉の象徴的かつ実体的な利用とその観念から、身体変化とサブスタンスについて議論を行った。これらの議論を通して、本年度はサブスタンス概念の性質と射程についての考察が展開されるとともに、これまであまり注目されてこなかったモースのサブスタンス概念の重要性や、非人間との関わりなど多岐にわたる論点が抽出された。これまでの研究成果を踏まえ、来年度以降の成果公開についても一定の方向性を定めることが出来た。

「驚異と怪異――想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』（1970）で定義したように、「驚異」marvelous や「怪異」uncanny は、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこ

かに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者　山中由里子

班員（館内）吉田憲司　菅瀬晶子

（館外）榎村寛之　大沼由布　香川雅信　金沢百枝　木場貴俊　黒川正剛　小林一枝　小松和彦　小宮正安　佐々木聡　寺田鮎美　林　則仁　松浦史子　松田隆美　宮下　遼　安井眞奈美

研究会

2018年７月１日（日） 10：30〜17：30（国立民族学博物館　大演習室）

小宮正安（横浜国立大学）「驚異の部屋　ヴンダーカンマーの謎と蒐集品」

松田陽（東京大学）「不思議なモノの収蔵地としての寺社」

宮下遼（大阪大学）「民間信仰の商品化――トルコの邪視魔除け護符ナザル・ボンジュウ」

寺田鮎美（東京大学総合研究博物館 インターメディアテク）「異世界制作の方法――ミュージアムにおけるモノの収集・展示・認識」

全体討論

2018年11月４日（日） 10：30〜18：00（国立民族学博物館　大演習室）

大沼由布（同志社大学）「西洋中世の百科事典と自然の分類」

特別展見学

秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター）「自然と超自然の境界論」

山田仁史（東北大学大学院）「驚異・怪異の人類史的基礎」

全体討論

2018年12月10日（月） 13：30〜18：00（国立民族学博物館　第４演習室）

山中由里子（国立民族学博物館）「課題の整理・展示内容の提案」

辻邦浩（ナレッジキャピタル）「怪異の音を展示する」

若林広幸（若林広幸建築研究所）「驚異・怪異を展示する」

村上加奈（若林広幸建築研究所）「驚異・怪異とメディア展開」

総合討論

成果

最終年度は、「驚異・怪異の物的証拠」という物質文化をテーマとする会と、「境界論」をテーマに自然思想や宗教観を大局的に捉える会を設け、さらに成果公開につなげる総括的な議論を行った。

人類は、直観的な自然理解を逸脱する、不可思議な物事の出現のつじつまを合わせるために、何らかの見えない力の介在を見出してきた。近代以前の一神教世界ではそれは「神」――キリスト教世界では近世以降は「悪魔」の存在感も強くなる――であり、東アジアでは「天」や「気」であった。最終年度の討論の際にあらためて共有きたのは、それらの存在をおしなべて「超自然」という言葉でくくることへの違和感である。東アジアの怪異をヨーロッパや中東の驚異と対比させた結果、怪異は「自然 vs. 脱自然・超自然」という対置構造の中で理解されるべきでなく、むしろ「常 vs. 異」、もしくは「理 vs. 理外」（道理 vs. 道理を逸したもの）のせめぎあいとして捉えるべきであろうということが分かってきた。

「応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニメなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされている。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたうえで、

人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援（support）という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・スポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者　丹羽典生
班員（館内）笹原亮二　三尾　稔
（館外）岩谷洋史　梅屋　潔　小河久志　風間計博　亀井好恵　木村裕樹　熊田陽子
瀬戸邦弘　高野宏康　高橋豪仁　立川陽仁　椿原敦子　難波功士　前川真裕子
山田　亨　山本真鳥　吉田佳世　永田貴聖

研究会
2018年７月28日（土） 14：00～18：30（国立民族学博物館　第４演習室）
永田貴聖（大阪国際大学）「外国人移住者と関わる人びと――Ｔ国際交流センターの活動に参加するボランティアや支援者たちへの考察」
質疑応答、全体討論
出版に向けた打ち合わせ
2018年12月22日（土） 13：30～18：45（国立民族学博物館　第４演習室）
戸田直夫（大阪大学）「大学応援団における吹奏楽――関西学院大学の事例を中心に」
質疑応答
小河久志（金沢星稜大学）「ある戦後新設高校応援団の興亡史――旧制中学系高校との関係に注目して」
質疑応答、全体討論

成果
今年度は成果公開に向けての打ち合わせと並行して、通常の研究発表も行った。いずれも応援する組織の研究を中心に行ってきたこの研究科において、手薄であった大学応援団における吹奏楽部の歴史と現状について、高等学校という大学とは別の応援団の現状について扱いことで、事例をより多面的に扱うことができた。また、応援という行為についても、これまでの研究で支援と呼ばれてきてたであろうボランティア活動などの視点から考察することで、概念としての幅についても批判的に検討することができた。
出版物として、『民博通信』に「応援におけるノリと近代――沖縄の高校野球を中心に」にて、日本の高校野球野球の地方色を検討した。また、『国立民族学博物館研究報告』「日本における応援組織の発展と現状――四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論」にて、日本の大学応援団の活動をデータとして総攬する研究を公表した。口頭発表として友の会講演にて「野次から応援へ――応援の比較文化論の試みから」を行い、一般への成果の還元を行った。

「考古学の民族誌――考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」
考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会実践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理ついて内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。
そのために、次の３つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。
(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のものの見方、コミュケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者　アートル ジョン
班員（館内）關　雄二　寺村裕史　ピーター, J, マシウス
（館外）石村　智　市川　彰　岡村勝行　サウセド セガミ　渋谷綾子　ダニエル ダンテ
寺田鮎美　中村　大　松田　陽　溝口孝司　村野正景　山藤正敏　吉田泰幸

米田　穣　　宮尾　亨

研究会

2018年７月28日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

共同研究成果公開出版の構想発表と討議

2019年１月12日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

共同研究成果公開出版の構想発表と討議１

2019年１月13日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室）

共同研究成果公開出版の構想発表と討議２

共同研究成果公開出版の構想発表と討議３

成果

共同研究会第九・十回は成果公開出版に向けての議論を行った。成果公開出版は論文集の形とし、共同研究会参加者はそれぞれの論文の草稿、構想を発表し、共同研究会参加者との質疑応答、改稿に向けての議論を行った。本共同研究会参加者個々の関心、見方を理解しながらも、それらを統合する論文集全体のテーマ設定を行った。考古学はデータ・メイキング・プロセスに始まり、考古学の成果が社会に消費されながら新たな社会を作り上げているもいる、そしてデータ・メイキング・プロセスもその社会に埋め込まれているが故に、社会はデータ・メイキング・プロセス影響を与えている、こうした本共同研究会が考える「考古学のプロセス」とそのサイクル全体について人類学的に論じた論文集を編集・刊行する方針を確認した。

「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけではなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 想定される宇宙に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2)は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者　岡田浩樹

班員（館内）飯田　卓　　上羽陽子　　山本泰則

（館外）磯部洋明　　岩田陽子　　岩谷洋史　　大村敬一　　川村清志　　木村大治　　後藤　明

佐藤知久　　篠原正典　　住原則也　　水谷裕佳

研究会

2019年１月14日（月・祝）14：00～19：00（国立天文台　三鷹キャンパス）

岡田浩樹（神戸大学大学院）「宇宙人類学の射程」

日下部展彦（自然科学研究機構アストロバイオロジーセンター）「アストロバイオロジーについて」

成果出版の打ち合わせ

2019年１月15日（火）９：00～17：00（国立天文台　三鷹キャンパス）

国立天文台の施設視察

成果

2018年度は共同研究会の最終年度として、その成果発表に向けた打ち合わせなどを中心に共同研究会を実施した。本共同研究会は、関連して行われている研究プロジェクト（学術振興会科学研究費補助金特設分野Ｂ「オラリティと社会」）による調査研究と連動して実施されており、各研究分担者の個別の調査研究の成果を共同研究会において報告し、検討を行うとともに、成果物の発表スケジュール、その議論の成果の一部は、木村（2018）の著書などとして公表されている。また、国立天文台での共同研究会を実施し、アストロバイオロジー研究員日下部展彦氏）という新しい宇宙関連分野について、ゲストスピーカー（自然科学研究機構アストロバイオロジーセンターによる報

告を通し、在進展中の宇宙開発に関連する自然科学の展開をメンバーで共有した。加えて、国立天文台の研究員による解説および施設見学、関係者からのヒアリングと議論を行い、宇宙に関する知識の社会的共有の問題についての議論、先端科学技術と社会煮関する知識人類学の問題について検討を行った。

「放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究」

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾病や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられる傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者　中原聖乃
班員（館内）林　勲男
（館外）新井　卓　市田真理　岡村幸宣　越智郁乃　聞間　元　桑原牧子　小杉　世
島　明美　関　礼子　西　佳代　根本雅也　三田　貴　吉村健司　楊 小 平

研究会
2018年11月17日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第３演習室）
島　明美（ふくみみラボ）「福島原発事故　低線量放射能汚染被害者が放射能汚染被害者ではなくなったフォローアップ事業」
全員　最終成果出版の枠組みについての討論
2018年11月18日（日）９：00～12：30（国立民族学博物館　第３演習室）
市田真理（第五福竜丸展示館）「『ビキニ事件』の当事者は誰か」
聞間　元（生協きたはま診療所）「ビキニ事件で忘れられている被災者たち」
全員研究会のまとめ
2019年１月19日（土）11：00～18：30（国立民族学博物館　第３演習室）
吉村健司（東京大学）「水爆実験後の琉球水産史と現地紙報道」
桑原牧子（金城学院大学）「仏領ポリネシア核実験の元前進基地ハオにみる当事者性」
小杉　世（大阪大学）「想像力と身体芸術による当事者性への近接――キリバスでの英米核実験の表象をめぐって」
最終成果報告についての討論
2019年１月20日（日）９：00～17：00（国立民族学博物館　第３演習室）
根本雅也（立命館大学）「ホウシャノウが現れるとき――原爆被爆者を事例として」
新井　卓（芸術家）「獲得される〈当事者性〉――東松照明の長崎と、〈当事者〉と〈非当事者〉を取り持つ第三者たち」
メンバーの草稿についてのコメント

成果

今年度は、最終成果出版にあたって「当事者性」についての議論を行った。本研究は、そもそも見えない部分／隠されている部分／考えないようにしている部分を見えるようにしていくことを目的とすることを確認した。そのなかで、「当事者性」とは何かということが問題となった。放射線の被害を受けた人、放射線の被害を受け避難してきた人を受け入れる自治体で、いじめがある状況を困惑しながら眺めた人、放射線被害の処理事業にかかわる人など、様々にかかわっている。そして様々な人がかかわりあうからこそ、問題が起こっていることを確認した。つまり、複数の当事者性があり、各々が、それぞれの当事者性を主張したり、それぞれのトラウマが交わっていなかったりしている。こうした状況を、最終報告で描き出すことを確認した。その際、他者の苦しみを表象することの暴力性については十分に留意する必要性があることも確認した。最終報告は、知識として放射線影響問題を知ること

にとどまらず、自身の行動を変えていくことにつながるものにすることも確認できた。

「医療者向け医療人類学教育の検討――保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者と患者・クライアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職（以下、「医療者」）にとって、事象をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後５年程度の間に全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題である。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者　飯田　淳子

班員（館内）鈴木七美　松尾瑞穂

（館外）伊藤泰信　梅田夕奈　大谷かがり　工藤由美　辻内琢也　照山絢子　錦織　宏
濱　雄亮　浜田明範　星野　晋　堀口佐知子　宮地純一郎　吉田尚史　島薗洋介
西　真如

研究会

2019年１月14日（月・祝）13：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

浜田明範（関西大学）「医学教育とともにある人類学に向けて」

伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学（JAIST））「人類学の外部から考える人類学の可変性と可能性」

参加者全員「総合討論（３年半のふり返りと今後の課題について）」

成果

最終年度である2018年度は、前年度各自が作成した各章の概要に基づき、医学生向け教材の執筆・編集作業をおこなった。医学生が臨床との関連性を感じにくいという従来の医学生向け社会科学教育の課題を克服するために、臨床現場の事例から出発し、それを人類学的な考え方や概念につなげるというアプローチを採用し、本共同研究では、医師と人類学者との協働作業によって事例集の形の教材を作成している。１月に開催した共同研究会では、本共同研究および関連する諸活動を通じて人類学者が医療者から学んだワークショップ型の教育手法、および看護実践のエスノグラフィックな研究に関する発表がおこなわれた。なお、以上の作業はこれまでと同様、日本文化人類学会 医療者向け人類学教育連携委員会、および日本医学教育学会 プロフェッショナリズム・行動科学委員会との連携により実施された。

「個−世界論――中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたリフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がりは、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのように連関しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特質を解明しようとするものである。

研究代表者　齋藤剛

班員（館内）相島葉月　西尾哲夫

（館外）池田昭光　宇野昌樹　大坪玲子　奥野克己　小田淳一　苅谷康太　齋藤　剛
佐藤健太郎　椿原敦子　鳥山純子　堀内正樹　水野信男　嶺崎寛子

研究会

2018年11月24日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

宇野昌樹（広島市立大学）「研究課題と研究会への関わり方　Ⅱ」

2018年11月25日（日）10：00～14：00（国立民族学博物館　第１演習室）

嶺崎寛子（愛知教育大学）「未来／未知に自らを擲つということ――アフマディーヤ・ムスリム在日二世の結婚の事例から」

2019年２月16日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）

鳥山純子（立命館大学）「『シャクセイヤ』をパフォーマティブに捉えるために」

2019年２月17日（日）10：00～14：00（国立民族学博物館　第２演習室）

西尾哲夫（国立民族学博物館）、岡本尚子（国立民族学博物館）「アラブ音楽研究における〈民衆〉概念――Guillaum André Villoteau（1759～1839）とSimon Jargy（1919～2001）」

水野信男（兵庫教育大学）「コメント」

成果

2018年度には、当初３回の研究会を予定していたが、2018年６月に大阪府北部で起きた地震の深刻な被害が国立民族学博物館にも及んだこともあり、共同研究会開催は２回となった。発表を担当したのは宇野昌樹、嶺崎寛子、鳥山純子、西尾哲夫、水野信男、および岡本尚子（国立民族学博物館）である。それぞれ研究発表あるいはコメントを担当して研究成果の発表を行なった。取りあげられたのは、研究者としての半生に渡るフィールドとの関わり、国際的なネットワークを形成しているアフマディーヤの２世の国際結婚、エジプトにおける学校教員の事例をもとにしたシャクセイヤ（個）の捉え方の批判的検討、そして、アラブ音楽研究における「民衆」概念の検討、などである。

これらの発表に加えて2018年度には、国立民族学博物館・共同研究（国際展開事業）の助成を受けて、共同研究班のメンバーである鳥山、池田、齋藤が2018年７月にスペインのセビーリャで開催された第５回中東研究世界会議（World Congress for Middle Eastern Studies, WOCMES）に参加し、パネル・セッション“The challenge of ethnography on identity and social realities in the Middle East: Going beyond the category from within”で研究成果発表を行なった。

上記のパネルは、共同研究の成果の一部として、共同研究代表の齋藤とメンバーの鳥山純子（立命館大学）が協力して企画立案したものである。事前審査を経て採択された本パネルの構成は、発表者４名、コメンテータ１名、モデレータ１名からなり、そのうちパネル発表者３名が、国立民族学博物館共同研究参加者（鳥山純子、池田昭光、齋藤剛）であり、本パネルの中核をなしていたほか、２名（鳥山、池田）が博士号取得後８年以内の若手研究者であった。WOCMESは、世界70カ国を拠点とする2,500名の中東研究者が４年に一度、一堂に会する中東研究での世界最大規模の国際学会である。そこで研究成果報告をパネルの形で実施できたのは、本共同研究成果の国際発信の一環としてもふさわしいものであった。

「確率的事象と不確実性の人類学――「リスク社会」化に抗する世界像の描出」

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把捉し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集合的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者　市野澤潤平

班員（館内）飯田　卓

（館外）東賢太朗　阿由葉大生　碇　陽子　井口　暁　磯野真穂　牛山美穂　近藤英俊

土井清美　松田素二　吉直佳奈子　渡邊日日

研究会

2018年11月３日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
師田史子（京都大学大学院）「賭博をめぐる偶然世界の捉え方――フィリピンにおける賭博者の事例から」
吉直佳奈子（東京大学大学院）「日本の医療における不確実性にかんする一考察」

2018年11月４日（日）９：30～14：00（国立民族学博物館　第１演習室）
全員「不確実性概念にかかわる理論的検討と2019年度日本文化人類学会研究大会での分科会開催に向けての企画検討」

2018年12月８日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
阿由葉大生（東京大学大学院）「インドネシアの社会保険設計における数値と客観性」
市野澤潤平（宮城学院女子大学）「確実性の成り立ちについての一考察」

2018年12月９日（日）10：00～14：00（国立民族学博物館　第１演習室）
全員「不確実性概念にかかわる理論的検討と成果出版に向けての企画検討」

2019年２月７日（木）11：00～17：00（国立民族学博物館　第１演習室）
市野澤潤平（宮城学院女子大学）「研究会成果出版に向けて」
碇　陽子（明治大学）「研究会成果出版に向けて」
全員討論

成果

2018年度は、６月18日の大阪府北部地震の影響で、前期に開催を予定していた研究会が取りやめになるトラブルに見舞われたが、結果的に計３回の研究会を開催できた。そのうち11月３～４日および12月８～９日の研究会では、昨年度に引き続き民族誌的な事例発表を通して、一元的な「リスク社会」化の時代診断によっては必ずしも捉えきれない、様々な不確実性への向き合い方があることを確認するとともに、そのような多様性を捉える議論の枠組みや、既存の人類学理論との関わりや延長において不確実性を論じるための新たな視座の開拓について、活発な議論が交わされた。さらに2019年１月７日の研究会では、本研究会で３年にわたって積み重ねられてきた議論を踏まえて、『不確実性の人類学』へのひとつの指針を示すことができるような論文集を、本研究会の成果として出版することが合意され、具体的な編集方針についての話し合いが行なわれた。結論として、本研究会では不確実性を考えるための多様な方向性を見いだすことができたが、それらは萌芽的な研究指針の段階に留まっている。ゆえに成果出版では、そうした人類学的不確実性研究の豊かな可能性を示すことを、主たる目的とすべきであることが、確認された。

「チベット仏教古派及びポン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。しかし精査してみると、その内容は一般に理解されるタンカなどを中心とするいわゆる仏画ではなく、主として仏教古派及びポン教に広く流布している魔除け・厄除けの護符あるいはその儀礼に用いられる宗教図像（白描の木版画で、宗派を問わず使われるもの）である。チベット仏教とポン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも貪欲に受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やポン教の大蔵経論部の一定のポーションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々の角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博が蔵する護符の図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

研究代表者　長野泰彦
班員（館内）三尾　稔

（館外）大羽恵美　川﨑一洋　菊谷竜太　倉西憲一　スダン・シャキャ　立川武蔵　津曲真一
村上大輔　森　雅秀　脇嶋孝彦

研究会
2018年６月２日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第１演習室）護符の記述研究
2018年10月６日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第２演習室）護符の記述研究
2018年11月１日（木）10：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）ニンマ派学僧との護符の共同研究
2018年11月２日（金）10：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）ニンマ派学僧との護符の共同研究
2018年11月３日（土）10：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）ニンマ派学僧との護符の共同研究
2018年11月４日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）ニンマ派学僧との護符の共同研究
2018年11月５日（月）10：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）ニンマ派学僧との護符の共同研究
2019年１月11日（金）12：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）共同研究成果発信に向けての検討
2019年２月11日（月）13：00～17：00（国立民族学博物館　第２演習室）成果刊行の打ち合わせ

成果
1）前年度に引き続き、図像資料の記述の精緻化、特に同定の根拠となる真言やマントラ（その源流であるヤントラを含む）の特定と、Douglas、Sukorupski、田中公明などの先行研究及び関連する資料との対応関係を精査した。
2）共同研究国際展開プロジェクトの予算を得て、2018年11月初旬に「行」を日常的に行っているニンマ派学僧NorbuTsering師をネパールから招聘し、各共同研究員が記述上困難であった図像に関して共同で解明に当たった。また、幾つかの護符を実際に作成する加持のプロセスを再現してもらい、映像に記録した。
3）成果公表の手段として最重要と考える本資料のデータベースにつき、Forum型データベース作成のための情報プロジェクトを申請し、内定を得た。本年度中に作業が終わり、年度内公表を目指している。
4）成果公表の２番目として、各共同研究員による個別資料に関する論考を１冊にまとめる準備に着手した。2019年度中に商業出版により上梓する。

「もうひとつのドメスティケーション――家畜化と栽培化に関する人類学的研究」

本研究の目的は、人類による家畜化や栽培化にかかわる新たな事例を比較検討することで、それらの現象を整理し、概念枠組みを明確にすることである。ここでいう新たな事例とは、野生性の保持や野生種の利用、反馴化というように、家畜動物特有の性質（非攻撃的性格や馴れやすさなど）を獲得させない動物飼育の事例や栽培化症候群（脱粒性の喪失や無毒化など）を起こさない植物栽培の事例のことである。本研究では、こうした事例を「もうひとつのドメスティケーション」という言葉で表現する。

具体的には、本研究では（1）「もうひとつ」の動植物利用にかかわる民族誌的事実の報告をおこない、（2）複数の事例を比較検討することで、動植物に対する人間の働きかけを類型化する。これにより、対象とする生き物の利用形態の普遍性と特異性を導きだすことができるであろう。そのうえで、（3）従来のドメスティケーションの議論を踏まえながら、本研究の独自性と概念枠組みを明確にする。なお、本研究ではまず生業活動のなかで「手段」として利用される動植物を取りあげる。これは、鵜飼や鷹狩、狩猟、魚毒漁などで利用される動植物には上述の事例が多くみられるからである。その後、ほかの動植物利用の事例に研究対象を拡大する。

研究代表者　卯田宗平
班員（館内）池谷和信　野林厚志
（館外）梅﨑昌裕　大久保実香　小谷真吾　小坂康之　齋藤暖生　篠原　徹　須田一弘
竹川大介　那須浩郎　広田　勲　藤村美穂　古澤拓郎　安岡宏和　山本宗立
中島　淳　相馬拓也

研究会
2018年10月27日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
卯田宗平（国立民族学博物館）「これまでのドメスティケーション研究会の成果と今年度の課題（5）」
小谷真吾（千葉大学）「イヌのドメスティケーションを、ニューギニア・シンギング・ドッグから考えてみる」
コメンテーター：那須浩郎（岡山理科大学）
小坂康之（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「東南アジアにおける水田植物のドメスティケーションの

可能性」
古橋牧子（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「現代における栽培植物の成立過程――ベトナムのドクダミ栽培とその利用に着目して」
コメンテーター：篠原徹（滋賀県立琵琶湖博物館）

2018年11月17日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
卯田宗平（国立民族学博物館）「これまでのドメスティケーション研究会の成果と今後の課題（6）」
藤村美穂（佐賀大学）「日本のイヌからドメスティケーションを考える――猟犬からペットまで」
コメンテーター：中島淳（福岡県保健環境研究所）
張 平 平（北九州市立大学）「チベット族の牛糞利用――燃料から伝統文化へ」

2019年２月２日（土）14：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室）
卯田宗平（国立民族学博物館）「これまでの研究会の成果と今後の課題（7）」
梅崎昌裕（東京大学）「人間と細菌の関係をリバランス論から検討する」
コメンテーター：竹川大介（北九州市立大学）
野林厚志（国立民族学博物館）「ブタ飼育における野生性の保持――イベリコ豚の給餌と飼育形態を事例として」
コメンテーター：須田一弘（北海学園大学）

2019年２月３日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）
齋藤暖生（東京大学）「キノコのドメスティケーションの手法と経路（仮題）」

2019年２月16日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
広田　勲（岐阜大学）「ラオスの農耕地生態系におけるタケとその利用」
井村博宣（日本大学）「アユ養殖における『天然』と『半天然』」
篠原　徹（滋賀県立琵琶湖博物館）「ドメスティケーションの背景としての民俗自然誌的技術：生業技術の文明論」

2019年２月17日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）
卯田宗平（国立民族学博物館）「これまでの研究結果と今後の流れについて」

成果

2018年度は計４回の研究会を実施し、計12名の研究者がドメスティケーションに関わる最新の研究成果を口頭で発表した。くわえて、今年度の研究会では多くの発表にコメンテーターをつけることで、研究成果の特徴や本共同研究に貢献するポイント、今後の課題などの議論に道筋をつけてもらうことにした。

本年度は最終年度ということもあり、当初の目的通りに「もうひとつ」の動植物利用にかかわる民族誌的事実の報告を踏まえたうえで、それら多くの事例を解釈する枠組みを検討し、構築することに時間を割いた。その結果、本年度の共同研究により、「もうひとつ」に関わる動植物利用の事例を四つの枠組みで整理できることがわかった。本研究では、さまざまな民族誌的事実を整理できる解釈枠組みを提示したことで、人間が単線的に動植物のドメスティケーションを推し進めるわけではない事実を示し、人間がほかの生物種を積極的に管理下におこうとする西洋や中国のドメスティケーション論を問いなおすことができた。

「会計学と人類学の融合」

地中海時代のイタリアに端を発する近代会計学は、口別計算から期間損益計算、現金主義から発生主義へという進化主義的発想を明確に持つディシプリンの一つであるといえる。また、企業会計を中心に発展してきたことから、企業のグローバル化に伴い、必然的に会計基準のグローバル化を求めるようになっていった。その結果、各国の企業会計の違いを超えたグローバル・スタンダードとしてのIFRS（国際財務報告基準）が策定されて、会計関係者の間ではIFRS適用問題が大きな関心事となっている。

他方で文化人類学者は進化主義思考やグローバリゼーションに対してクリティカルに見る方法を駆使してきた。監査や認証といったAudit Cultures（Shore & Wright 1999, Strathern 2000）についても批判を加えている。しかしながら、Audit Culturesの中核に位置するともいえる会計学者にその声が届いているとはとても思えない現状もある。

本研究会はこうした状況をかんがみて、両者が議論しやすい課題として会計基準の中でもガラパゴス化した非営利会計基準（2008年公益法人会計基準、2011年学校法人会計基準、2015年社会福祉法人会計基準など。これらは実は全く異なっている）に焦点を当てる。これらは、各法人制度の文化的側面を色濃く残し、また、いずれもごく最近になって改訂が加えられたという特徴を持つ。接点が難しい会計学と文化人類学の中で、会計と文化、普遍化と

個別化の問題を両学問からアプローチするのに最も適したテーマであると考え、本申請はこれらを中心に会計学と人類学の学際研究を試みようとするものである。

研究代表者　出口正之
班員（館内）宇田川妙子
（館外）石津寿恵　大貫　一　尾上選哉　金セッピョル　竹沢尚一郎　西村祐子　早川真悠
深田淳太郎　藤井秀樹　古市雄一朗　安冨　歩　八巻惠子

研究会
2018年5月12日（土） 14：00～18：40（国立民族学博物館　第4セミナー室）
早川真悠（国立民族学博物館）「ハイパーインフレーション下のジンバブエでの人類学的発見」
佐々木健志（琉球大学博物館）「沖縄の人頭税と藁算」
議論
佐藤慎一（租税スペシャリスト）「税制と文化」
議論
2019年2月23日（土） 14：00～18：40（国立民族学博物館　第4演習室）
工藤栄一郎（西南学院大学）「文化人類学への対話可能な学問としての会計史研究」
三代川正秀（拓殖大学）「そろばんという道具と和式簿記」
山田辰己（中央大学）「IFRSの財務報告における基本スタンス――IFRSはBS重視か」
議論
出口正之（国立民族学博物館）研究成果出版計画案
議論

成果
今年度は、これまでの研究に比較して大きな広がりの進展があった。とりわけ、会計から税の分野、税制という政策の分野における文化人類学的知見の重要性にまで議論が進んだ。また、会計学のうち会計史学との接点が出てきた。伝統的な会計史研究は他の学問領域と積極的な交渉が少なかったと会計学者が認めるほど、蛸壺に陥っていたといえる。しかし、近年わずかながら、他領域との関係を模索するようになって来た。例えば、古代中東の考古学者であるD・シュマン-ベセラがアメリカ会計学会年次大会 2007（シカゴ）でオープニング・プレナリー・スピーチ：The Origin of Accountingを行ったことも、そうした傾向のひとつであろう。
今年度は最終年であり、今年度の新しい展開も含めた研究成果の出版計画も実施することができ、全く新しい分野の研究成果を発表する予定であるが、それは次への展開への序章に過ぎないものとなるだろう。

「「障害」概念の再検討――触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて」
2016年4月、障害者差別解消法が施行された。現在、さまざまな分野で障害者に対する「合理的配慮」のあり方について議論が始まっている。米国のADA（アメリカ障害者法）は1990年に制定され、その理念が社会に定着するまで20年以上かかった。日本でも今後、差別解消法に基づく諸システムを構築していくために、「障害」に関する幅広い研究が求められているといえよう。
一方、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズム（誰もが楽しめる観光・まちづくり）の必要性が各方面で強調されている。旅行業界では、障害者対象のツアーを企画・実施するケースも増えた。パラリンピック効果による障害者への関心の高まりを一過性のブームで終わらせないためにも、娯楽・余暇における「合理的配慮」の形態を文化人類学的に研究する試みが不可欠だろう。
本共同研究の目的は、2012～14年度に実施した「触文化に関する人類学的研究」を継承し、「ユニバーサル・ミュージアム」「手学問」などの理論を駆使して、「障害」概念を再検討することである。公共施設（とくに博物館）での「合理的配慮」の具体像を探究し、広く社会に発信したい。

研究代表者　廣瀬浩二郎
班員（館外）石塚裕子　大石　徹　大髙　幸　岡本裕子　黒澤　浩　小山修三　篠原　聰
鈴木康二　原　礼子　藤村　俊　堀江典子　真下弥生　宮本ルリ子　山本清龍

研究会

2018年７月16日（月）10：00～17：00（国立民族学博物館　第７セミナー室）

堀江典子（佛教大学）「ごみ処理施設からユニバーサル・ミュージアムを考える」

大石　徹（芦屋大学）「大切なのは考え抜くこと――映画の副音声を作るために」

堀江武史（府中工房）「考古学から生まれるアート――縄文遺物と現代美術の遭遇」

桑田知明（京都市立芸術大学）「感覚の多様性を探る――『さわって考える』本作りとワークショップの実践から」

廣瀬浩二郎（国立民族学博物館）総合討論「『常識』を再考する――枠に惑わされていてはワクワクする発想は生まれない！」

2018年11月10日（土）11：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室）

宇野　晶（滋賀県立陶芸の森）「陶芸に触れる――つちっこプログラムの実践を通して」

松井かおる（東京都江戸東京博物館）「江戸東京博物館におけるユニバーサル・ミュージアムの取り組み――課題と展望」

安曽潤子（東京都市大学）「インクルーシブ・ミュージアムとは何か――ヨーロッパの最新事例から」

廣瀬浩二郎（国立民族学博物館）「『ユニバーサル・ミュージアム』を展示する――『ポスト・オリパラ』を目指す文化戦略」

2019年３月２日（土）13：00～17：30（江戸東京博物館）

宮本ルリ子（滋賀県立陶芸の森）「信楽ワークショップを振り返って１――制作者の立場から」

山本清龍（東京大学）「信楽ワークショップを振り返って２――触触察動作の分析」

半田こづえ（明治学院大学）「信楽ワークショップを振り返って３――触参加者の会話分析」

松井かおる（江戸東京博物館）「江戸東京博物館の展示見学、触察展示の検証」

2019年３月３日（日）10：00～17：00（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館）

石川梨絵（キッズプラザ大阪）「事例紹介１――キッズプラザ大阪の触察展示とワークショップ」

長嶺泉子（わらべ館）「事例紹介２――わらべ館の触察玩具の活用」

岡本裕子（岡山県立美術館）「事例紹介３――岡山県立美術館の触察キットとワークショップ」

藤村　俊（美濃加茂市民ミュージアム）「事例紹介４――美濃加茂市民ミュージアムの体感展示の新展開」

大髙　幸（放送大学）「ワークショップを創る――ファシリテーターの役割再考」

黒澤　浩（南山大学）「事例紹介５――南山大学人類学博物館の新たな展示構想」

原　礼子（国際基督教大学）「私とICU――『ひとが優しい博物館』を求めて」

廣瀬浩二郎（国立民族学博物館）「総合討論――共同研究の成果発表に向けて」

成果

2018年度は共同研究の最終年度である。「『障害』概念の再検討」を目的とする本プロジェクトの締め括り、総括を意識して３回の研究会を開催した。

2018年７月の研究会では博物館の枠を離れ、ごみ処理施設、映画の副音声解説、現代アートなど、幅広いテーマを取り上げ、「ユニバーサル」の意味を再考することができた。本共同研究において、ユニバーサル・ミュージアムの実践事例は蓄積されているが、それらの相互関係を明らかにする意味でも有意義な研究会だったといえよう。

2018年11月の研究会では、３名の特別講師を招聘した。２年半の共同研究の期間を通じて、さまざまな分野で本プロジェクトへの関心が高まっていることを実感する。

全国各地のミュージアム関係者から多くの問い合わせが入ることに加え、オブザーバーとして研究会参加を希望する人も増えている。

本プロジェクトが日本のユニバーサル・ミュージアム研究を主導する役割を担っているのは間違いない。それゆえ、国内外の最新動向を把握する努力を継続しなければならないだろう。11月の研究会は、本プロジェクトの意義を再確認する上でも、きわめて重要だった。

2019年３月の研究会は、プロジェクトの最終回である。2019年度中に実施予定の公開シンポジウム（共同研究の成果発表）に向けて、これまでの議論を整理し、シンポジウムの趣旨等を各メンバーが共有する場となった。

「消費からみた狩猟研究の新展開――野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」

本研究は、現代の日本を含む世界各地における狩猟を、消費の視点からとらえることを目的とする。狩猟は、文化人類学や日本民俗学では、これまで伝統的な生業として捉えられることが多かった。しかし、ブッシュミート交易など農山村地域から都市圏への獣肉供給の需要増大に伴う商業狩猟に加えて、その延長上に国際的な市場流通を

視野に入れた産業狩猟も見られるようになってきている。そこで、(1) 近年、とくに国内で獣害対策の観点から見直されている狩猟と野生獣肉（ジビエ）の活用をめぐる現場の取り組みを民族誌的な一次データをもとに検討するとともに、(2) 世界各地における野生獣肉の流通・消費の事例と比較することで、日本における野生獣肉消費をめぐる動向をグローバルな状況のなかに位置づける。とくに、消費者による野生獣肉の消費のありかたの変化が、解体や分配の方法、狩猟法（狩猟道具や動物の殺し方）、精肉方法とその背景にある衛生概念、流通にかかわる組織の編成、食物や環境に関する人々の意識を変容させている可能性に着目し、海外の関連事例との比較を試みることで、国内における取り組みの独自性と潜在的な問題点について考察を深める。

研究代表者　大石高典
班員（館内）野林厚志　池谷和信　戸田美佳子
（館外）小林　舞　近藤祉秋　高橋美野梨　濱田信吾　比嘉理麻　兵田大和　安井大輔
安田章人　山口未花子　高柳　敦　服部志帆　田村典江

研究会
2018年６月30日（土） 13：00～17：30（国立民族学博物館　第１演習室）
全員「『農業と経済』ジビエ特集号について執筆者解題と合評」
高橋美野梨（北海道大学）「標準化の国際政治――EU の公衆衛生観念の域外伝播を事例に西欧的価値の国際規範化を考える」
小林　舞（総合地球環境学研究所）「ブータンにおける肉食の罪を巡る文化と食の主権に関する考察」
総合討論
2018年７月１日（日） ９：30～12：00（国立民族学博物館　第１演習室）
野林厚志（国立民族学博物館）「民博における共同研究会と成果出版の過程」
全員「野林厚志編『肉食行為の人類学』第４部（仮）の合評」
大石高典（東京外国語大学）「共同研究会の成果とりまとめに向けて」
2018年10月６日（土） 13：00～17：30（国立民族学博物館　大演習室）
大石高典（東京外国語大学）「趣旨説明――狩猟管理・獣肉交易（消費）の規制をめぐるガバナンス（制度・文書・官僚主義）と諸アクター」
野林厚志（国立民族学博物館）「異文化接触の中の狩猟活動――台湾社会を事例として」
戸田美佳子（上智大学）「カメルーンの森林資源マネジメントに関する現状報告：現金収入源に着目して（仮）」
未定「コメント」
総合討論
大石高典（東京外国語大学）・全員「これまでの議論の整理と来年度の出版計画に向けてのブレーンストーミング」

成果
２回の共同研究会を行うことができた。第１回研究会ではグリーンランドとブータンの事例について野生獣肉の流通・消費、あるいはそれらが禁止される状況とよりマクロな構造（国際政治学や国家の宗教政策など）との関係に焦点を当てて議論を行った。獣肉や肉食をめぐる交渉過程のなかに先住民のアイデンティティや食料主権の問題が浮き彫りにされた。２回目の研究会では、台湾とカメルーンの事例について、やや獣肉食そのものの問題からは離れて、狩猟管理と獣肉交易に関わるガバナンスについて検討を行った。議論の中では、植民地政策や自然保護政策の歴史的経緯も踏まえて狩猟管理の問題を把握することの重要性が認識された。
今年度は最終年度になるので、研究成果の発信を意識した研究会運営を心がけた。初回研究会において、共同研究の複数メンバーで執筆した雑誌特集の合評会、および専攻する肉食についての民博共同研究の成果本について合評会を行って、成果出版に向けた本共同研究のオリジナリティや課題について話し合った。

「捕鯨と環境倫理」
人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会（IWC）において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物保護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。

反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的変化が存在している。この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化にいかなる影響を及ぼしているかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物保護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者　岸上伸啓

班員（館内）出口正之

（館外）赤嶺　淳　李　善愛　生田博子　石井　敦　石川　創　伊勢田哲治　臼田乃里子
河島基弘　倉澤七生　佐久間淳子　真田康弘　高橋美野梨　浜口　尚　本多俊和
吉村健司　若松文貴

研究会

2018年５月13日（日） 13：00～17：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）

岸上伸啓（国立民族学博物館）「鯨類保全運動と反捕鯨運動」
倉澤七生（イルカ＆クジラ・アクション・ネットワーク）「NGOの側からの意見『野生動物としてのクジラと向き合う』」
質疑応答・討論
佐久間淳子（立教大学）「『「反捕鯨団体」の代名詞』“グリーンピース”から見えた捕鯨問題の姿 1988～2005の体験を元に」
質疑応答・討論
伊勢田哲治（京都大学）「コメント」
総合討論

2018年11月30日（金） 10：30～17：20（国立民族学博物館　第４セミナー室）

岸上伸啓（国立民族学博物館）「総論――世界の捕鯨の歴史と現状」
生田博子（九州大学）「アラスカ北極圏での生存漁労・狩猟経済における北極鯨漁の役割と重要性」
Eduard Zdor（米国・アラスカ大学フェアバンクス校）「21世紀初頭のチュコト半島の先住民捕鯨」
本多俊和（放送大学）「グリーンランドの捕鯨」
Russell Fielding（米国南部大学）「フェロー諸島における現在の捕鯨、その歴史と挑戦」
コメントと総合討論

2018年12月１日（土） 10：30～17：20（国立民族学博物館　第４セミナー室）

赤嶺　淳（一橋大学）「ノルウェーにおける鯨肉サプライチェーン」
浜口　尚（園田女子学園大学短期大学部）「再興するナガスクジラ捕鯨、衰退するミンククジラ捕鯨――アイスランドにおける商業捕鯨の現況と課題」
高橋美野梨（北海道大学）「標準化をめぐる捕鯨政治――EUを事例にして」
河島基弘（群馬大学）「NGOの反捕鯨運動」
Egil Ole Øen（ノルウェー・野生生物管理サービス）「捕鯨を実行する上での動物福祉」
Jes Lynning Harfeld（デンマーク・オールボー大学）「捕鯨の倫理的ディレンマ――現在の主張と位置」
伊勢田哲治（京都大学）「コメント」、総合討論

2018年12月２日（日） 10：30～17：15（国立民族学博物館　第４セミナー室）

岸上伸啓（国立民族学博物館）「世界の捕鯨の歴史と現状」
臼田乃里子「アフター・ザ・コーブ――逸脱する捕鯨推進と文化人類学の功罪　『ザ・コーブ』の後から見えてきたいくつかの事柄について」（捕鯨関連民族誌映画放映あり）
石川　創（下関科学アカデミー）「日本の小型沿岸捕鯨」
倉澤七生（イルカ＆クジラ・アクション・ネットワーク）「クジラと鯨の溝をめぐって」
浜口　尚（園田女子学園大学短期大学部）「世界の先住民生存捕鯨――現況と課題」
李　善愛（宮崎公立大学）「韓国の反捕鯨運動」
石井　敦（東北大学）「クジラをめぐる国際政治」

総合討論（質疑応答）、佐久間淳子（ジャーナリスト）「コメント」
2019年１月26日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　第４演習室）
鬼頭秀一（星槎大学）「捕鯨と環境倫理」
コメンテーター　伊勢田哲治（京都大学）全体討論　参加者全員
全体討論「本年の共同研究のまとめ」 参加者全員

成果

本年度は、動物保護・環境保護NGOによる鯨類保護や反捕鯨運動についての考え方と活動や、環境倫理から見た捕鯨活動について検討したが、捕鯨について賛成、反対、中立の立場に立つ研究者や活動家、マスコミ関係者が一堂に会して捕鯨について報告し、議論を行うことができた。その結果、次のような暫定的結論を得た。

(1) 現在のIWC体制の下では日本の商業捕鯨再開はきわめて困難であることが判明した。さらに日本がIWCを脱退し、調査捕鯨をとりやめ、日本の排他的経済水域でミンククジラ漁を再開した場合、沿岸捕鯨の採算性や持続可能性について疑問が提起された。また、国際外交の視点に立てば、IWCからの脱退による商業捕鯨の再開は必ずしも得策ではないとの意見も多かった。

(2) 世界各地において多様な捕鯨活動が実施されているが、この半世紀間にクジラをめぐる世界的な趨勢は捕鯨のような致死的な鯨類利用からホエール・ウォッチングのような非致死的利用へと変化してきた。

(3) 反捕鯨や鯨類保護の立場に立つNGOは、「動物倫理」の立場やクジラの生物としての優越性を強調する傾向が強い。一方、日本やノルウェーのような捕鯨国はクジラを資源と見なし、「動物福祉」の原則に基づきながら捕鯨を続けている。また、「環境倫理」の立場に立つと必ずしもすべての捕鯨に反対すべきという結論にはならない。さらに、先住民の捕鯨などについては人権や文化権、少数派への政治的差別などの問題も深く係わるために、捕鯨に関する問題は複雑な国際的政治問題としての側面を強く持っている。

「音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音（テクスト）に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景（コンテクスト）に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽することmusicking”として理解することを提唱している。musicの動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽的実践における身体性に着目することで、“音楽”という近代的かつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者　野澤豊一
班員（館内）川瀬　慈　寺田吉孝　福岡正太
（館外）青木　深　井手口彰典　岡崎　彰　梶丸　岳　大門　碧　武田俊輔　谷口文和
西島千尋　伏木香織　増野亜子　松平勇二　矢野原佑史　輪島裕介

研究会

2018年11月18日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　特別研究室［4046号室］）
野澤豊一（富山大学）趣旨説明
西島千尋（日本福祉大学）「ミュージック・ケアで癒されているのは誰か」
浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「生を刻む　みる・きく・たたく・かわす――北海道浦河ひがし町診療所の『音楽の時間』から」
細馬宏通（滋賀県立大学）「音の相互行為を捉えなおす――神戸『音遊びの会』の演奏を手掛かりに」
全員・総合討論
2018年12月22日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室）
野澤豊一（富山大学）趣旨説明
井手口彰典（立教大学）「ミュージッキングはゴーストライトの（悪）夢を見るか？――佐村河内事件が示唆するもの」

宮入恭平（立教大学）「学校教育に組み込まれたパフォーマンス――部活動から醸成される発表会的心性」
全員・総合討論

2019年１月12日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室）
野澤豊一（富山大学）趣旨説明
寺田吉孝（国立民族学博物館）「太鼓と周縁化されたコミュニティ」
毛利嘉孝（東京藝術大学）「サイケデリック・マルクス主義からアシッド・コービニズム／コミュニズムへ」
小田マサノリ（東京外国語大学）「人類学から遠く近くはなれて～『音楽と政治・運動』のフィールドから（1989年～2019年）――ケニア、東京、北海道、沖縄、ニューヨーク、首相官邸、そして、YouTube＋追悼ECD」
全員・総合討論

2019年２月23日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室）
野澤豊一（富山大学）「趣旨説明」
岡崎　彰（東京外国語大学）「ダンスと夢――能動でも受動でもなく、文化でも自然でもなく、そして精神でも肉体でもなく」
武田優子（沖縄国際大学）「ミロンガにおけるタンゴダンスの実践とその背景」
輪島裕介（大阪大学）「ダンスと振り付けの間――70年代以降の日本の大衆音楽史から考える」
全員・総合討論

成果

2018年度は４回の共同研究会を実施した。「音楽と癒し」をテーマにした研究会（11月18日）では、いわゆる音楽療法およびその周辺にある事例について３名（うちゲスト講師が２名）が報告し、セラピー的な性格をもつ音楽実践に多様性があるいっぽうで、参与者がミュージッキングに動機づけられる動態に共通する側面があることも確認した。「パフォーマンスの周辺」をテーマにした研究会（12月22日）では、２名（うちゲスト講師が１名）が、「天才作曲家」という言説や発表会という社会的仕掛けが、パフォーマンスの外側で人々をミュージッキングに動機づける事例について報告した。「音楽と政治・運動」をテーマにした研究会（１月12日）では３名（うちゲスト講師が２名）が、デモ、マイノリティ、アンダーグラウンドシーンの事例から、パフォーマンスへの参与が前意識ともいうべきレベルで個人に働きかける実情を報告した。「ダンス」をテーマにした研究会（２月23日）では３名（うちゲスト講師が１名）が、日本、南米、アフリカ、東南アジアの事例をもとに、ダンス（的身体）に内在する規律訓練的側面や融即的状況について報告した。

「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80％占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅（施設を含む）での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者　浮ヶ谷幸代
班員（館内）鈴木七美
（館外）相澤　出　　渥美一弥　　鈴木勝己　　田代志門　　田中大介　　松繁卓哉　　山田慎也

研究会

2018年７月21日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

林美枝子（日本医療大学）「『看取りねっと』の試みと課題」

浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「Aging in Placeの意味するところ――日本版CCRCと小規模多機能ホームとの比較から」

2018年７月22日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）

山田慎也（国立歴史民俗博物館）「近親者無き人の看取りから葬送への連続的ケアの可能性」

2019年２月９日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

西　真如（京都大学）「身体の痛みに寄りそう――大阪市西成区の単身高齢者を看取る訪問看護師」

田中大介（東京大学）「遍在する死と遺体――東日本大震災における葬儀業の支援活動とデス・ワーク」

2019年２月10日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）

松繁卓哉（国立保健医療科学院）「地域包括ケアシステムにおける『住民参加』『地域資源』の課題」

2019年２月23日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

鈴木勝己（早稲田大学）「タイ・エイズホスピス寺院における『死にゆく力』の考察」

渥美一弥（自治医科大学）「カナダ先住民サーニッチにとっての死と儀礼について」

2019年２月24日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）

渡邊欣雄（東京都立大学）「あの世のために生きる――漢族の死生観と死の条件」

成果

2018年度は「看取り文化」の再構築に向けて、海外における死と看取りの実践例（タイ・エイズホスピス寺院、カナダのサーニッチ社会、中国の漢族）と、日本における死と看取りをめぐる実践例（北海道札幌市、神奈川県藤沢市・横須賀市、大阪市、千葉市、宮城県・福島県）を集めた。さらに、日本の高齢者医療政策の「地域包括ケアシステム」が抱える課題、そして地方創生の一環である「生涯活躍のまち（日本版CCRC）」構想を通して、国家政策と「看取り」とコミュニティとの関係について検討した。日本における伝統的な「看取り文化」が消滅している現在、「看取り文化」の構想が果たして可能かと問い、「消滅の語り」と「生成の語り」というクリフォードの「文化」概念を導入することにした。新たな「看取り文化」が生成される可能性を検討する際に、地方行政の取り組みや専門家による活動、地域住民の参加の有無など、地域資源の実態を踏まえて、死と看取りにかかわる実践とコミュニティ（ローカルな地域）との関係を精査する必要があることを確認した。

「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する５つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1) ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2) 飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3) 衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という３つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巌（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者　縄田浩志

班員（館内）石山　俊　　西尾哲夫

（館外）遠藤　仁　　片倉邦雄　　河田尚子　　郡司みさお　　児玉香菜子　　坂田　隆　　真道洋子

中村　亮　　西本真一　　原　隆一　　藤本悠子　　古澤　文　　渡邊三津子

研究会

2018年８月６日（月）13：00～17：00（国立民族学博物館　第４演習室）

石山　俊（国立民族学博物館）「ワーディ・ファーティマのオアシス農業について」

渡邊三津子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）「ワーディ・ファーティマの景観・土地利用の変化について」

遠藤　仁（秋田大学）「ワーディ・ファーティマの物質文化――ジュムーム社会開発センター収蔵品から」

郡司みさお（片倉もとこ記念沙漠文化財団）
「ワーディ・ファーティマにおける女性の衣装・服飾・装身具について」
藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）「ワーディ・ファーティマの女性たち――半世紀をへて」
質疑応答

2018年８月７日（火） 10：00～15：00（国立民族学博物館　大演習室）
縄田浩志（秋田大学）「ワーディ・ファーティマで撮影された半世紀前の写真からわかること」
竹田多麻子（横浜ユーラシア文化館）「男性の視点から蒐集した西アジア服飾品――横浜ユーラシア文化館所蔵品を通して」
質疑応答
総合討論「女性と男性の空間、内と外」

2018年９月30日（日） 13：15～17：00（国立民族学博物館　第１演習室）
台風により中止：一部プログラムを翌日と入れ替えの上、実施。発表予定であった内容の一部は、第３回（2019年２月22日）に実施。

2018年10月１日（月） 10：00～15：00（国立民族学博物館　第１演習室）
縄田浩志（秋田大学）・河田尚子・郡司みさお・藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）
「“見られる女”より“見る女”――サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」
質疑応答
総合討論「女性と男性の空間、内と外」

2019年２月22日（金） 13：00～16：10（国立民族学博物館　第４セミナー室）
西尾哲夫　開催趣旨説明
坂田　隆（石巻専修大学）「ヒトの暑熱対応の性差――衣への理学的アプローチ」
西本真一（日本工業大学）「マシュラベーヤの役割――住への工学的アプローチ」
石山　俊（国立民族学博物館）「オアシス農耕の現在――食への農学的アプローチ」
縄田浩志（秋田大学）「コーヒー文化の起源・伝播・拡散――適応への人文学的アプローチ」
辛嶋博善（国立民族学博物館）コメント
松尾瑞穂（国立民族学博物館）コメント
窪田順平（人間文化研究機構）コメント
総合討論「沙漠への適応と生活世界の形成」

2019年２月23日（土） 10：00～15：00（国立民族学博物館　第１演習室）
藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）・郡司みさお（早稲田大学）・渡邊三津子（奈良女子大学）・遠藤仁（秋田大学）「半世紀前に写しこまれた被写体の氏名・親族関係の同定をめぐる諸課題――ワーディ・ファーティマ古写真の利用許諾をめぐって」
討論「沙漠社会における古写真の活用」

成果

本共同研究２年度目の2017年度には、物質文化の中でも、ベランダとベール、衣装と住居に関わるモノに焦点をあてて、サウジアラビアのオアシスを舞台とした８つの事例報告をもとに議論を行った。他方、「沙漠への適応と生活世界の変容――文理共創的視点から考える現代中東地域研究」と題して、よい大きな枠組みにおける研究会を組織した。初期人類の誕生と拡散の舞台でもあった中東・北アフリカの沙漠において、人間はどのような適応戦略のもと生活世界を形成してきたのか、衣食住を中心とした物質文化に関する文理協働の研究成果に基づき、議論した。本研究会の成果として『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』をまとめた（縄田浩志編、河出書房新社、2019年６月出版予定）。とくに沙漠への適応戦略として、衣に対しては「暑熱と寒暖差への対応」「女性と男性の体温調整」（50～53頁）において、食に対しては「水くみの道具にみる半世紀の変化」「アラビア・コーヒーを淹れる」「アラビア・コーヒーや紅茶を飲む」（118～123頁）において、住に対しては「家屋のタイプ――移動と定住」「家屋の空間――女性と男性、内と外」「ラウシャンの機能――光と風を調整する」（53～59頁）における考察は、本研究会における理学、工学、農学、人文学的アプローチの統合による研究成果である。

「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

ICT（Information and Communication Technology）の活用が我々の生活のさまざまな側面に浸透し、直接対面的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共

同研究では、身体技法の伝承・表象・実践にテクノロジー（ここではコンピューター技術の活用を意識したICTを指す）やデジタル技術の導入が、人の記憶やイメージにどのような作用を及ぼし、それにより身体技法がいかに変化し再構築されているか、地域ごとの事例に基づいて比較検討を行う。

身体化することが求められる技芸や知識等は、従来、口伝や観察に基づき自得されてきたが、近年ではデジタル技術の発展に伴い技芸をデータ化する傾向が顕著である。それによりメディアやネットなどを通じてより拡大された社会関係のなかで身体技法の共有が可能になっている。しかし、身体技法の伝承の過程で導入されているデジタル技術の役割についてはこれまで十分な検討が為されてこなかった。事実、人間の動作、発声、表情、体温などを可視化・言語化・定量化できるが、間や旋律、リズムなどの身体知は、科学的に測りきれない。そこで身体技法の伝承におけるテクノロジー利用の役割に着目した本研究は、身体論や相互行為をめぐる議論、さらにはコミュニケーション論に関する理論的貢献を目指す。

研究代表者　平田晶子
班員（館内）廣瀬浩二郎
（館外）伊藤　悟　　岩瀬裕子　　阪田真己子　　谷岡優子　　日比野愛子　　柳沢英輔　　吉川侑輝

研究会
2018年4月7日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第4セミナー室）
話題提供①日比野愛子（弘前大学）「工場生産の現場にみる身体――機械インタラクション」
話題提供②吉川侑輝（慶應義塾大学大学院）「『精巧なリマインダー』を組み立てるための専門的なテクノロジー――音楽の記録、書き起こし、そして収集」
話題提供③平田晶子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「ソーシャル・メディアのインターフェス状況下で保障されるもの――東北タイ芸能者と機械の相互作用」
総合討論
2018年4月8日（日） 10：00～17：00（国立民族学博物館　第4セミナー室）
特別講師・市野澤潤平（宮城女子学院大学現代ビジネス学部）「ダイビング・コンピューターによる減圧症リスクの可視化」特集の完成に向けて原稿に関するフリーディスカッション、質疑応答、研究に関連するスポットエクスカーション

成果
2018年度は、第6回研究会を2日間にわたって開催した。1日目は、平田晶子、日比野愛子、そして吉川侑輝の3者が国内外の地域における日常的／科学的実践のなかのICTを事例として、それが身体技法の伝達や継承にどうかかわるかや、身体技法を研究する専門的方法においてどう利用されているかを報告した。2日目は市野澤潤平を招聘し、「ダイビング・コンピューターによる減圧症リスクの可視化」と題して講演をいただいた。こうした報告・講演や事例の比較をつうじて、科学技術による「感覚」の拡張という主題がうかびあがった。

以上の成果をふまえながら、研究成果の中間報告として、研究員有志で『国立民族学博物館研究報告』の特集に取り組んだ。しかしながら、それぞれの事例が多岐にわたっていたため、共同研究全体をまとめる枠組みの設定という課題を残した。

なお12月に予定されていた第7回研究会は、研究代表者の産休制度取得により中止とし、2019年度に延期とした。

「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、今日の宗教の展開について比較検討を行うものである。近年、産業化やグローバル化の加速を背景に、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拝あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、時には信仰を異にする人びとの手にまで拡散している。こうしたモノの新たな受容をとおして、それまで見られなかったスタイルの信仰や実践が生み出されるなど、宗教的な領域におけるモノの存在やその動向は、現代の宗教的世界のあり方を理解するうえで看過できない。

本研究では、世界宗教を主とする複数の宗教を事例に、近年拡大するモノの生産や流通の局面を見据え、それが各地に及ぼすさまざまな影響を浮かび上がらせ、宗教的領域におけるモノの役割、モノを介した信仰の現代的諸相について考える。またここでは、聖像、宗教画、呪具など信仰の対象であるモノだけでなく、宗教的文脈において単に儀礼の装置とみなされてきたようなモノ（祭具、音具、儀礼用具、宗教構造物など）も視野に入れ、人・モノ・

信仰の諸関係について考察を深める。

研究代表者　八木百合子
班員（館外）小西賢吾　竹村嘉晃　田村うらら　鳥谷武史　中川千草　長嶺亮子　丹羽朋子
野上恵美　福内千絵　古沢ゆりあ　笠井みぎわ

研究会
2018年5月19日（土）13：00～18：30（国立民族学博物館　第1演習室）
◇テーマ「図像（イメージ）と信仰――美術・文化史の視点から」
鳥谷武史（金沢大学）「異形の神が持つモノ――日本の中世社会と弁才天の図像に着目して」
福内千絵（関西学院大学）「イメージをめぐる現前と不在――プージャー儀礼の実践から」
古沢ゆりあ（滋賀県立近代美術館）「図像（イメージ）の越境と変容　近現代アジアにおける民族衣装を着た聖母像の誕生」
全員「総合討論」
2018年10月27日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第1演習室）
◇テーマ「イスラーム世界におけるモノの現在」
田村うらら（金沢大学）「トルコ絨毯の軌跡と信仰実践信仰実践――寄進と礼拝を中心に」
二ツ山達朗（平安女学院大学）「ムスリムの日常空間におけるクルアーンの物質化――チュニジアにおける室内装飾具の事例から」
全体討論
2019年1月26日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第3演習室）
◇テーマ「仏教の実践におけるモノ」
長嶺亮子（沖縄県立芸術大学）「信仰実践のための音楽としての電子念仏機――中国仏教における音とモノの事例から」
小西賢吾（金沢星稜大学）「つながりを作るモノ－チベットの宗教実践の事例から」
全体討論
2019年2月23日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第3演習室）
◇テーマ「新大陸に渡った“レタブロ”の軌跡」
八木百合子（国立民族学博物館）「アンデスの箱形祭壇――モノのポータビリティと信仰」
高木崇雄（日本民藝協会）「メキシコの奉納画、その役割――信仰・革命・美術」
全体討論

成果
仏教、イスラム教、キリスト教（カトリック）をはじめ世界宗教を中心に、各宗教におけるモノの扱いや位置づけに関して、各メンバーが事例をもとに報告をおこない、教義的な解釈と人びとの実践上の実態について理解を深めたほか、神々を扱った図像や彫像を分析する美術史および文化史専門のメンバーの報告をもとに、図像（イメージ）と信仰のかかわりおよびその変遷などについて議論をおこなった。こうした報告をつうじて、①これまで議論の前提としてきた、物質と聖性を二分化することの見直しや、モノをめぐる現代的な問題として、②宗教的なモノの処分や転生、③モノの蓄積と聖性のかかわり、さらに、④ヴァーチャル空間における神々の出現や神具および宗教実践の代替装置の出現といった進化するテクノロジーの影響についてなど、複数の論点が浮かび上がってきた。また、目に見えないモノを感じ取る聴覚・触覚・嗅覚等の感覚への注目など、現代の宗教的世界をとらえるための新たな視点が見いだされた。これらの点については、次年度の研究会で議論を深化させ、最終成果として結実させる予定である。

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」
本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展させた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費が限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その意義を整理し再考する。

研究代表者　園田直子
班員（館内）日髙真吾　平井京之介　吉田憲司
（館外）大関勝久　大森康宏　木川りか　佐藤嘉則　末森　薫　髙畑　誠　鳥越俊行
馬場幸栄　森田恒之　山口孝子　和田　浩

研究会
2018年６月８日（金） 10：30～17：00（国立民族学博物館　大演習室）
木川りか（九州国立博物館）「九州国立博物館における環境保全の取り組み」
和田　浩（東京国立博物館）「東京国立博物館における環境保全の取り組み」
鳥越俊行（奈良国立博物館）「奈良国立博物館における環境保全の取り組み」
髙畑　誠（宮内庁正倉院事務所）「正倉院宝物の保存管理」
2018年12月６日（木） 13：00～16：00（国立映画アーカイブ相模原分館）
映像資料の収蔵・保管方法の実態調査（収蔵庫見学）
全員：ディスカッション
2018年12月７日（金） 10：00～12：00（東京都写真美術館）
写真資料の収蔵・保管方法の実態調査（収蔵庫見学）
全員：ディスカッション
2019年２月８日（金） 13：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
＜テーマ：災害対策＞
日高真吾（国立民族学博物館）「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の被害と対応について」
園田直子（国立民族学博物館）「国立民族学博物館における大阪北部地震による収蔵庫の被害状況」
＜テーマ：生物被害対策＞
河村友佳子（国立民族学博物館）「恒温恒湿槽を用いた高温処理――47.5℃繰り返し実験 2018年度の進捗」
橋本沙知（国立民族学博物館）「低酸素濃度環境での資料保存実験の進捗状況」
和高智美（合同会社文化創造巧芸）「生物生息調査の分析事例」
＜テーマ：収蔵庫再編成＞
末森　薫（国立民族学博物館）「オランダにおける収蔵庫再編成の動向」
全員：来年度の活動に関するディスカッション

成果
第１回研究会では、九州国立博物館、東京国立博物館、奈良国立博物館、宮内庁正倉院事務所における保存環境、保存対策、環境調査の発表を受け、現状を検証し、問題点を整理する作業を行った。第２回研究会では、国立映画アーカイブ相模原分館においては映像資料、東京都写真美術館においては写真資料、それぞれの収蔵・保管方法の実態調査を行った。これらの発表とそれにつづくディスカッションから、各機関に共通する課題（生物生息調査、温度湿度モニタリング、環境分析など）が明らかになった。来年度は、各種調査・分析手法の最適化と効率化をはかることを目指しており、そのための共通基盤が形成された。
第３回研究会では、６月の大阪府北部を震源とする地震をふまえ、博物館における防災・減災対策をたてるうえでの参考とすべく、本館の被害状況と対応について情報を共有した。また、本館の文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」と連携して進めている研究開発（高温殺虫処理、低酸素濃度環境下での資料保管）の進捗状況をもとに、実験結果を評価、検証した。

「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」
日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショ

ナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学／民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学／民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立する人類学／民俗学を歴史のコンテキストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者　中生勝美

班員（館内）飯田　卓　　宇田川妙子

（館外）飯嶋秀治　　池田光穂　　臼杵　陽　　江川純一　　及川祥平　　加賀谷真梨　　栗本英世

角南聡一郎　　泉水英計　　田中雅一　　山田仁史　　佐藤若菜　　Damien KUNIK

研究会

2018年５月12日（土） 10：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

中生勝美（桜美林大学）研究会経過報告

今年度の研究、全体打合せ

新メンバーの研究計画報告　佐藤若菜（新潟大学）・Damien　KUNIK（国立民族学博物館）

及川祥平（成城大学）「偉人崇拝と民俗学」

角南聡一郎（元興寺文化財研究所）「戦時下金属供出をめぐるモトと宗教」

2018年12月27日（木） 10：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

中生勝美（桜美林大学）研究会経過報告

佐藤若菜（新潟国際情報大学）「中国民族学界における鳥居龍蔵の調査・研究への評価」

飯田　卓（国立民族学博物館）「学会から協会へ――日本民族学会設立後の10年、あるいは時局便乗とフィランソロピー」

田中雅一（京都大学）「アートから遺品、そしておみやげへ――トレンチ・アートをめぐって」

2019年１月26日（土） 10：00～18：00（国立民族学博物館　大会議室）

国立国語研究所図書館で九学連合会の資料閲覧

中生勝美（桜美林大学）「アメリカ・ミシガン大学の日本研究と原子力平和利用の関連」

朝日祥之（国立国語研究所）「War Department によって作成された phrasebook について」

谷口陽子（専修大学）「ミシガン大学日本研究所の戦後日本研究における日本の公衆衛生への関心」

泉水英計（神奈川大学）「米海軍軍政学校と民事ハンドブック」

加藤哲郎（一橋大学）総合コメント

2019年２月18日（月） 10：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）

中生勝美（桜美林大学）事務連絡

池田光穂（大阪大学）「ナチス医学関係者の戦争犯罪と戦後の科学研究の継続性について」

山田仁史（東北大学）「ドイツ語圏民族学史における国家社会主義――研究動向のレビュー」

加賀谷真梨（新潟大学）「米国統治下沖縄における「生活改善」関連事業」

総合討論

成果

本年度は、共同研究員の発表をほぼ終えた。今年度は、従来の研究成果に、共同研究会の趣旨である戦間期の政治状況と人類学／民俗学を歴史の文脈から学知の歴史を再構築する目的で報告してもらった。特に第３回の国立国語研究所で開催した共同研究会では、加藤哲郎一橋大学名誉教授に総合コメントを依頼し、政治史・現代史の観点から、戦前・戦後の歴史の流れと学知の形成について有益なコメントをもらい、出席者は大変刺激を受けた。またこの研究会で、社会言語学の分野からも、戦時期の分析には新しい研究動向を知ることができた。今年度の収穫は、この研究会のメンバーを中心に科研基盤Ｂ「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」に応募し採択されたので、今後の海外のアーカイブ調査が可能になった。この採択に当たり、本研究会での定期的な共同研究と、国立民族学博物館の図書館利用が大変役に立った。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者　中川敏
班員（館内）飯田　卓　　松尾瑞穂
（館外）唐沢かおり　　高田　明　　戸田山和久　　中川　理　　中空　萌　　中村　潔　　浜本　満
山田一憲

研究会
2018年５月12日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
中村　潔（新潟大学）「力のメタファー」
全員 ディスカッション
浜本　満（九州大学）「信念とはなにか」
全員 ディスカッション
2018年７月22日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
中空　萌（広島大学）「近年の人類学的知識論の展開と自然主義」
ディスカッション
中川　理（立教大学）「生き方の持続を可能にするもの――フランスのモン農民の事例から」
ディスカッション
2018年10月27日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
松尾瑞穂（国立民族学博物館）「科学と歴史のもつれあい――インドのアーリア人論争」
全員によるディスカッション
山田一憲（大阪大学）「ニホンザルの寛容性にみられる地域間変異」
全員によるディスカッション
2019年２月23日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
唐沢かおり（東京大学）「I was born to be science ―― With every single beat of my heart」
菅原和孝「科学としての社会心理学、科学としての人類学」
戸田山和久（名古屋大学）「君の行く道は果てしなく遠い。だのになぜ歯をくいしばり、君は自然化するのか。そんなにしてまで。」
内堀基光「哲学を自然化する、人類学を自然化する」
全員　総合ディスカッション

成果

初年度および昨年度を終了した時点で全員が発表し終えることができた。発表、およびディスカッションを通じて、この研究会の目的である「人類学の自然化」が何を指すのかが、参加者全員によって共有されるようになった。大ざっぱにいって、人類学の自然化には２つの方向――すなわちプラグマティズム的回転と生物学的回転――があるという認識が共有された。昨年度の最終回の（プラグマティズムの方向をもつ）社会心理学者唐沢の発表および（生物学の方向をもつ）哲学者戸田山の発表にさいしては、人類学者から多くの質問があった。今年度の最初の研究会では古典的な意味での自然化に貢献してきた二人の人類学者内堀および菅原に発表をお願いしている。そうすることによって、「自然化」と人類学の伝統との接木の作業を行ないたい。その後は各人に（これまでの議論を踏まえた）二回目の発表をしてもらい、「人類学の自然化」の青写真を完成させたい。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者

の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実に即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状況、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30～40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラリティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者　田沼幸子

班員（館内）相島葉月　　八木百合子

（館外）伊東未来　　猪瀬浩平　　酒井朋子　　佐川　徹　　佐久間寛　　佐々木祐　　中川　理
深澤晴奈　　宮本万里

研究会

2018年７月14日（土） 11：00～18：00（上野アメ横「呑める魚屋魚草」周辺、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス）

田沼幸子（首都大学東京）と大橋摩州（研究協力者）の対談「日本におけるネオリベラル経済の展開とアメ横」

佐川　徹（慶應義塾大学）「アフリカにおける土地収奪と社会的保護」

伊東未来（関西学院大学）「マリ人の国外における商業活動について」

2018年９月29日（土） 13：00～17：00（国立民族学博物館　第２演習室）

深澤晴奈（東京大学）「スペインにおける移民の社会統合と社会政策」

相島葉月（国立民族学博物館）「空手道に見るエジプトの社会階層とスポーツ実践」

総合討論

2019年２月９日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）

田沼幸子（首都大学東京）趣旨説明・研究者紹介

猪瀬浩平（明治学院大学）「＜ネオリベラリズム＞と＜ボランティア＞再考」

佐々木祐（神戸大学）「ネオリベ的暴力によって析出される『個体』――メキシコにおける中米移民・難民の実情から」

松村圭一郎（岡山大学）「人類学と映像表現――『マッガビット：雨を待つ季節』（2016）をもとに」

総合討論

成果

３回の研究会はどれも非常に密度の濃いものであった。大橋摩州氏との対談から、日本において官主導のネオリベラリズムの広がりが言われる以前から、アメ横においては「神様」がおらず商店街として祭りもない、個人主義的で競争的な経営が行われていることが明らかになった。これに対し、研究発表ではエチオピア、マリ、スペイン、エジプト、日本、メキシコからの多様な事例が挙げられたが、多くは政府が経済自由化を推進している。それはむき出しの競争だけをもたらすのでなく、「人権」や「ボランティア」といった用語を用いてバラバラになった諸個人を包摂／統合するという言説に基づいた制度や空間、NGOをも生成する。しかしそれが実際にどのように機能・作用しているかは各事例だけでなく、その場に関わる個人によっても異なり、それぞれの政治経済的なマクロな背景と、各人のミクロな人生のあり方を複眼的に見ることの必要性が明らかになった。

「拡張された場における映像実験プロジェクト」

現場での観察や実測に基づくフィールドワークなど人類学的な手法が、美術、特に映像表現を含むものにおいて随分多く見られるようになり、また人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。このように、従来の学問領域を超えたアプローチが日々更新されているという傾向を踏まえ、本研究では、映像人類学者、文化人類学者とキュレーター、アートコーディネーター、美術家といった芸術に関する専門職に携わる者からなるチームを結成し、多様な領域の理論と現実社会とを芸術を媒介に結びつけることを目指す。異なる領域での活動を行う者が互いにその活動にふれ、交流や協働作業を通してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な研究活動の基盤作りを推進するとともに、従来の学問それぞれのアーキテクチャー（枠組み、構造）自体を拡張、発展へとつなげていくことを目的とす

る。

研究代表者　藤田瑞穂
班員（館内）川瀬　慈
（館外）奥脇嵩大　佐藤知久　西尾咲子　西尾美也　福田浩久　村津　蘭　矢野原佑史

研究会
2018年11月30日（金） 14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
藤田瑞穂（京都市立芸術大学）「共同研究の趣旨説明と検討課題について」
全体討論
2019年２月１日（金） 14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
矢野原佑史（京都大学）「音楽主体の映像編集による文化表象」
西尾美也（奈良県立大学）、西野正将（美術家／映像ディレクター）「映像編集と表現の「拡張」――言語／非言語による二次的な語りの可能性」
総合討論

成果
本研究の前段階として行われた主要メンバーによる関連プロジェクト「im/pulse: 脈動する映像」（2018年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）は、「感覚民族誌」を文化人類学とアートの双方の観点から捉える実験であった。その後の展開として本研究会では、文化人類学とアートに関わるメンバーにより、字義通りの「映像」のみならず、映像的な要素を持つ表現・活動も含めながらその可能性や問題点、将来的展望などについて検証している。また、第１回研究会の全体討論で話題に上った「映像による二次的な語り」についてさらに議論する場を設けることを目的とし、第２回に美術家／映像ディレクターの西野正将氏を特別講師に迎えて討論を行った。文化人類学、アートというそれぞれの枠組みを取り外し、研究対象に対するより本質的な考察のあり方を検討するべく、今後も回ごとに分断された内容ではなく、継続的な議論の生まれる場であるように留意しつつ研究を進める。

「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」

本研究の目的は、虚実入り混じる電子情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関する歴史経験の記憶がいかに「史実性」を獲得するのか、想起の場や感情と関連づけて追究することである。

近現代のオセアニアおよび東南アジア島嶼部では、欧米諸国や日本による植民地統治や第二次世界大戦を経て、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、当該地域の人々は、移動して多様な他者と遭遇し、軋轢や戦争に巻き込まれ、また他者との平和的協働を経験してきた。このような他者接触の歴史記憶を焦点化するにあたり、便宜上、1）国民やエスニック集団を統合する公的な集合的記憶、2）個々人の日常生活に根差したヴァナキュラーな記憶の二極を措定しておく。

そして、第一に、２つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人々が感情を伴っていかに集合的記憶および個別経験の記憶を生成、継承し、あるいは忘却していくのかを考察する。さらに、遺物や文書、語りを通して想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく、人々の感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす潜在力を有する。そこで第二に、今を生きる人々の歴史記憶が立ち現れる場を射程に入れ、想起が内包する感情および身体的な特性の把握を目指したい。

研究代表者　風間計博
班員（館内）丹羽典生
（館外）金子正徳　河野正治　北村　毅　桑原牧子　小杉　世　長坂　格　西村一之
比嘉夏子　深川宏樹　藤井真一　森亜紀子　山口裕子　吉田匡興

研究会
2018年10月28日（日） 13：30～19：30（国立民族学博物館　第４演習室）
風間計博（京都大学）「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情の人類学」
質疑応答
研究方針の口頭説明（10分×14人）

全体討論

2019年２月22日（金）13：30～19：00（国立民族学博物館　第４演習室）

風間計博（京都大学）「バナバ人の歴史記憶とナショナリズム――「史実性」をめぐる一考察」

質疑応答

山口裕子（北九州市立大学）「生きている過去と身体――1960年代以降のインドネシア地方社会における集団的暴力へのアプローチ」

質疑応答、全体討論

成果

初年度は、２回の研究会を国立民族学博物館において開催した。第１回研究会では、共同研究会の検討課題および目的、他者接触（植民地・戦争・移民経験等）、歴史記憶、史実性といった鍵概念を軸にして、代表者（風間計博）が基調報告を行った。次いで、共同研究会メンバー各々が、問題関心や研究主題について簡潔に報告し、相互批評のうえで総合討論を行った。この結果、メンバーによる問題意識の共通性および個別の問題関心、今後の検討課題を浮かび上がらせることが可能となった。第２回研究会では、風間計博が、初回の発表を概括したうえで、オセアニア島嶼部の強制移住経験者であるバナバ人を対象として、歴史記憶を再構築する創作歌劇と感情の喚起に関する事例報告を行った。さらに、山口裕子は、インドネシアの東南スラウェシ州において、1969年に勃発した集団的暴力事件（69年ブトン事件）をとりあげ、巻き込まれた人々の詳細な語りを素材とした事例報告を行った。報告の後、参加者全員によって、歴史記憶や語りに内包される矛盾および史実性概念に関する討論を行った。

「伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって」

本研究では、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち，使用されてきた伝統染織品が商品化され，従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とする。とくに、ローカルな文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や，商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸とする。具体的には、1）個別の伝統染織品に対してどのような価値づけが行われるようになったか、2）個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味がどのように変容してきたか、3）そこに生じる変容は，伝統染織生産に用いられる技法や素材の選択にも影響を及ぼしているかといった課題に取り組む。

研究代表者　中谷文美

班員（館内）上羽陽子

（館外）青木恵理子　五十嵐理奈　今堀恵美　落合雪野　金谷美和　窪田幸子　佐藤若菜　杉本星子　田村うらら　松井　健　宮脇千絵

研究会

2018年10月６日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

中谷文美（岡山大学）「伝統染織品の生産と消費」をめぐる問題提起

各共同研究者のテーマ紹介と研究の方向性に関する全体討論

2018年12月８日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第３演習室）

窪田幸子（神戸大学）「〈クラフト〉から〈アート〉へ？――オーストラリア、アーネムランドにおける女性のテキスタイル制作の軌跡」

青木恵理子（龍谷大学）「距離の消費――現代東インドネシアのローカルな染織から19世紀パリのショッピング・アーケードまで」

全体討論

2018年12月９日（日）10：30～17：30（国立民族学博物館　第３演習室）

金谷美和（国立民族学博物館）「織りの伝統を継承する――日本における自然布の保全活動」

松井　健（東京大学）「変転／変容する商品としての布」

宮脇千絵（南山大学）「民族衣装の〈あたらしいスタイル〉――中国雲南省モン族のファッションとアイデンティティ」

2019年２月17日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室）
中谷文美（岡山大学）「文化をリストにするということ――インドネシア伝統染織をめぐる境界のポリティクスと遺産化」
田村うらら（金沢大学）「伝統を継ぎ接ぎする――トルコのファッショナブル絨毯の流行について」
「モノ語り」Part Ⅰ：窪田幸子（神戸大学）「アボリジニのバスケタリー」
2019年２月18日（月）10：00～17：30（国立民族学博物館　第６セミナー室）
上羽陽子（国立民族学物博物館）「染色技術の戦略的選択――インド西部グジャラート州の女神儀礼用染色布から」
杉本星子（京都文教大学）「御召から紬へのキモノの流行の変化と西陣の黄昏」
「モノ語り」Part Ⅱ：落合雪野（龍谷大学）「東南アジア大陸部の青い布、白い布、赤い布」
総合討論

成果

初年度となる2018年10月～2019年３月は、３回にわたって研究会を開催した。第１回は、研究会の趣旨を代表から説明したほか、欠席者も含めメンバー全員が自己紹介シートを作成し、布・工芸に関する各自の研究実績や現在の関心、今後取り組む予定の課題などを共有した。

第２回、第３回は、本共同研究の前史と位置付けている科研費の共同研究の成果に基づき、窪田、青木、金谷、松井、宮脇（第２回）及び中谷、田村、上羽、杉本（第３回）が集中的に報告を行った。これらの報告及び全体討論を通じて、観光、文化遺産、市場戦略等において「伝統」と位置付けられることの多い各地の染織品に関し、さまざまな変化をもたらす要因を洗い出し、今後の議論のベースを作ることができた。

合わせて、第３回にはメンバーが調査地でこれまで収集してきた布・工芸品の一部について、それらの具体的なモノと研究者自身のかかわり、あるいはそれらのモノに表れている変化と生産現場や市場の変化を重ねて紹介する試みを行った。Part Ⅰは窪田、Part Ⅱは落合が担当した。

「心配と係り合いについての人類学的探求」

ケアの実践と社会の制度や規範との関係を扱った従来の研究においては、それらの実践が当該社会に所与の価値規範をどのように実現しているか、あるいはその実現に失敗しているかが問題となることが多い。それに対して本研究では、人々が日常的に経験する心配や係り合いが、いかなる価値や秩序の産出に寄与しているのかを問うものである。本研究ではそのような価値を産出する関係性、およびそこに動員される知識や資源の総体に関する探究をケアの生態学と呼ぶ。本研究の枠組みは、いわゆる高福祉国家とそうでない国家とを隔てる制度的差異や、地域によって異なるケアの規範と実践の差異による制約を受けることなく、世界におけるケア実践の多様性を分析・考察の対象とすることを可能にするものである。本研究に参加する研究者は、医療人類学、政治人類学、地域研究および隣接する研究領域で蓄積されてきた方法や知見を持ち寄ることで、ケア実践を包括的に分析する枠組みづくりに貢献すると同時に、その成果を自らの民族誌的記述に反映することができる。

研究代表者　西　真如
班員（館内）森　明子
（館外）有井晴香　池見真由　大北全俊　加藤敦典　佐藤奈穂　内藤直樹　中村沙絵
馬　場淳　浜田明範　モハーチ ゲルゲイ　森口　岳

研究会

2018年12月１日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
西　真如（京都大学）「心配、価値、ケアの生態系――この共同研究で何を目指すのか」
有井晴香（京都大学）「エチオピア西南部マーレにおける子どもの生存をめぐるケアと秩序」
総合討論
2018年12月２日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館　大演習室）
出席者全員「研究紹介――最近の研究関心とこの共同研究への期待」
2019年２月３日（日）９：30～16：00（国立民族学博物館　第３演習室）
中村沙絵（京都大学）「スリランカにおける原因不明の腎臓病（CKDue）をめぐるヘルス・アクティヴィズム―調査に向けたラフ・スケッチ」
池見真由（札幌国際大学）「サニテーション・バリュー・チェーンの人類学的考察」

浜田明範（関西大学）「化学的環境と化学化する認識の民族誌的探求にむけて」
総合討論

成果

本共同研究は、人々が日常的に経験する心配や係り合いが、いかなる価値や秩序の産出に寄与しているのかを問うものである。本研究ではそのような価値を産出する関係性、およびそこに動員される知識や資源の総体に関する探究をケアの生態学と呼ぶ。2018年12月に実施した最初の研究会では、ベイトソンの「精神の生態学」をはじめとする人類学的な議論の枠組みに本共同研究の問題意識をどう位置づけるか検討した。またエチオピア南部社会で出生上の禁忌に触れた子がどのように養育されているかという問題（有井）を通して、従来の規範や制度に回収されないケアの実践の可能性についての議論をおこなった。2019年２月の研究会では、スリランカにおける原因不明の腎臓疾患（中村）、インドネシアにおけるし尿処理とその価値連鎖（池見）、およびガーナにおける食品の流通や摂取がつくりだす化学的環境（浜田）の問題を踏まえ、ケアの関係性の中で動員される知識・技術・資源が、いかなる社会的価値の産出を媒介するのか検討した。

「統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する」

本研究では、統治のフロンティア空間、つまり国家の中心部から隔たれ、統治の遂行が希薄である空間の動態に着目する。P・クラストルやI・コピトフ、J・スコットは、国家と国家に捕捉されざる住民との関係を各地域レベルで論じた。彼らが対象としたのは、主として植民地化以前や第二次世界大戦以前の世界である。だが、フロンティア空間の国家への包摂は不可逆的なプロセスではない。国家による領域化が一度は完遂したと思われる地域も、国家の統治能力の減退により、再度フロンティア空間に回帰することがある。また国家統治から放置されていた地域が、新たな資源の商品化により、資本や国家からフロンティア空間として再度見出されることもある。フロンティア空間の「発見と消失」は循環的な現象である。実際、21世紀に入ってから、世界各地で新たなフロンティア空間が「発見」され、その開発と領域化が進行している。本研究の目的は、アフリカ・東南アジア・中南米地域の事例分析をとおして、国家による統治と資本主義への接合から完全には逃れられない現代世界で、フロンティア空間の住民がいかに生活の再編を試みているのかを示すことである。

研究代表者　佐川　徹
班員（館内）池谷和信　南真木人
（館外）王 柳 蘭　大澤隆将　岡野英之　桐越仁美　日下部尚徳　久保忠行　後藤健志
近藤　宏　鈴木佑記　武内進一　二文字屋脩

研究会

2019年２月２日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
佐川　徹（慶應義塾大学）「趣旨説明」
全員「自己紹介」
佐川　徹（慶應義塾大学）「サハラ以南アフリカにおけるフロンティアをめぐる先行研究」
後藤健志（東京外国語大学）「中南米におけるフロンティアをめぐる先行研究」
岡野英之（立命館大学）「先行研究レヴューから得られる知見」

成果

本年度の研究会では、まずフロンティアをどのように定義するかを検討し、「外部者の視点からは現在の居住者による管理や利用が希薄ないし過小に映る空間」と定義づけることにした。またそれぞれの特性から、フロンティアがいくつかの種類にわけうることを確認した。たとえば、国家が支配の貫徹を目指す「統治フロンティア」、企業らが資源の抽出を目指す「資源フロンティアないし、抽出フロンティア」、NGOなどが援助や支援の対象とする「支援フロンティア」、国家や企業の進出対象とされた地域の人びと自身がローカルに見出す「在地フロンティア」、従来の居住地から追いやられた人たちがつくりだす「難民フロンティア」などである。さらに、J.スコットの『モラル・エコノミー』から『ゾミア』にいたる各著作の内容をいかに本研究会での分析に取りこんでいくのか、その際には政治生態学的な視点とどのような関係づけになるのか、といった点も議論がなされた。

「グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。西欧の列強と呼ばれた国々では、かつての植民地から大量の移民が流れ込み、ある意味では予想外の、だが、ある意味では、必然の結果とも言うべき、皮肉な現象が起きている。こうした地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者認識としての「異人」を迎える側の経験は、その質と量において、かつての「異人論」が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。さらに、この大量移動の時代は、程度の差こそあれ、誰もが自らも異人となる経験を持つことが当たりとなっている。問題は、こうした状況において、大小さまざまなコンフリクトが発生し、「不寛容」社会が出現しつつある点である。

本研究では、こうした状況を解明し、これに応答するために手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学及び民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧れなどの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究の蓄積がある。本研究では、「異人論」という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的とする。

研究代表者　山　泰幸

班員（館内）西尾哲夫

（館外）鵜野祐介　及川祥平　小川伸彦　カルディ ルチャーナ　川島秀一　川松あかり
君野隆久　國弘暁子　小松和彦　竹原　新　村井まや子　横道　誠

研究会

2018年11月10日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第２演習室）

山泰　幸（関西学院大学）「共同研究会の趣旨説明」

参加者全員「各自の研究紹介と今後の予定について」

2018年11月11日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館　第２演習室）

西尾哲夫（国立民族学博物館）「アラビアンナイトからシャイロック、そして異人学にむけて――女嫌い・反セム主義・イスラモフォビア」（仮）

2019年２月９日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）

西尾哲夫（国立民族学博物館）「中世から近代におけるアラブ民衆文学の中国表象――アラビアンナイト異本の比較分析から」

色　音（中国社会科学院民族学與人類学研究所）「中日馬娘婚姻物語の比較的考察」

村井まや子（神奈川大学）「日本の現代美術をとおしてみる野生動物駆除の現状と民話的動物表象の変容」

杜　淳（天津工业大学马克思主义学院）「作为人文资源的伏羲神话」

2019年２月10日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）

鵜野祐介（立命館大学）「説話伝承とダイバーシティ――手話による絵本よみ語りの活動を通して」

郑 筱 筠（中国社会科学院世界宗教研究所）「中国における仏本生物語について」

君野隆久（京都造形芸術大学）「日本における薩埵（サッタ）王子本生譚」

成果

初年度の2018年度は、第１回目の研究会では、研究代表者の山から共同研究の趣旨の説明と、館内代表者の西尾から自身の研究をもとに共同研究の理論的枠組みや狙いについて報告がなされた。第２回目は、関西学院大学シルクロード研究センターと共催で、同センターが招聘した中国社会科学院民族学與人類学研究所、中国社会科学院世界宗教研究所、天津工业大学马克思主义学院の人類学者、民族学者など関連分野の研究者の参加を得て、「シルクロードと文化交流――人の移動、表象、物語」をテーマに、国際シンポジウム形式で実施した。刺激的かつ有意義な機会となった。さらに研究交流を進めることになった。

「カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて」

本共同研究の目的は、「利己性」と「経済」という視点から、公共性概念に関する人類学的な考察を深めることにある。そのために、近年の情報通信技術の発展のもとで営利を追求する諸主体（企業・NGO・個人・コミュニティ等）による実践に焦点をあてる。そして利己的な主体による、生存上の必要（食・住居・教育・医療・福祉等）の充足に関わるやりとりが、公的な領域やネットワークを創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検

討を通じて、グローバルな政治経済的状況における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるか考察することでもある。そのために本共同研究では、市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をともなう相互行為としての経済に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて「公共性の生態学」を構想する。

研究代表者　内藤直樹
班員（館内）森　明子
（館外）飯嶋秀治　岩佐光広　岡部真由美　北川由紀彦　木村周平　工藤由美　久保忠行
沢山美果子　髙橋絵里香　中野智世　藤原辰史　丸山淳子　三上　修
モハーチ ゲルゲイ　山北輝裕

研究会
2018年10月27日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）
内藤直樹（徳島大学）趣旨説明
篠原雅武（京都大学）「人新世的状況における『人間の条件』」
全員・総合討論
2018年12月15日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
三上　修（北海道教育大学）「カネとチカラが生み出した都市を利用する生物――スズメから見た都市空間」
モハーチ・ゲルゲイ（大阪大学）「地球と身体のループが生み出す公共性――『代謝』をめぐって」
全員・総合討論
2019年１月26日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
森　明子（国立民族学博物館）「ケアが生まれる場をとらえる」
沢山美果子（岡山大学）「日本近世の『公共空間』と『共生』――近世史研究の議論から（仮題）」
全員・総合討論
2019年１月27日（日）９：00～12：00（国立民族学博物館　第１演習室）
飯嶋秀治（九州大学）「施設間移行と生存経路（仮題）」
全員・今年度の総括

成果
本共同研究の目的は、人間と非人間によるネットワークのなかで「ケア」というユニークな出来事が生起する機序について考察することにある。それゆえ、特定のやりとりをアプリオリに「ケア」として措定することを回避するために、経済学と生態学的な観点を導入する。そして非人間を含んだネットワークにおけるモノや情報のやりとりのなかで生起する「ケア」という行為や関係性の諸相を観察する。

本研究の理論的な視座と枠組みを精緻化するために、人間の行為主体性や環境との関わりに関する根源的な問いかけである人新世議論に関する論者および生態学者による生き物から見た「都市的なもの」に関する研究発表をもとに、それを人文――社会科学系の研究者（人類学・社会学・歴史学）がいかに受けとめうるのかについての議論をおこなった。生物の世界における被食――捕食関係に見られるような、「理解」を前提としない関係の連鎖が、結果的に自己あるいは社会的なシステムを形成するに至る機序を解明することが、本研究をすすめる上では重要であることが明らかとなった。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム
シンポジウム「アフリカからのイメージの創造――映像人類学トロムソ学派の民族誌映画」
2018年６月23～６月24日　国立民族学博物館
代表者：川瀬　慈

映像人類学の脈絡においてアフリカの諸文化は、欧米の研究者に調査・撮影対象として一方向的に客体化され表

象される傾向が強くある。そのようななか、ノルウェー北部に位置するトロムソ大学映像文化研究科は、1997年の設立以来、カメルーン、マリ、エチオピア、ブルキナファソ等のアフリカ各国から学生を迎え入れ、民族誌映画制作の実践を主軸とするカリキュラムのもと、多くのアフリカ人映像人類学者を輩出してきた。

6月23日：トロムソ大学映像文化研究科に所属、あるいは本研究科を卒業した映像人類学研究者による民族誌映画を上映する。
6月24日：日本のアフリカ研究者の作品や制作計画の発表を行う。アフリカの様々な文化現象や社会問題に対する、カメルーン、ノルウェー、日本の人類学者の視点、映像のアプローチを比較検討し、議論する。

- 開催日：2018年6月23日（土）～6月24日（日）
- 時　間：6月23日（土）　10：30～17：00（開場10：00）
  6月24日（日）　10：30～17：45（開場10：00）
- 場　所：国立民族学博物館　第7セミナー室
- 定　員：60名（先着順／事前申込不要）
- 参加費：無料

※映画上映・字幕・討論（全て英語）。

実施状況

本シンポジウムは関西で発生した地震の影響で中止となった。シンポジウムにおいて発表予定であったノルウェー、トロムソ大学の二名の教員、Trond Waage ならびに、Rachel Djesa Issa はオスロ空港で引き返したが、カメルーン、マルア大学教員の Mouadjamou Ahmadou は、予定通り来日、来館した。当館において Mouadjamou Ahmadou は、館長、池谷和信教授、飯田卓教授、川瀬准教授とアフリカの無形文化の記録、ならびにマルア大学と当館の将来にむけての国際共同研究の計画を練ることができた。地震によるシンポジウムの中止は残念であるが、Mouadjamou Ahmadou との研究交流は大変充実し、有意義なものであった。

成果

以下のホームページにプログラムを掲載済。http://www.cva-iuaes.com/minpaku_africa/

World Museology Workshop “Interuptions: Challenges and Innovations in Exhibition Making”
世界博物館学ワークショップ「刷新：展示における挑戦とイノベーション」
2018年6月27日～30日　国立民族学博物館
代表者　鈴木　紀

実施状況

2018年6月18日に発生した大阪府北部地震による本館および近隣地域の被害を考慮し、開催を中止した。これにともない本リーダーシップ経費で招聘を計画していた4名の海外研究者の航空運賃キャンセル料金が発生した。

成果

予定無し

International Symposium: Fijian Languages and Culture and GIS, and Its Application to Museum Exhibits
国際シンポジウム「フィジー諸言語のGIS分析とその博物館事業への応用」
2018年9月18日～9月21日　国立民族学博物館
代表者：菊澤律子

本シンポジウムは、国際学際共同研究「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」（研究代表者：菊澤律子、2017年4月～2019年3月、りそなアジアオセアニア財団）の研究成果公開の一環として開催する。このプロジェクトでは、フィジーで話される300余言語のデータを地図情報と組み合わせ、通時・共時両側面から言語分析分析を行うためのツール開発を行っている。今回はその中から、フィジーの言語に関する現状、GIS利用の意義と見通し、成果の博物館利用をテーマに、それぞれが研究報告を行い、可能性を探る。

なお、シンポジウムの前後（９月18日、19日、21日）には、プロジェクトメンバーによるサテライト・ワークショップ（英語のみ）を開催する。メンバー以外の関連分野の専門家による聴講も若干名受け付ける。

実施状況

本国際シンポジウムは、りそなアジアオセアニア財団による国際学際共同研究「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」（研究代表者：菊澤律子、2017年４月～2019年３月）の研究成果公開として開催した。言語学、地理学、統計学、その他、関連分野の研究者が一同に会し、これまでの成果を公開・共有するとともに、現時点での問題点や今後の進め方について議論を進めることができた。とくに、

1）民博という場での開催により、国内外の研究者コミュニティや社会への還元を円滑にはかることができた。
2）民博と協定を結んでいるフィジー文化経済社会信託機構におけるフィジーでの新しいカルチュラル・センターでの言語展示の設置計画に上記研究プロジェクトの成果を反映させる方法について、民博のオセアニア展示、言語展示を参考にして議論することができた。
3）設備のととのった研究機関で集まる機会を持ち、ソフトの操作や他の情報などをスムーズに操作することで、次のステップに進むためのディスカッションを進め、今後の研究計画を立てることができた。

これらの成果は、2018年10月に新しく採択になった科研費（国際共同研究Ｂ）による研究事業にも反映させており、５年半計画で、現在、継続進行中である。

成果

本シンポジウム単独の成果としては、予定なし。（ただし、りそな財団助成事業および国際科研Ｂの研究事業として、ウェブ版成果物の制作と現地博物館展示にむけての公開手法に関する研究を進めている。）

国際シンポジウム「ミュージアムの未来」

2018年９月28日　国立民族学博物館
代表者：林　勲男

民族学博物館は、19世紀に各国で設立されるようになったことからわかるように、「博覧会の世紀」の考えかたを強くうけ継いでいます。当時、人類社会は未開段階から産業段階へ進歩し、それぞれの民族文化はこの階梯の特定の中間段階に位置するものだと考えられていた。この進化主義の考えかたは、20世紀になると理論的に誤ったものとして棄却されますが、ミュージアムは、展示をとおして、見る者と見られる者のあいだに非対称的な権力関係を再生産しつづけた。しかし21世紀に入った現在、多くの民族学博物館が、展示とそれに関わるさまざまな活動をつうじて、この権力関係を脱構築しようとしている。

このシンポジウムでは、ミュージアムのあらたな役割を構想します。

実施状況

民博は「フォーラムとしての博物館」を目標に掲げ、現在はフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトを推進している。研究者と来館者・利用者さらにソースコミュニティの人びとの交流・協働から生まれる知見を、新しい共同研究や共同の展示、コミュニティ活動につなげていこうというものである。今回の国際シンポジウムは、基調講演者としてジェイムズ・クリフォード教授（カリフォルニア大学サンタクルーズ校を迎え、民博からはアメリカ合衆国先住民族の一つホピの文化を研究する伊藤敦規准教授と、日本のアイヌ民族の文化を研究する齋藤玲子准教授の２名が（共に学術資源研究開発センター所属）が、それぞれの研究におけるソースコミュニティとの協働について、フォーラム型情報ミュージアムを視野に置きながら報告した。最後のパネル・ディスカッションでは、吉田憲司館長をモデレータとして、クリフォート教授・伊藤准教授・齋藤准教授で博物館とりわけ民族学博物館の未来に向けて意見交換をおこなった。当日は関東、東北、九州からの来場者もあり、297名であった。アンケート回収率は46.3％で、民博のシンポジウム等にこれまで参加したことがある人が57.5％、98％が民博や文化人類学・民族学、今回のシンポジウムのテーマへの興味があると回答した。男性が30代から60代が多かった（約62％）のに対して、女性はそれよりも少し若い20代から40代が多かった（約64％）のが特徴である。また、84％が民博に来館したことがあり、34％が研究や仕事の関係で民博を知っていると回答していることから、研究者か博物館関係者の来場が多かったようである。91.5％が内容を良く理解した、もしくは理解したと回答し、会場をナレッジシアターとしたことに対しても評価が高かった。ミュージアム特に民族学博物館の新たな展開を十分に紹介できたと考える。

成果

2019年 9 月に開催される ICOM 京都大会の ICME（International Committee for Museums and Collections of Ethnography）にて成果を公開した。

国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」

International Forum “Preserving the Regional Cultures – Perspectives of Practitioners”

2018年12月12日～12月19日　国立民族学博物館

代表者：日髙真吾

社会のグローバル化や災害からの復興のなかで生じる地域社会の変貌は、地域で連綿と築かれてきた文化の破壊を生み出し、新旧の住民の間にさまざまな摩擦を引き起こしている。一方、これらの問題の解決策として、地域住民と大学や博物館の研究者が共同して、地域文化を再発見し、保存や活用を実践する活動が試みられるようになってきた。そして、これらの動向は、新たな地域文化を創生し、豊かな地域社会を育てていく可能性をもったものとして、注目されてきている。特に東日本大震災以降、地域文化に焦点を当てた地域復興の実践事例は、豊かな地域創生に大きな広がりを持たせる可能性があるとして、人間文化研究においても大きな研究課題となっている。

そこで、本フォーラムでは、大学・博物館の視点から、災害からの地域文化の学び、知の拠点施設が地域文化に果たす役割、地域文化と市民をつなぐ大学・博物館の役割、大学教育からの地域文化の再発見という 4 つの視点と次世代の研究者である大学生、大学院生の実践活動から、地域文化の再発見に果たす人文学の役割の可能性ついて明らかにすることを目的とする。

実施状況

本研究は、台北芸術大学との協定事業の成果及び、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の研究成果として実施するものである。これまで、日髙教授は、台北芸術大学との協定事業に参加し、現在は実施担当者として、より主体的にシンポジウム等の企画運営を実施している。本事業においては、日髙教授が代表を務め、さらに台北芸術大学の窓口である黄准教授も研究メンバーとなっている基幹研究の課題に即した研究成果の公開を計画している。これらの活動のなかで、今年度のフォーラムでは、地域文化の保存をテーマとし、地域文化の保存について、地域研究を専門とする研究者の役割をはじめ、保存科学者や保存修復家、博物館学芸員や市民が果たす役割について、それぞれの活動を実践している研究者や市民による講演をおこなった。そして、各専門家の視点から地域文化の保存に果たす人文科学の役割を明らかにした。

成果

活動内容について、HP にて掲載。

「客家エスニシティとグローバル現象」

（Hakka People and its Global Experiences）

2018年12月14日～12月16日　国立民族学博物館

代表者：河合洋尚

漢族の一集団である客家は、5000万人を超える人口を世界中に抱えるといわれており、その大半が中国大陸、香港、台湾、東南アジア諸国で暮らしている。そのため、これまでの客家研究は、これらの国／地域の客家をめぐる議論に集中してきた。だが、中南米、環インド洋、オセアニアの華僑華人社会において、客家が、広府人と並ぶ二大勢力となる傾向が強いことは、見逃すことができない事実である。本国際シンポジウムでは、これまで注目されることの少なかったアメリカ大陸、環インド洋、オセアニアの客家に焦点を当て、そのグローバルな展開と経験について報告する。それにより、客家と他集団の間のエスニック境界を改めて問い直すとともに、華僑華人研究の輪郭そのものを再検討する。

実施状況

2018年12月14日から16日にかけて、国立民族学博物館の学術交流協定先である台湾の国立交通大学客家文化学院および客家文化発展センターと、国際シンポジウムをおこなった。12月14日は一般講演会を、15・16日は学術シンポジウムを、いずれも第 4 セミナー室で開催した。学術シンポジウムでは、これまでの客家研究および漢族研究が

あまり着目してこなかった環インド洋、ラテンアメリカ、オセアニアの客家を扱った。これまで客家とその上位民族である漢族の研究対象は、中国、香港、台湾、東南アジア、アメリカ合衆国に集中してきた。それゆえ本国際集会は第一に、これまでにはないグローバルな規模の客家の現状とその越境ネットワークを明らかにすることができた。また、第二に、南半球の華人そのものの研究が少ない現状において、客家という切り口からその歴史や文化を明らかにすることができた。これらのデータは、研究や博物館展示などにおいて今後大いに貢献できることが期待できる。他方で、より現地化された客家を扱うことによって、客家研究の意義そのものを再考する視点も提示された。特に南半球では「誰が客家であるのか」はそれほど大きな問題ではなく、旧移民／新移民、大陸出身／台湾出身などの枠組みの方がより重要であることもある。そうした状況のなかで、客家研究が中国や台湾の価値観に基づき、南半球の「客家性」を過度に強調する認識論が問われることとなった。そのうえで、客家と非客家の間の境界が曖昧であることも確認された。こうした知見は、客家研究だけでなく、華僑華人、さらには他の民族にもある程度該当するものである。したがって、本国際集会は、客家を扱いつつも、客家を超えた研究の方向性を議論できたことにおいても大きな成果があった。

成果

本国際集会の概況については、『民博通信』ですでに公開している。

学術潮流フォーラムⅡ　超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム
「歴史のロジックと想像力――世界のフィールドから」
The Logics and Conception of History: From the Fieldworks of the World
2019年３月１日　国立民族学博物館
代表者：韓　　敏

国立民族学博物館は、開館40周年を迎えた2017年に大きな改組をおこない、超域フィールド科学研究部は本館の基礎研究部門として新設された。そのミッションは、これまでに民博が培ってきた世界各地域にかんする豊富な民族誌的収集・展示・研究の実績を生かし、また世界各地域の研究者と協力しながら、地域、民族とディシプリンを超えたフィールド科学を構築することである。

本日の国際シンポジウムは、上記を踏まえ超域的フィールド研究のあり方を模索するものとして企画し、歴史記録の物質性、歴史構築のロジックと応用に焦点をあてることにより、人類学と歴史学の融合を図りつつ、世界各地で培ってきた民博のフィールドワーク力を生かして、人類社会の普遍性に関する新たな枠組みを提示することを目的としている。

人類学は長い間、無文字社会における口頭伝承や儀礼を、歴史として扱ってきたが、20世紀半ば以降、徐々に有文字社会も研究するようになった。その中で、歴史は一般的に、特定な人間集団にかかわる時系列の出来事の集積体としてとらえられ、しかも公式に文字化された「歴史」に対して、非公式の歴史の多くは無文字の「記憶」という対比の構造も見られがちである。実際、個人、ローカル、ナショナル、トランスナショナルなレベルでさまざまな情報が交差する今日、歴史を記録及び記憶する主体が多様化し、その媒体も進化している。また、時代の変化にともない、各地域、民族などの歴史は、国民国家の一体性、集団のアイデンティティの構築、あるいは、権利の獲得など、さまざまな形で資源化されたり、あるいは忘却されたりもしている。

本シンポジウムは世界各地での現地調査や博物館における資料調査にもとづいて植物、文字・映像・標本・文献資料、語りなどを通して、世界各地における歴史を記録・記憶する媒体やかたちを整理し、歴史構築のロジックについて考える。また、人類の過去・現在・未来のつなぎ役としての歴史が、民族運動や市民運動などの文脈において展開される法則性も、超域の視点から明らかにするものである。

実施状況

本国際シンポジウムの目的は、歴史記録の物質性、歴史構築のロジックと応用に焦点をあてることにより、人類学と歴史学の融合を図りつつ、世界各地で培ってきた民博のフィールドワーク力を生かして、人類社会の普遍性に関する新たな枠組みを提示するところにある。

上記の目的を達成するために、2019年３月１日国立民族学博物館第４セミナー室において、ベオグラード大学University of Belgrade（セルビア共和国）のVucinic- Neskovic Vesna教授、中国中央民族大学民族学与社会学学院の麻国慶教授が、東南ヨーロッパにおける歴史の役割、東アジアにおける人類学と歴史学の交差について基調講演をおこなった。また、超域フィールド科学研究部８名の教員が歴史を記録する媒体、せめぎあう宗教とアイデン

ティティの歴史および社会運動からみる歴史の展開について発表した。館内、館外および海外からの参加者は、合計46名に上っている。

本国際シンポジウムは三つのセッションから構成されている。第１セッションでは、本館所蔵の画像・標本資料などを含めた、人類の歴史を記録する媒体についてマシウス、小長谷、韓が、モンゴルに関する画像記録を用いた地域像・歴史像の再構築、民博における東アジアの族譜の標本・文献資料と、人類歴史の記録としての植物を考察した。

第２セッションでは、歴史の主体性や民族の帰属意識について、太田と新免は、韓国プロテスタント教会における内部共生と物語の断絶と、ルーマニアにおける起源の歴史的語りとギリシア・カトリック信者のダブル・アイデンティティを発表した。そして第３セッションでは、先住民、リプロダクション、食と市民運動について丹羽、松尾、宇田川がフィジーの少数民族の歴史実践、インドにおける婚姻・産児制限・セクシュアリティ、イタリアにおける食と市民運動を取り上げた。

それらに対して、グローバル現象研究部の森明子、神戸大学の佐々木衛（社会学者）、ルーマニア出身のロマン（日本近代思想史）が地域、学科を超えた示唆に富んだコメントをした。

成果

本館の刊行物を通して成果公開を世界に発信する予定である。

●国際研究集会への派遣

第14回国際オーストロネシア言語学会での研究報告

The 24th International Conference on Austronesian Linguistics（ICAL14）

2018年７月13日～７月22日　マダガスカル・アンタナナリボ

菊澤律子

実施状況

りそなアジアオセアニア財団の助成金を得て行っている７名による国際学際共同研究プロジェクト「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」の研究成果の一部を第14回国際オーストロネシア言語学会（ICAL14）で報告した。

国際オーストロネシア言語学会は、オーストロネシア言語学を対象とした最も規模の大きな学会であり、毎回多数の専門化が集まる場となっている。そのような場で研究報告をし、さまざまな理論的・記述的な観点からフィードバックを受けることができ、今後の研究の進展に大きなプラスとなった。フィジー語の方言を地図データと結びつけ地図上に表示する、という古典的な言語地図の作成ではなく、近年のコンピューターソフトの発達によって可能になった、地理情報と言語情報の相関や、地図情報を通して複数の言語文化情報を結びつけるなど、新たな研究手法を開拓資料とするものである。また、言語学と地理学の専門家による共同研究という性質上、言語学者と地理学者とのコミュニケーションの方法なども探りながら進めている。これらの方法論や手法に関する研究内容と実際のデータ構築の方法を報告し、フィードバックを得ることで、多数ある選択肢の中から、今後の方針の策定になる考え方を確立し、また、新たな展開に結び付く視点を得ることができた。

なお、本プロジェクトの基盤は、申請者が2015年度に奨学寄附金で行ったフィジー語諸方言の言語データをデジタル化したものだが、話の流れから、諸専門家にそのデータの存在と利用方法について周知できたこと、また、イギリスの歴史言語学会の報告にとりあげられたこと、開催地であるマダガスカルの研究者が、手法をマラガシ語への適用に関心をもってもらえるなど、専門家集団との情報共有という面でも大きな意義があった。

成果

紙媒体による言語地図の出版（フィジー文化経済社会信託機構からの出版を想定）、およびウェブ上でのインターアクティブな言語地図の公開を想定している。

56º Congreso Internacional de Americanistas（第56回国際アメリカニスト会議 /the 56th International Congress of Americanists（ICA），スペイン（サラマンカ））でシンポジウム Vogt y Rowe Reconsiderados: Arquitectura y Cosmovisión en Mesoamérica y los Andes を組織

2018年７月14日～７月21日　スペイン・サラマンカ

關　雄二

実施状況

世界最大のラテンアメリカ研究の国際会議である国際アメリカニスト会議は、３年に一度、旧大陸と新大陸の会場を交互に開催されてきた。關は、これまで過去２回にわたり、同会議でイェール大学研究者とシンポジウムを共同で組織してきており、今回は、現代の先住民の世界観を考古学データの解釈に用いてきた中米と南米の先達の業績を再考することを目的とするシンポジウムを組織した。

シンポジウムでは、中米のマヤ文明における球技に関連した図像表現、天体観測と建築との関係性などのテーマに続き、アンデス文明初期における神殿と図像との関係をテーマに、計10の発表が行われた。この中で、關は、最終形の神殿に表れされた図像だけをもって、世界観の表現とすることへの危険性を提示し、神殿の更新や拡張のプロセスの中で、図像や関連する世界観が反復性を持ちながらも変化していく点を具体的なデータから論じた。多くの発表者は、現在の先住民が持つ世界観の枠組みが、部分的に古代世界においても認められることに同意していたが、考古学データを詳細に吟味しなければ、単純な還元論に陥ってしまう点を強調する傾向にあった。

日本、米国、ペルー、グアテマラ、スロベニア、フランスの発表者以外にも、チリ、ドイツ、スペインなどから20名ほどの参加者があり、各発表に対して活発な質疑応答が繰り広げられ、有意義な機会を持つことができた。

成果

關教授の発表については、国際会議ウェブサイトにおいて、発表原稿全文がプロシーディングとして公開される予定である。

国際伝統音楽学会「音楽とマイノリティ」および「音楽とジェンダー」研究グループ合同国際シンポジウムへの出席と研究発表
2018年７月21日～８月２日　オーストリア・ウィーン
寺田吉孝

実施状況

オーストリア・ウィーン市にあるウィーン国立音楽大学で開催された国際伝統音楽学会ICTMに所属する「音楽とマイノリティ」研究グループと「音楽とジェンダー」研究グループの合同研究大会（大会実行委員長Ursula Hemetek）に参加し研究発表をおこなった。同学会は世界最大規模の伝統音楽芸能学会であり、傘下にある24の研究グループが各々隔年に国際大会を開催している。今大会は２つの研究グループが合同で開催するもので、計51件の研究発表がおこなわれた。申請者は７月25日に、“Reclaiming self and history: Music making in Zainichi Korean community in Japan”の演題で発表をおこない、日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国のはざまに生きる在日コリアンの生活経験が、かれらの音楽活動とどのように関連しているかについて考察した。

発表後のディスカッションはきわめて活発に行われ、参加者の高い関心がうかがわれた。またセッション間に十分な休憩時間が取られていたことも参加者間の実質的な交流につながった。シンポジウムでは、研究発表の他に、各研究グループの年次総会、トルコ音楽関連図書の出版記念式典、ハンガリーのロマ音楽グループによる公演、ダンスパーティ、アンデス音楽のワークショップなどが合わせて開かれ、質量ともに充実したシンポジウムであった。

成果

本研究発表は、2018年度に編集中である映像番組 Over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music Today（英語版）と関連しており、この発表における議論の一部を番組の編集に反映する。

International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works
（IIC、国際文化財保存学会）2018年大会、Politecnico di Torino
2018年９月８日～９月16日　イタリア・トリノ
末森　薫

実施状況

2018年９月10日から14日にかけてイタリア・トリノ市のPolitecnico di Torinoで開催されたInternational Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC、国際文化財保存学会）2018年大会に参加した。IICは二年に一回開催される文化財の保存に関する国際的な学会であり、本大会は「予防保存（Preventive Conservation: The State of the Art）」をテーマに開催された。みんぱくでは、多様な材質から構成される30万点以上の収蔵品を適切

に保存するために、国内外においても早い時期より「予防」を基本とする資料保存・管理を進めてきた。本大会では、園田・日高・末森の連名で “Continuous efforts over ten years for storage re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan” という題目で、空調等の制御による環境管理対策、10年間にわたり進めてきた収蔵品の再配架と収納・保管法改善など、予防保存を基本として進めてきた研究成果を発表した。発表後には、学会の参加者との質疑応答や意見交換をおこない、みんぱくの概要やみんぱくが進めてきた実践的な予防保存の方法について普及することに繋がった。

本大会では、世界各地の博物館等における予防保存の新しい考え方や方法、取り組みについて、幅広い発表がおこなわれた。そして、世界各地で活躍する経験豊かな研究者・保存修復家との交流を通して、予防保存の潮流や課題について情報収集をおこなうことができた。また、大会期間中には、エクスカーションとして、トリノ市近郊にある保存修復施設 CONTRO CONSERVAZIONE RESTAURO、映像関連の資料の収集・展示・収蔵をおこなう MUSEO NAZIONALE DEL CINEMA を訪問し、現場における博物館資料の保存・修復の現状や取り組みを実見した。大会の参加を通して得た情報や人脈を、今後のみんぱくにおける博物館資料の保存・管理にさまざまな形で活用したいと考えている。

成果

研究発表の内容を文章化したものが、“Studies in Conservation, Supplement 1 2018-Preventive Conservation: The State of the Art（IIC 2018 Truin Congress Preprints）”（2018年 9 月発刊）に掲載された（pp. 234-241、査読付き）。下記 URL より、オンラインでの部分閲覧およびダウンロード可能である。
（https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00393630.2018.1471886）。

Textile Society of America’s 16th Biennial Symposium（第16回アメリカ国際テキスタイル学会シンポジウム）に参加
シンポジウム：The Social Fabric: Deep Local to Pan Global
発表：Unweaving textiles, disentangling ropes; Exploration of “lineware” as an analytical tool
2018年 9 月17日～ 9 月26日　カナダ・バンクーバー
上羽陽子

実施状況

カナダ、バンクーバーで開催された Textile Society of America’s 16th Biennial Symposium「The Social Fabric: Deep Local to Pan Global」にて、「Unweaving Textiles, Disentangling Ropes: Exploration of “Lineware” as an Analytical Category」と題した研究発表をおこなった。本発表は、文部科学省学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究（領域代表者：西秋良宏）」の計画研究班 B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（班研究代表者：野林厚志）の研究成果公開として共同研究者の中谷文美、金谷美和との共同発表として実施した。本発表では、これまでのテキスタイル研究史において染織品・編組品・糸製品に関する研究蓄積や関心の高さに比べて看過されてきたといえる紐（code/cordage）製品を事例とした。報告者は、これまでパレオアジア文化史学を通じて取り組んできた食糧獲得や衣・住生活、儀礼にもちいられる線状物による道具製作と利用を事例に挙げ、学術的通文化比較を可能とする “lineware” という新たな概念を提案した。本発表後、パネル発表者で総合討論をし、“Lineware” のカテゴリーに関する有用性について議論をおこない、テキスタイル研究者や民族植物学研究者と今後の共同研究の可能性を探ることができた。さらに、シンポジウムでは、北米先住民による手工芸関係のワークショップが開催され、報告者はそのうちサケ皮加工とイラクサの紐づくりに関するワークショップに参加し、製作技術と生態資源利用に関する在来知の知見を深めた。加えて、オープニングレセプションの会場ともなった UBC Museum of Anthropology をはじめ、Museum of Vancouver や Bill Reid Gallery において、先住民手工芸品について調査をおこない、その素材の一つである Ceder の原生林が残る Stanley Park において植生を実見した。本国際研究集会への参加によって、シンポジウム参加者と情報交換をおこなうとともに、パレオアジア文化史学の次回大会での発表内容に関する研究打ち合わせも実施し、今後の研究計画を進める上での議論が深まった。

成果

第16回アメリカ国際テキスタイル学会シンポジウムの要旨集として学会ホームページには掲載される予定である。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」の関連イベント（公演）

今回のギャラリー公演は、企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」の関連イベントとして企画され、南アジアを代表する楽器３点（南インドの撥弦楽器ヴィーナー、北インドの撥弦楽器シタール、ネパールの擦弦楽器サーランギー）の生演奏を聞く機会を提供することを目的とした。民博の本館展示場で音楽の生演奏を行うのは初めての試みであり、またマイクを使わず楽器の生の音を聞いてもらうことを主眼としたため、企画段階では会場の設営や音響面での懸念があったが、実施上の大きな問題はなく、参加者からの反応も極めて良好であった。特に、演奏者と直接交流する機会をもてた点が高く評価された。参加者数は３日間（６ステージ）で計633人にのぼり、当初の予想を大きく上回った。今回のギャラリー公演の実施により、南アジアの代表的な楽器を聴く機会が設けられ、企画展の内容をより深く理解する契機となっただけでなく、展示場での公演が来館者のニーズに応える可能性を十分にもつことが確認できた。

「ビーズ」巡回展・共催展用の図録作成、および共催展のための輸送経費

2017年に民博開館40周年記念の特別展として開催した「ビーズ――つなぐ、かざる、みせる」の図録を2000部印刷し、本館内での継続販売、及び国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ――自然をつなぐ、世界をつなぐ」の開幕に備えた。

また、国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ――自然をつなぐ、世界をつなぐ」の開催のため、民博所蔵の標本資料を科博へ搬入した。

研究公演「東北の復興を願って――夢、希望、想いをこめて」

本公演は、2011年の東日本大震災以来、国立民族学博物館（以下、民博）で継続してきた支援研究「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」から引き継いだ「東日本大震災等、大規模災害の記憶継承及び被災地における人間文化研究」および、特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の関連企画として、2018年10月28日に実施した。当館では、東日本大震災以降、三陸沿岸の郷土芸能、あるいは三陸沿岸部をテーマとしたドキュメンタリー映画の上映をおこなってきた。今年度は、少しずつであるが復興の途についた東北被災地の迅速な復興を願い、思いを寄せることをテーマに、三陸沿岸にゆかりのあるアーティストを招聘し、公演を実施した。参加者は188名であった。

本公演では、大船渡市出身のシンガーソングライターで、大船渡ふるさと大使をつとめる濱守栄子氏の歌と盛岡市出身のヴァイオリニストである絵美夏氏によるTSUNAMIヴァイオリンの演奏を披露した。TSUNAMIヴァイオリンは、震災後の陸前高田市にて家屋の資材だった木材を利用して制作したものである。そこで、本公演では、演奏のほか、TSUNAMIヴァイオリンの制作者である中澤宗幸氏を招へいし、濱守氏、絵美夏氏と中澤氏、提案者の日高を加えたパネルディスカッションも実施した。パネルディスカッションでは、東日本大震災で登壇者が経験した文化活動による被災地支援の有用性や必要性が確認され、災害からの復興では、単なるインフラの復旧等だけではなく、文化を通して地域再生を考える場の重要性が明らかとなった。このことは、これまで民博が実施してきた活動の意義が示されるとともに、自然災害における民博ならでは支援活動のモデルとして、今後も民博内での体制を整備していきたいと考える。

東日本大震災等、大規模災害の記憶継承及び被災地における人間文化研究

本研究は、東日本大震災以降、館内に設置された大規模災害復興支援委員会を主体とするものであり、関連する研究課題としては、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」のなかで、特に津波災害の記憶の継承のあり方について研究を進めるものである。なお本年度の研究内容は、４月19日に開催された同委員会において承認された。

本年度は2017年度に公開した「津波の記憶をつなぐ文化遺産――寺社・石碑データベース」の更なる充実化と、より汎用性の高い運用のあり方の検討という課題に取り組んできた。具体的には、判読困難となっている津波碑の碑文の3Dスキャナーを用いた翻刻技術の開発をおこない、古文書の研究をおこなっている歴史研究家と意見交換をおこなった。また、より汎用性の高い運用を目指し、災害以外の出来事の記憶継承を研究テーマとする研究者との研究会を開催し、各研究プロジェクトとの連携強化と地域住民を対象としたワークショップの開催を企画する準備を整えた。

加えて、継続してきた「被災地における無形の文化遺産の保護活動」の調査研究をおこない、地域に根ざした民

俗芸能と地域の復興の関係性について研究を進展させるとともに、これまで東日本大震災関連企画として実施してきた民博での公演を企画し、研究公演「東北の復興を願って――夢、希望、想いをこめて」を実施した。
以上の成果をもとに、来年度は「津波の記憶をつなぐ文化遺産――寺社・石碑データベース」の部分改修と宮城県、高知県の博物館ネットワークと共同した「津波の記憶をつなぐ文化遺産――寺社・石碑碑データベース」関連ワークショップを企画する。

民博研究懇談会

第285回　2018年 5 月16日
荒川史康 「米国メンブリス遺跡出土土器を対象としたディセンダントコミュニティとの意匠解釈調査」

第286回　2018年 6 月13日
ロッセッラ・ラガッツィ 「ノルウェー・ラップランド（Sápmi）におけるアートと映画――文化遺産へのはたらきかけと新たな形成」

第287回　2018年 7 月11日
古川不可知 「「シェルパ」と道の人類学――ネパール東部、エベレスト南麓地域における山岳観光と移動する身体をめぐって」

第288回　2018年 9 月26日
鈴木英明 「沿岸部スワヒリ史の新たな可能性へ向けて――グローバルヒストリーの視点から」

第289回　2018年10月10日
大澤由実 「感覚的認識と文化の関係性――第五の味覚「うま味」の事例から」

第290回　2018年11月14日
デービッド・ソムファイ・カラ 「Vilmos Dioszegiの足跡を追って――ソ連崩壊後の南シベリア（北モンゴル）におけるシャーマニック・フォークロアの収集」

第291回　2018年12月12日
八木百合子 「アンデスにおける宗教的なモノの所有と継承――聖像をめぐる事例から」

第292回　2019年 1 月23日
神野知恵 「家廻り芸能はなぜなくならないのか――伊勢大神楽の神楽師が持つ多重的価値観からの考察」

第293回　2019年 2 月13日
末森　薫 「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図――彩色がつくる宗教空間」

2-2　外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2018年度科学研究費補助金　採択課題一覧

区分	研究種目	研究課題名	研究代表者	研究年度
新規	基盤研究（A）一般	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	山中由里子	2018～2022
	基盤研究（A）一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林　勲男	2018～2021
	基盤研究（B）一般	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	日髙真吾	2018～2020

新規	基盤研究（B）一般	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018～2020
	基盤研究（C）一般	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	廣瀬浩二郎	2018～2020
	基盤研究（C）一般	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	中道静香	2018～2022
	基盤研究（C）一般	セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張	盛　恵子	2018～2020
	基盤研究（C）一般	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	川瀬　慈	2018～2021
	基盤研究（C）一般	ワインツーリズム推進策の国際比較的見地からの政策人類学的な分析	児玉　徹	2018～2020
	基盤研究（C）一般	島嶼社会における芸能伝承の課題 ――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	福岡正太	2018～2020
	基盤研究（C）一般	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	平井京之介	2018～2021
	基盤研究（C）一般	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	鈴木七美	2018～2021
	若手研究	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	黒田賢治	2018～2020
	若手研究	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	彭　宇潔	2018～2020
	若手研究	身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する ――ケニアの自転車競技選手を事例に	萩原卓也	2018～2020
	若手研究	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 ――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	神野知恵	2018～2021
	研究活動スタート支援	ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究	古川不可知	2018～2019
	研究活動スタート支援	食の認識体系とその変容 ――タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	大澤由実	2018～2020
	研究成果公開促進費	嘉戎語文法研究	長野泰彦	2018
	研究成果公開促進費	人とウミガメの民族誌 ――ニカラグア先住民の商業的ウミガメ漁	高木　仁	2018
	研究成果公開促進費	熱帯高地の世界	山本紀夫	2018
	研究成果公開促進費	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2018～2022
	特別研究員奨励費	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割 ――南インドの事例から	松岡佐知	2018～2020
継続	新学術領域研究（研究領域提案型）	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木　紀	2014～2018
	新学術領域研究（研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016～2020
	新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016～2018
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）	伊藤敦規	2016～2018
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	移民の身体ポリティクス ――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	竹村嘉晃	2018～2020
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化B）	時空間を融合する ――GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	菊澤律子	2018～2023
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化A）	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化 ――インドにおける血と遺伝子を中心に	松尾瑞穂	2018

継続	基盤研究（A） 一般	ネットワーク型博物館学の創成――	須藤健一	2015 ～2019
	基盤研究（A） 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019
	基盤研究（A） 一般	アンデスにおける植民地的近代 ――副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤　晃	2015 ～2019
	基盤研究（A） 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ――伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018
	基盤研究（A） 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2016 ～2019
	基盤研究（A） 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關　雄二	2016 ～2019
	基盤研究（A） 一般	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017 ～2021
	基盤研究（B） 海外	2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究	南 真木人	2016 ～2018
	基盤研究（B） 特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016 ～2020
	基盤研究（B） 一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017 ～2021
	基盤研究（B） 海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017 ～2020
	基盤研究（C） 一般	本州とその周辺の島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	基盤研究（C） 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論 ――新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016 ～2019
	基盤研究（C） 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016 ～2020
	基盤研究（C） 一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016 ～2019
	基盤研究（C） 一般	1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究	西　佳代	2016 ～2019
	基盤研究（C） 一般	デジタル時代に求められる映像人類学 ――新たな映像民族誌の創造に向けて	村尾静二	2016 ～2019
	基盤研究（C） 一般	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本　敦	2017 ～2020
	基盤研究（C） 一般	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	永田貴聖	2017 ～2020
	基盤研究（C） 一般	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	新本万里子	2017 ～2020
	基盤研究（C） 特設	中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究	伊藤　悟	2017 ～2019
	若手研究（A）	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡　乾	2015 ～2018
	若手研究（A）	中国甘粛仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究	末森　薫	2016 ～2018
	若手研究（A）	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017 ～2020
	若手研究（B）	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016 ～2019
	若手研究（B）	社会をつくる芸術 ――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登久希子	2016 ～2020
	若手研究（B）	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017 ～2020

継続	若手研究（B）	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 ――聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017 ～2020
	若手研究（B）	三線が引き出す社会関係、価値、感情 ――大衆楽器が人びとに与える効果の研究	栗山新也	2017 ～2020
	若手研究（B）	20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究	鈴木英明	2016 ～2019
	若手研究(B)における独立基盤形成支援(試行)	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017 ～2020
	挑戦的萌芽研究	日本手話と台湾手話の歴史変化の解明 ――歴史社会言語学の方法論の確立に向けて	相良啓子	2016 ～2018
	挑戦的研究(開拓)	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017 ～2021
	挑戦的研究(萌芽)	被災後社会の総体的研究 ――被災後をより良く生きるための行動指針の開発	竹沢尚一郎	2018 ～2020
	挑戦的研究(萌芽)	新手話学の構成素の実証的検証研究	神田和幸	2018 ～2020
	研究活動スタート支援	アフリカにおける価値の計量と個別的アカウンタビリティにかんする人類学的研究	早川真悠	2017 ～2018
	研究成果公開促進費	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容 ――貧困層の親族・移動・暴力に着目して	安念真衣子	2016 ～2018
	特別研究員奨励費	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	上畑　史	2017 ～2019
	特別研究員奨励費	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究 ――ソロモン諸島の事例から	藤井真一	2017 ～2019
	特別研究員奨励費	ユーラシアステップにおける持続的草原利用の体系化と実践	鈴木康平	2016 ～2018
	特別研究員奨励費	ケニア共和国の海村における漁場の成り立ちと利用に関する研究	田村卓也	2017 ～2018

受託事業

学術研究動向調査「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向――社会人類学の新潮流」

委 託 者：日本学術振興会

担当教員：森　明子

実施期間：2018年４月１日～2019年３月31日

目的と概要

文化人類学・社会人類学の他者像は、20世紀後半以降、大きく変化してきた。より広い世界に他者を見出すようになった人類学は、その研究領域もあらゆる方向に拡大させているように見える。広範な研究領域に展開しつつ、その研究を人類学研究にしているものとは何か。換言すれば、人類学研究は広範な領域において、何に問題を見出し、どのように問題を設定しているのか。このような問題関心から、本動向調査研究では、社会人類学における近年の問題設定の傾向を把握することを目的とした。国内外の研究者の意見聴取によって状況を把握するとともに、主導的な文化人類学・社会人類学専門誌として、連合王国のJournal of the Royal Anthropological Institute（JRAI）誌、ヨーロッパ大陸のAnthropos誌、アメリカ合衆国のAmerican Ethnologist（AE）誌をとりあげ、近年の掲載論文の問題関心、問題設定について、データベース分析を通して傾向を明らかにした。

まず、近年の新しい研究傾向としては、国家の再編成をとらえる研究（移民、難民、国境、国境）、ローカリティの編成をとらえる研究（観光、文化遺産）、人と人以外の関係をとらえる研究、科学との境界領域の開拓、身体をいかにとらえるかという研究（新生殖技術、生命、身体、ケア、パフォーマンス）、食をとらえなおす研究、といったテーマの上昇がみられることは、多くの意見が一致するところである。これらが、JRAI誌、Anthropos誌、AE誌の３誌にどのようにあらわれるかを、数年ごとのコホートとして集計し調査した。最近10年間の３誌の比較については、以下の結果が得られた。近年の社会人類学できわだった潮流のひとつとされている存在論、ANT、物質文化

に関わる論文は、JRAI誌とAE誌に多く、Anthropos誌には少ない。政治学、政治思想に関わるテーマも、同じくJRAI誌とAE誌に多い傾向がある。ただし、ネオリベラリズムや商品化、メディアなど、マクロな政治や国家に関わるものになると、AE誌に多くJRAI誌には少ない。一方、審美やアートなど文化研究に深く関わるワードは、Anthropos誌とAE誌に共通する。Anthropos誌には、他の2誌に比べて、民俗、神話、シャーマニズムへの関心が際立って強い。3誌に共通して安定的にあらわれるワードとして、body, Christian, ethnography, gender, global, history, human, identity, Islam, kinship, religion, ritual, womenなどがあげられ、これらは現在の人類学研究の基底をなしていると考えられる。

「日本財団助成手話言語学研究部門」の設置及び手話言語学事業の推進

委 託 者：公益財団法人　日本財団
担当教員：菊澤律子
実施期間：2018年4月1日～2019年3月31日
目的と概要

1．「日本財団助成手話言語学研究部門」三年目として、常勤研究員二名、併任研究員一名、 プロジェクト研究員一名、客員研究員一名を配置する。三年先を見据えた学術研究の推進を基盤とし、当該分野のアウトリーチおよび通訳養成研究等を効果的に推進する。
2．手話言語学のアウトリーチにおいては、以下の事業展開により、研究者の輩出および社会における手話言語の認知をはかる。
　(1) 共同研究会形式による研究の推進、
　(2a) 年一回の学会形式の国際研究集会開催による言語学の最新動向の報告および議論の場の提供、
　(2b) 大学院生および一般研究者を対象とした国際学会参加支援、
　(3) 研究基盤整備、
　(4) 諸大学への手話言語学の授業および講演の講師派遣、
　(5) 音声言語研究者への手話言語研究のためのスタートアップ研究支援。
3．学術手話通訳研修事業においては、以下のような事業を展開することで、関西地区を中心とした学術通訳者養成および手話通訳ニーズのある大学への派遣につなげる。
　(1) 学術手話通訳研修事業（スクリーニングにより対象者4～6名を選考）、
　(2) 大学でのニーズの発掘と派遣事業、
　(3) 言語学的知識に基づく通訳者向け言語学講座の開講、
　(4) 将来的に高等教育機関における養成につなげる方法の模索。
4．2022年国際手話言語学会日本開催にむけてのインフラおよびロジスティックスの整備の検討。
5．手話に関する展示手法の検討
6．その他、言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

実施状況

「手話言語学研究部門」を設置して手話言語の研究を推進しつつ、(1) 手話言語学のアウトリーチ事業、(2) 学術分野における手話通訳者養成・派遣事業を進めた。日本では、日本手話が日本語と異なる文法体系をもつ独立した言語であること、また手話がろう者の母語であり、日本語が第二言語であることに対する理解は十分であるとはいえない。一方で、手話を科学的に記述・分析する手話言語学への関心は年々高まっているが、講座を開講している大学はほとんどない。本事業ではこのような社会状況を受け、世界で使われるさまざまな手話を言語学の研究対象として明確に謳い、その研究を推進すること、また、その成果を社会に還元してゆくことで、手話という言語の存在と、その性質や話者の現状に関する正確な社会認知に結びつけることを目的としている。2018年度は、五年計画の三年度目として、以下の事業を継続発展させた。a. 2022年国際手話学会（TISLR）主催を前提とした国際学会の開催、b. 研究基盤整備、c. 手話言語学講師の派遣、d. 学術手話通訳研修事業、e. 手話通訳者を対象とした各種講座の開講、f. 学術関連事業をはじめとする学術文脈における手話通訳提供に関するサポートや他機関との手話言語関連事業の協働の促進。これらの事業により、学術関係者による手話言語への理解を深め、また、ろう研究者の輩出の促進に貢献している。

それぞれ具体的な事業内容は下記のとおり。

内容

1．研究部門継続

（1）時期：2018年度

（2）場所：国立民族学博物館

（3）対象：教員、事務補佐員

菊澤律子（兼任）：事業代表者・全体統括

飯泉菜穂子（特任教授）：学術手話通訳者研修事業

相良啓子（特任助教）：手話言語学研究

石原　和（プロジェクト研究員）：事業関連アドミニストレータ業務、全体統括補佐

池田ますみ（事務補佐員（研究支援））：事務補佐および日本手話指導

磯部大吾（事務補佐員（研究支援））：事務補佐および日本手話指導、研究報告執筆

佐野文哉（事務補佐員（研究支援））：事務補佐およびフィジー手話研究

畠中雅子（事務補佐員）：事務補佐、企画補助

以上のメンバーにより研究部門を継続し、国内における手話言語学のアウトリーチ、海外からの手話関係研究者のアテンドや補助、および、学術手話通訳者養成関連事業を行った。

（4）内容：部門体制の継続

※部門サイト：http://www.sillr.jp/

2．国際学会の開催

（1）時期：2018年９月28日（通訳と発表者打ち合わせ）2018年９月29日、2018年11月４日（国際会議）

※当初、９月29日-30日の２日間の日程で国際会議を開催予定であったが、台風24号の影響で、一部プログラムを11月４日に延期した。

（2）場所：国立民族学博物館

（3）対象者：研究者、一般

（4）内容：手話言語学に関する学会（音声言語と手話言語に関する民博フェスタ2018）

招待講演２件および一般からの公募・採択による手話言語学研究発表（ステージ発表13件、ポスター発表６件）

（5）参加者数：のべ199名（11月４日開催時の人数含む、日本、アメリカ、フランス、エチオピア、イギリス、中国［香港］の計６つの国・地域から参加有）

（6）使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話（一部、国際手話付き発表あり）

（7）インターネット配信つき（アクセス数　2018年９月29日：196名、日本、オーストラリア、カナダ、コロンビア、フランス、韓国、ノルウェー、スペイン、アメリカの９カ国よりアクセス有）

※詳細は http://www.sillr.jp/ssll2018/index.html

3．研究基盤情報データベース作成

（1）時期：2018年度

（2）場所：国立民族学博物館

（3）対象：非該当

（4）内容：研究協力者リスト

担当者（原大介、佐野文哉）により、ニーズ調査票作成、調査完了。

結果に基づき、ろう者登録用フォームを作成し、対象者にML等を通じて回覧した。

4．手話言語学講師の派遣

（1）日程：2018年後期（2018年10月～2019年２月、開講２年度目）

（2）派遣先：大阪大学

（3）対象：高等教育機関等の学生、研究者

（4）内容：手話言語学講義（全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」、講師のべ15名によるリレー講義（コーディネーター　菊澤律子）

（5）講師：菊澤律子　飯泉菜穂子　相良啓子（国立民族学博物館）　原大介（国立民族学博物館／豊田工業大学）　Theresia Hofer（国立民族学博物館／ブリストル大学）　市田泰弘　野口岳史　木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）　今里典子（神戸市立工業高等専門学校）　小谷眞男（お茶の水女子大学）　野山広（国立国語研究所）　高嶋由布子（東京学芸大学国際教育センター）　長嶋祐二（工学院大学）

(6) 聴講者数：78人
(7) 受け入れ研究者：金水敏（大阪大学）
(8) 実施言語：日本語、日本手話。日本手話による講義については原則として通訳を派遣。
※詳細は http://www.sillr.jp/sillr01/sillr011/20181004handai.html

関連事業：大学や研究機関等ではないが依頼による講師派遣
(1) 日程：2018年８月23日
(2) 派遣先：奈良市西部公民館
(3) 対象：一般
(4) 内容：手話言語の言語としての位置づけに関する講演
（タイトル「知っているようで知らない『ことば』の話～脳の中の言語の世界へ～」）
(5) 講師：菊澤律子
(6) 聴講者数：49名
(7) 主催者：奈良アクティブシニアの会
(8) 実施言語：日本語

(1) 日程：2019年１月24日
(2) 派遣先：グランフロント・ナレッジサロン・プレゼンテーションスペース
(3) 対象：一般（ナレッジサロン会員）
(4) 内容：手話言語の言語としての位置づけに関する講演
（タイトル「言語を徹底解剖する――ことばの成り立ちとその応用」）
(5) 講師：菊澤律子
(6) 聴講者数：39名
(7) 主催者：ナレッジサロン木曜日サロン
(8) 実施言語：日本語

(1) 日程：2019年２月１日、８日
(2) 派遣先：高齢者大学校
(3) 対象：「世界の文化に親しむ科」受講生
(4) 内容：手話言語の言語としての位置づけとろう文化に関する講義
（タイトル「手話言語とろう文化について考える」）
(5) 講師：菊澤律子
(6) 聴講者数：各約40名
(7) 主催者：高齢者大学校
(8) 実施言語：日本語

5．学術手話通訳研修事業
(1) 時期：2018年５月～2019年３月
(2) 場所：国立民族学博物館
(3) 対象者：関西在住を中心とする手話通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）
(4) 内容：学術通訳者養成のための通訳理論・技術研修
学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、概ね月１回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや通訳技術評価等を行った。カリキュラム作成および運営業務は飯泉菜穂子が担当。
(5) 運営メンバー：飯泉菜穂子、相良啓子、菊澤律子（以上、国立民族学博物館）　原大介（国立民族学博物館客員教員／豊田工業大学教授）　武居渡（国立民族学博物館特別客員教員／金沢大学教授）
外部講師：吉川あゆみ（明治大学）、甲斐更紗（群馬大学）、平英司（関西学院大学）
(6) 研修員：通訳者４名
藤本富美枝（継続：２年目）、井上友裕、奥田史恵、眞鍋寿理子（新規）
(7) 使用言語：日本語、日本手話、英語
※詳細は http://www.sillr.jp/sillr02/sillr013.html（更新準備中）

6．手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」開講

(1) 期間：2018年７月～2018年９月

(2) 場所：国立民族学博物館

(3) 対象者：手話通訳者および通訳者を目指す方

(4) 内容：全12講座

(5) コーディネーター：飯泉菜穂子

講師：飯泉菜穂子（国立民族学博物館）　原大介（豊田工業大学／国立民族学博物館）　武居渡（金沢大学／国立民族学博物館）

(6) 受講料：１講座あたり2,500円（税込）

(7) 参加者数：のべ290名

(8) 使用言語：日本語（日本語-日本手話通訳：NPO法人手話教師センターの協力によりろう通訳チーム（ろう通訳およびフィーダー）を付与）

※詳細はhttp://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20180701manabou.html

7．「みんぱくで手話通訳士を目指そう！」「みんぱくで通訳技術を磨こう！」他、開講

①「みんぱくで手話通訳士を目指そう！」開講

(1) 時期：2018年８月

(2) 場所：国立民族学博物館

(3) 対象：手話通訳士試験受験を予定している聴者手話通訳者

(4) 内容：全３日間

(5) コーディネーター：飯泉菜穂子

検証講師：市田泰弘　小林信恵　澤田利江　野口岳史（以上、国立障害者リハビリテーションセンター学院）　前川和美（関西学院大学）　武居渡（金沢大学／国立民族学博物館）　飯泉菜穂子

(6) 受講料：30,000円（税込）

(7) 参加者数：14名（名古屋市や徳島市など関西圏以外からの参加も有、うち１名、2018年手話通訳士試験合格）

※詳細はhttp://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20180811mezasou.html

②「みんぱくで手話技術を磨こう！」開講

(1) 時期：2018年10～12月

(2) 場所：アットビジネスセンターPREMIUM大阪駅前

(3) 対象：事業内容５の研修員を中心とした関西地域の現役手話通訳者（聴者）

(4) 内容：全８回

現に手話通訳として現場で活動中の聴者を対象とする、手話通訳技術のブラッシュアップ講座。

(5) コーディネーター：飯泉菜穂子

講師：飯泉菜穂子、前川和美（関西学院大学）

(6) 受講料：１講座あたり2,500円（要事前申込／受講料事前振込制）

※オブザーバーは１講座あたり1,500円

(7) 参加者：奥田史恵　藤本富美枝　眞鍋寿理子（事業内容３の研修員）　三橋弥生　吉田明代（外部受講者）　塩浜ひろみ　鈴木美紀　橋本由美子　森悦子（オブザーバー）

※詳細はhttp://www.sillr.jp/sillr02/sillr014/20181008migakou.html

③みんぱくウィークエンド・サロン「バリアフリー映画を楽しむ」

(1) 日程：2018年10月７日

(2) 場所：国立民族学博物館

(3) 対象：一般

(4) 内容：障がいがあろうとなかろうと誰もが「一緒に」映画館で映画を楽しむ。そんな時代がきていることを紹介し、「聴覚障害者向けバリアフリー日本語字幕」「視覚障害者向けバリアフリー日本語音声ガイド」も体験してもらう一般向けの講座。

(5) 講師・通訳OJTコーディネート：飯泉菜穂子

(6) 手話通訳者（研修員）２名：　藤本富美枝、井上友裕

(7) 通訳検証：事業内容５　学術手話通訳研修事業において研修員の手話通訳パフォーマンスの検証を実施した。

(8) 参加者：約50名

※詳細は　http://www.minpaku.ac.jp/museum/event/salon/20181007

④　みんぱく映画会「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」の開催

(1) 時期：2018年11月24日

(2) 場所：ホテル阪急エキスポパーク

(3) 対象：一般

(4) 内容：日本全国に約14,000人いる「盲ろう者（視覚と聴覚両方に障害を持つ人達）」とその家族・支援者の日常生活を丁寧に描いた、世界にも類例のないドキュメンタリー映画「もうろうをいきる」を、視覚障害者対応音声ガイドおよび「聴覚障害者対応日本語字幕（単なるセリフ字幕ではなく、生活音・環境音・BGMなどをも文字化して付与した字幕）」つきの『完全バリアフリー版』で上映・鑑賞する機会を提供することによって、観客に映像文化共有のあり方について新たな可能性を提示する。

(5) 企画・オーガナイザー（当日司会・解説）・通訳OJTコーディネート：飯泉菜穂子

(6) 参加者：137名

(7) 手話通訳者（研修員）２名：藤本富美枝、井上友裕

(8) 通訳検証：事業内容５　学術手話通訳研修事業において研修員の手話通訳パフォーマンスの検証を実施した。

※詳細はhttp://www.minpaku.ac.jp/museum/event/fs/eiga20181124

8.「たのしい言語学を学ぶ会」開講

これについては、実施しなかった。代わりに事業内容６、７の拡充を図った。

9. 学術イベントへの学術手話通訳研修事業研修員通訳（OJT）派遣

①事業内容７③　みんぱくウィークエンド・サロン「バリアフリー映画を楽しむ」

(1) 日程：2018年10月７日

(2) 場所：国立民族学博物館

(3) 対象：事業内容５の研修生（藤本富美枝、井上友裕）

(4) 内容：メンター制OJT

(5) 講師・通訳OJTコーディネート：　飯泉菜穂子

②事業内容７④　みんぱく映画会「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」の開催

(1) 時期：2018年11月24日

(2) 場所：ホテル阪急エキスポパーク

(3) 対象：事業内容５の研修生（藤本富美枝、井上友裕）

(4) 内容：メンター制OJT

(5) 講師・通訳OJTコーディネート：　飯泉菜穂子

③事業内容５　国際研究集会

(1) 時期：2018年９月28-29日

(2) 場所：国立民族学博物館

(3) 対象：事業内容５の研修生（藤本富美枝、井上友裕）

(4) 内容：メンター制OJT

(5) 通訳評価・検証：甲斐更紗、吉川あゆみ、学術手話通訳研修事業運営メンバー

(6) 通訳OJTコーディネート：飯泉菜穂子

10. 手話言語の展示および展示における手話通訳のあり方に関する検討

- Theresia Hofer氏を客員として９月から11月まで外国人客員として受け入れ、具体的な展示内容について検討した。
- 2018年11月に菊澤がスペイン・バルセロナのIndissoluble（CosmoCaixaから委託された展示企画業者）の言語と脳に関する展示企画チームを訪問し、民博に巡回する場合の具体的な展示内容や条件、また、展示における手話通訳のつけ方、および展示における聴覚者対応に関する聞き取りを行った。
- 特別展におけるろう通訳利用に関する検討を開始した。
- 以上をもとに、2019年度からの民博での特別展プロジェクト案を作成し申請した。

その他（完了）

①　博物館および公共機関における手話言語およびろう者対応の導入

昨年度開始した展示場における手話通訳対応サポートに加え、博物館ボランティア団体である民博ミュージ

アムパートナーズ（MMP）に手話教室を導入した。館内における非常時の対応体制のハードおよびソフト両面の整備をすすめ、館内の専門委員を通して、事務関係者から地域の関連団体などまで、ろう雇用者のニーズについて注意喚起をすることができた。

② 学術手話通訳研修事業のための読み取り教材作成

（1）時期：2018年度

（2）担当者：飯泉菜穂子

（3）部門設立以来３年間に撮影してきた教材映像を選択・整理・編集し、学術手話通訳研修および関連講座で使用するための「読み取り教材 DVD 1, 2, 3」を作成した。

- 読み取り教材１：関西圏手話講師編（別添封筒内）
- 読み取り教材２：手話通訳養成校講師・教員編（別添封筒内）
- 読み取り教材３：明晴学園教員編（別添封筒内）

その他（継続中）

- 手話言語と音声言語に関する民博フェスタ／SSLL2019は準備中。
- 学会研究報告書
  -SSLL2016論文集は準備中（６月末刊行予定）。
  -SSLL2017論文集は準備中。
  -SSLL2018論文集は準備中。
  -石原和・菊澤律子（編）『民博セミナー暮らしの中の言語学　交通事故裁判と言語学』の出版に向けて出版社と調整中。
- 手話言語の展示のノウハウに関する調査と手話言語展示に向けての準備（菊澤）
- 手話通訳者のための手話言語学テキスト作成（『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』書き起こしデータをもとに準備中、2020年度末の出版を目標としている）（飯泉）
- 関西地区における学術手話通訳ニーズ発掘のための高等教育機関との連携、ネットワーク構築（飯泉）
- 関西地区における手話通訳者・士全体のスキル底上げのための地域（大阪府および大阪府からの手話通訳関連事業を受託している大阪府聴力障害者協会）との連携（飯泉）

台湾文化光点事業計画――国際シンポジウム「台湾及び周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」――

委 託 者：The Ministry of culture, ROC（Taiwan）Cultural Division

担当教員：野林厚志

実施期間：2018年７月19日～７月20日

目的と概要

本シンポジウムでは、台湾を中心としその周辺地域も視野にいれながら、島嶼環境における文化と生態との関係に焦点をあて、自然環境の中から人間が資源を選択する過程（生態的過程）と、それを人間社会の中に組み込む過程（文化的過程）を議論した。同時にこうした土地の知識の継承を学術的側面から支援する博物館の役割、存在意義を検討し、ソースコミュニティとの協同の空間としての博物館を再定義した。

シンポジウムの発表は中国語、日本語、英語を用い、適宜通訳を介した議論を行った。生態学的視点からみた原住民族文化、原住民族文化からみた生態環境に焦点をあてた発表と、それを進める一つの学術的、社会的拠点としての博物館の役割についての発表とで構成された。

また、各報告者に加え、台湾から多くの参加者を得た。本シンポジウムに合わせて実施した、台湾の原住民族の文化の継承と新たな創造的展開を目的とした博物館資料の熟覧調査のために本館を訪問していた原住民族の工芸家を中心とした人たちであり、これらの人たちも一緒に議論に参加していただいた。

本シンポジウムの開催の１ヶ月前にあたる2018年６月18日に大阪地方を中心に中規模の地震が発生し、本館にも建物や内部の施設に相応の被害を出すことになった。博物館は一般訪問者に対しては閉鎖せざるをえなくなり、本シンポジウムは一般参加者の参加を断念せざるを得なかったが、関係各部署の尽力により、シンポジウムや原住民族の人たちによる資料調査は実施することができ、台湾側からの参加者も含めて41人の参加者で実施した。

なお、本シンポジウムの成果については、英語の論文集を本館の英文研究誌（Senri Ethnological Studies）として編集を進めている。

民間などの研究助成金などによる研究活動

• 寄附金

菊澤律子准教授研究助成金（りそなアジア・オセアニア財団）――――――――――――― 菊澤律子
井家晴子外来研究員研究助成金（住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞）
――― 井家晴子
中田梓音外来研究員研究助成金（たばこ総合研究センター助成）――――――――――――― 中田梓音
飯塚真弓外来研究員研究助成金（住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞）
――― 飯塚真弓
松岡佐知外来研究員研究助成金（公益財団法人松下幸之助記念財団研究助成）――――― 松岡佐知
高木仁外来研究員研究助成金（公益社団法人日本地理学会 斎藤功研究助成）――――― 高木　仁
井上航外来研究員研究助成金（公益財団法人三島海雲記念財団研究助成 個人研究）―― 三島海雲記念財団
ピーター・J・マシウス教授研究助成金（公益財団法人三島海雲記念財団研究助成 共同研究）
――― 三島海雲記念財団
順益台湾原住民博物館研究賛助金――――――――――――――――――――――――――― 順益台湾原住民博物館
国立民族学博物館 活動助成金――――――――――――――――――――――――――――― 日本液炭株式会社
大澤由実機関研究員研究助成金（公益財団法人ロッテ財団研究助成）――――――――― 公益財団法人ロッテ財団

2-3　文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2018年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1．運営体制

文化資源関連事業の体制整備

文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」、「文化資源計画事業」、「情報管理施設の基盤業務」の３種類のカテゴリーによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2．文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、４つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記４分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1）調査・収集分野

インド民俗絵画カリガートの購入

提案者：寺田吉孝

追手門大学名誉教授のサンディップ・タゴール氏と著述家のタゴール暎子氏夫妻が1960年代に収集した東インド・ベンガル地方のカリガート民俗絵画30点のコレクションを購入した。

2）資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

3）展示分野

特別展「太陽の塔からみんぱくへ――70年万博収集資料」

提案者：野林厚志

本館が所蔵する、1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」（「万博資料収集団」）が収集した世界の諸地域の標本資料、資料収集に関連した書簡や写真等を展示する特別展示会を開催した。あわせて、展示品の解説、資料収集やコレクション形成の過程ならびにそれらの現代的意義等についての論考を収録した図録を刊行した。

特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

提案者：日髙真吾

本展では、工芸指導所ゆかりの試作品を紹介するとともに、宮城県で活躍する若手職人やデザイン・工芸に関心を持つ学生たちとのワークショップを通して、彼らの視点から工芸指導所の試作品を捉え直した試みを展示した。

特別展「子ども・誕生――モノからみる子どもの近代」（仮称）

提案者：笹原亮二

本プロジェクトは、民博所蔵の「時代玩具コレクション」（多田コレクション）の調査研究や、民博共同研究「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究――国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心にして」（研究代表者　是澤博昭）の成果をもとに、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を開催した。

特別展「超自然史博物館――驚異と怪異の世界へ」（仮称）準備

提案者：山中由里子

本展示では、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類）をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係を解明するとともに、人間と環境の相関関係を究明した。

特別展「おしゃべりなヒト」（仮称）準備

提案者：菊澤律子

人間言語の生成過程と手話言語に関する展示会を、言語学、認知言語学、言語工学の共同の研究成果公開として2021年９月から11月（予定）まで、民博・特別展示場において開催するための準備プロジェクト。

企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」（仮称）

提案者：鈴木七美

アーミッシュ・キルトとそのストーリーを、米国において宗教的信条に基づき「簡素な生活」を続ける人びとの暮らしと交流について考える素材として提示する企画展を実施した。展示した標本資料は、文化資源プロジェクト（2011年度、2013年度、2016年度）によって収集したものである。

企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」（仮称）

提案者：寺田吉孝

企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」を、2019年２月21日～５月７日の会期で開催し、期間中の関連イベントとして研究公演（１回）とギャラリー公演（３回）を実施した。

沙漠のムスリム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展

提案者：西尾哲夫

文化人類学者片倉もとこによるサウジアラビア現地調査資料（写真ほか）ならびに収集による本館所蔵資料（民具・衣装ほか）と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのムスリム女性たちの生活の持続と変容について検証する。

巡回展「ビーズ――つなぐ、かざる、みせる」

提案者：池谷和信

約300点のビーズ工芸を展観し、古代から現代までの世界中のビーズ文化を紹介した。なぜ人はビーズを作り、使い続けたのか、シンプルだけれども奥深いビーズの世界を、もう一歩踏み込んで案内した。

共催展「国立民族学博物館コレクション　貝の道」

提案者：池谷和信

古来、世界のさまざまな民族の手によって、貝細工という独自の文化が生み出されてきた。貝細工に秘められた豊かな造形美を発見しながら、それぞれの貝細工が生まれた社会背景や生活文化を理解し、貝と私たちとがどのような関係を育んできたのかを問い直した。

共催展「ビーズ――国立民族学博物館コレクションから」

提案者：池谷和信

約10万年前に作り出された人類最古の装飾品ビーズ。民博と科博がコラボレーションし世界中のビーズの素材や製作技術、ビーズと人類とのかかわり方を紹介した。

特別展「先住民の宝」

提案者：信田敏宏

日本のアイヌをはじめとした世界各地の先住民が大切にしている「宝」をキーワードに、写真や動画、絵画や漫画などのメディアも活用しながら、それぞれの地域の先住民の暮らしや現状を紹介する。「宝」には、狩猟具、装身具、儀礼具、その他の生活用具などの具体物だけではなく、伝統的な生活、森や海などの自然環境、言語、信仰、芸能なども含まれる。先住民運動や文化復興運動などが隆盛し、民族アイデンティティが活性化している状況にも配慮しながら、展示資料の選定や空間デザイン、全体のストーリーを構成していく。

特別展「ユニバーサル・ミュージアム――触文化がいざなう「未開の知」への旅」（仮称）

提案者：廣瀬浩二郎

①展示の具体化に向けて、協力アーティストを選定し、個別に打ち合わせを行なった。②資料の借用について、各地の美術館と交渉した。③共同研究「『障害』概念の再検討」（通称「ユニバーサル・ミュージアム研究会」）のメンバーを中心に、展示の基本コンセプトについて議論した。

特別企画展示「世界の衣装」

提案者：上羽陽子

株式会社阪急阪神百貨店が共同主催者となって、阪急うめだ本店「阪急うめだギャラリー」において実施する展示の基本計画及びスケジュール案を作成した。また、展示資料の選定作業を進めている。

4）博物館社会連携分野

知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究

提案者：信田敏宏

知的障害者を対象とした試行的ワークショップ「みんぱくSama-Sama塾」を開催した。知的障害者にとっても分かりやすく、楽しめる博物館の活用モデルを目指し、知的障害者が博物館を活用する際に必要とされる支援や改善点などを検討しながら実施した。

3．文化資源計画事業

文化資源計画事業は、研究成果を普及することを目的とした事業で、３つの分野（資料関連、展示、博物館社会連携）に分けられる。

1）資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、標本資料の撮影、計測、及びそれらに付随する業務をおこなうものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本計画事業では、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館の環境調査、収蔵庫再編成とともに、資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

標本資料の寄贈受入

- 現在モンゴル高原の遊牧民たちに一般に利用されている生活用品として、手洗い器を寄贈するものである。
- 奈良県在住であった故大西尚明氏（1923-2004）が長年にわたり収集した楽器および音楽関連資料のうち76点の寄贈受入を行った。
- 現代中東研究拠点主催の講演会をパリの日本文化会館で開き、そこで提案者とマスウーディー氏の対談を行った。翌日、氏のアトリエを訪れ、みんぱく用にと2009年～2010年制作の３点の作品を受け取った。選定はマスウーディー氏自身が行ったものである。
- 本事業は、国立民族学博物館友の会の会員である佐藤直子氏が、1980年代後半1990年代にかけて各地で収集した生活資料を受け入れるものである。各地域の担当研究員が資料を確認し、寄贈受入を申請したものである。
- 神戸女子大学の梶原苗美教授が1980年頃に海外学術調査チームの一員として、パプアニューギニアに赴いた際に入手した太鼓、仮面、弓矢等と、2000年～2005年にインドネシアで入手した樹皮布、石斧の寄贈受入を行うものである。
- 『能楽ジャーナル』の編集長を務め、能楽評論の確立に尽くした故堀上謙（ほりがみけん）氏（1931～2016）が、長年にわたり収集した世界各地の仮面96点の寄贈を受け入れた。
- 本事業は、2017年度で本館を退館された印東道子名誉教授が、研究活動の中で収集した民族誌資料の寄贈受入を提案するものである。
- 2017年度の特別展示『ビーズ――つなぐ、かざる、みせる』をきっかけにして、さまざまな方から自宅に保管されていた主に昭和時代の日本のビーズバッグを館に寄贈申請いただいた。
- ブータンの染織研究家である山本けいこ氏が、1983年から現地で収集してきた民族衣装を主とするコレクション約260点を寄贈受入し、南アジア資料の一層の充実を図った。
- 現在残っている昭和時代以前の堺緞通の大型織機は、堺市博物館蔵の緞通織機のみであり、当該資料はそれと同程度の約3m幅の枠型開孔板綜絖を備えている。本事業は、このような染織研究の資料として貴重な堺緞通織機（枠機）の寄贈を受け入れるものである。
- 本事業は、大阪市立大学のカンボジア学術調査隊に参加した野村穣氏が現地で収集した弓矢、ハンモック、漁撈用の籠を寄贈受け入れし、東南アジア資料の充実を図るものである。本館初代館長梅棹忠夫氏が率いた学術調査隊に関連した資料であり、学術的な意義が高い資料である。
- モンゴル国の西部に集中して居住するカザフ人女性たちは、中国から1930年代に移住して以来、隣接するカザフスタンや中国のカザフ人と比較して、手芸に極めて熱心であり、グローバルビジネスに発展している。これらの貴重な証として本館で寄贈受入をするものである。
- 2017年度の特別展示『ビーズ――つなぐ、かざる、みせる』をきっかけにして、さまざまな方から自宅に保管されていた主に昭和時代の日本のビーズバッグを館に寄贈申請いただいた。さらにそれを補完するものとして４点の寄贈を受け入れた。
- 十九世紀までにタイに戦争捕虜として現ベトナム地域から移住させられた黒タイ族が、ペップリーで伝えてきた伝統衣装を受け入れた。
- 社会主義時代のコミュニケーションの一つとして、女性の日や革命記念日など公式的な場所に正式な招待状を送りあう習慣があった。この慣習をとどめる貴重な証として、本館で寄贈受入をするものである。
- 本事業は、朝日新聞で５年間続いた連載「花おりおり」で写真を担当した植物写真家の矢野勇氏が東南アジアで収集した笠のコレクションを寄贈受け入れし、東南アジア資料の充実を図るものである。一部、日本の

笠も含まれているが、比較研究等のために必要なので受け入れる。

- 犀鳥は天上界を媒介する動物と考えられ、ボルネオ島諸民族のあいだでは主要な美術モチーフのひとつである。本事業では、寄贈者がマレーシアで入手したサイチョウに関わる彫像３点の寄贈を受け入れる。
- 北海道白老町在住の小美浪フミ氏より、同氏が制作したミニチュアのアイヌの伝統衣装を着た人形の寄贈申し出があり、本館には同様の収蔵品はなく、今後の展示等に活用できる資料であるため、受け入れた。
- 本事業は、寄贈者である宮崎妙子氏の夫である宮崎浩氏が1968年に地質調査の為にパプアニューギニアに派遣された際に現地で収集した仮面他資料を受け入れるものである。
- 2018年10月から12月にかけて科研費で渡米した際に、民博の展示場更新（アメリカ展示場）に関連する資料収集も行った。地元のアーティストは作品を販売しただけでなく、金銭を求めず無償で譲渡してくれることもあった。それら無償提供作品や作品制作のために使用する道具など合計19点を民博に寄贈するために本プロジェクトを起案した。
- 十九世紀までにタイに戦争捕虜として現ベトナム地域から移住させられた黒タイ族が、ペッブリーで伝えてきたブラウスなどの伝統衣装を受け入れた。
- 中国地域の文化展示新構築の際に、個人蔵および個人の所有資料の複製を作成し展示されていた「華僑・華人」セクションのキューバのチャイナタウンのポスターならびにレストラン・メニューについて、現物資料の寄贈受入を行うものである。

２）展示分野

「知をデザインする――特別展にみる世界の25年　民博の25年」の改修

企画展が開催されていない時に実施している「知をデザインする――特別展にみる世界25年　民博の25年」の内容を最新の情報に更新し、来館者に民博の展示活動への理解を深めることをできる空間を整えた。

コレクション展示　新着「メキシコのアルテ・ポプラル新着資料展」

2018年６月18日に発生した大阪府北部地震による展示場の閉鎖のため開催を中止した。

年末年始展示イベント「干支展」

2019年の干支である「いのしし」を題材に民博が所蔵する資料をパネルとともに展示し、世界各地の人々の暮らしの中でいのししが果たしてきた役割や姿を示した。また民博の教職員を対象に、展示資料の撮影と説明文の作成など、展示に関わる様々な活動に従事する研修を行った。

３）博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップ実施とワークシート新規作成に向けた調査結果を、社会連携事業検討ワーキングにおいて検証し、ワークシート改訂のための方向性を定めた。これによって、本館での研究活動と展示の内容を利用者に楽しみながら理解してもらうこと、また利用者からの様々な意見や要望が本館の活動に反映されることが期待できる。

音楽の祭日2018 in みんぱく

社会連携活動の一環として、出演者187名（25組）が本館講堂およびエントランスホールにて演奏する音楽イベントを開催した。

みんぱっく「エチオピア、アムハラの装い」（仮題）の制作

館の教育機関向け貸出キット「みんぱっく」に関して、アフリカ地域を知りたいという教育現場からの要望が多いため、エチオピアの民族の多様性に焦点をあてたパックを新たに制作する。2019年度運用開始に向け準備を進めていたが、2018年６月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震により、制作作業に必要な燻蒸庫（カポックス）が一時停止したため運用開始時期を半年延長した。

カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

2018年度は、公益社団法人北海道アイヌ協会と調整をおこない、八雲アイヌ協会・苫小牧アイヌ協会（15名）が主体となり、2018年11月７日に準備と打ち合わせ、11月８日に公開でカムイノミと演舞、および館内向けに伝統料理の共食をおこなった。

みんぱっくの改訂版制作

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出を行う学習キット「みんぱっく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂を行う必要がある。2018年度は「アイヌ文化にであう（2009年度製作）」「アイヌ文化にであう２――樹皮からつくる着物（2011年度製作）」の内容物確認と改訂後の内容物の検討を行った。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を再編し、2017年度から実施している事業である。本事業は、「情報プロジェクト」「情報計画事業」からなり、情報運営会議が募集し、選定する。2018年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

１．情報プロジェクト

情報プロジェクトは、本館又は大学等関連諸機関が所有する学術資源の情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、実施する研究プロジェクトである。

情報プロジェクトは、３つの分野（取材・収集、展示情報化、情報化）に関わる研究開発、または研究成果の展開を目的とし、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

その選定においては、提案者が作成した提案書に対して館外の研究者や専門家から意見を聴取している。その意見書と提案者が行うプレゼンテーションに基づいて、情報運営会議の委員が審査し、委員の審査結果と評価指標を基に情報運営会議での審議を経て採択している。

１）取材・収集分野

●みんぱく映像民族誌「ソニンケ民族文化祭」の制作

提案者：三島禎子

2017年度に実施した映像取材（海外）で撮影したセネガルのソニンケ民族文化祭についてのみんぱく映像民族誌を制作した。

●みんぱく映像民族誌「怪異の音の民族誌――異界との接点で聞こえてくるもの」（仮題）制作

提案者：山中由里子

異界との接点の場における音の役割を、実際の現象と音の結びつきを具体的に示すことができる映像という媒体によって明らかにし、絵画やモノなどの静的な視覚資料で表すことは難しい怪異の本質的な一面を捉えた。

●エチオピア、ティグライ州の女性の門付け儀礼“アシェンダ”の映像民族誌制作

提案者：川瀬　慈

2018年８月に、エチオピア、ティグライ州の州都メケレ市、及び首都アジスアベバに滞在し、門付け儀礼アシェンダの取材と映像記録を行った。メケレ大学、アジスアベバ大学、ユネスコアジスアベバ等においては、関係者への聞き取り調査と文献調査を行った。

●ネパールの楽師カースト・ガンダルバに関する映像資料制作

提案者：南 真木人

みんぱく民族誌映画『カトマンドゥのサーランギ奏者たち』と『*Revisiting Batulecaur after 34 Years: A Village of Musicians in Nepal*』を制作し、後者をネパールで上映した。

●映像番組「アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽」の英語字幕版、韓国語字幕版の制作

提案者：寺田吉孝

2017年度に制作した日本語映像番組「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽」の英語字幕版および韓国語字幕版を制作した。

2）情報化分野

●三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

提案者：佐藤浩司

公開中の「3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」」の内、未着手となっていた東南アジアの高床建築の歴史を理解するうえできわめて重要な建物3件を追加制作した。

2．情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業であり、所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施するか否かを審議する。

1）特別展・企画展パノラマ映像制作

●特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

●特別展「子ども／おもちゃの博覧会」

●企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて――そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

●企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」

2）ビデオテーク番組制作

●「ただいまオンエアー――ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ」

制作監修：三島禎子

●「私たちが主役――文化週間を支えるソニンケの女たち」

制作監修：三島禎子

●「グリオは語る――今と昔をつなぐなりわい」

制作監修：三島禎子

2-4　人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6ヵ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、（Ⅰ）機関拠点型、（Ⅱ）広領域連携型、（Ⅲ）ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日高真吾

概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

調査研究活動

2018年度は、地域文化の保存を軸とした研究活動、国際フォーラムの開催、地域文化宝箱の試作と本格運用に向けた調査・研究会を３つの柱として展開した。

地域文化の保存を軸とした研究活動では、2018年度に国立民族学博物館に設置された共同利用科学分析室を軸に、新たに滋賀県の米原市内の曳山、大津市内の曳山の修復事業への協力として、漆塗り部分の修復指導、金属部分の蛍光Ｘ線分析、表面情報の実測データ取得のための3Dスキャンを実施し、米原市大津氏に加え、各曳山の保存会にデータを提供した。また、2016年度から実施している被災文書の光学調査を継続し、その成果を十日町市古文書整理ボランティアに還元した。加えて、2017年度に公開した日本の文化展示情報関連データベース、寺社・石碑データベースの運用面でのチェックをおこない、より効果的なデータベースへと鍛え上げるため、寺社・石碑データベースでは、判読困難な碑文について3Dスキャナー技術を応用し、判読可能な技術開発を㈱データデザインと共同で調査研究をおこなった。さらに、多言語による展示解説などの情報発信ツールとして、光IDに着目した技術開発を㈱パナソニックと共同研究をおこなった。以上のような研究を展開することで、地域との連携、大学間連携、産業界連携の実現を達成できた。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

研究会の報告書として、2017年度に別府大学で実施した国際フォーラム「地域文化の再発見――大学・博物館の視点から」をとりまとめたブックレットを刊行した。また、当研究会の活動の一部として進めてきた大阪府指定文化財「時代玩具コレクション」を対象とした研究の成果として、是澤博昭・日髙真吾編『子どもたちの文化史――玩具にみる日本の近代』（臨川書店）を３月に刊行した。

成果論集として、京都造形芸術大学との協定のもと、研究メンバーによるリレー講義を実施し、その内容を論集として取りまとめ、地域文化研究の教科書として刊行する準備を整えた。

シンポジウムでは、海外でのシンポジウムとして、日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念国際シンポジウム「文化遺産とは何か：日本とエクアドルの被災経験を通して考える」（Repensar el Patrimonio Cultural: Intercambio de experiencias post-terremoto entre Japón y Ecuador）を８月22日から23日にエクアドル文化遺産省で開催した。また、台北芸術大学との共同主催による国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」を台湾の高雄市立歴史博物館で12月15日から16日かけて開催した。

国内では高知県立高知城歴史博物館において、公開シンポジウム「南海トラフ地震に向けた文化財の防災・減災――四国４県の取り組みから考える」を高知県立高知城歴史博物館で６月15日に開催した。

データベースについては、昨年度に公開した寺社・石碑DBの市民協力者および研究者向けの説明会を兼ねた研究会を宮城県の東北歴史博物館、岩手県いわき市で実施するとともに、国土地理院との意見交換会を持つなど、さらなる普及に努めた。

(2) 教育プログラム等

教育プログラムの研究開発として、新潟県村上市の奥三面パック、大阪府枚方市の鋳物パックのプロトタイプを試作し、運用試験を実施する準備を整えた。また、京都府京都市左京区久多の山村用具パック、宮城県気仙沼の魚食パックについて、2019年度の試作に向けた本格的な設計の準備を整えた。

(3) 展示等

金沢美術工芸大学および静岡県立文化大学と協定を結び2018年９月23日から11月17日にかけて国立民族学博物館において東北歴史博物館と共同主催の特別展を実施し、巡回展として、2018年12月６日から19日にかけて静岡文化芸術大学、2019年１月11日より２月28日にかけて金沢美術工芸大学で開催し、大学間連携にもとづいた展示会を実現した。

また、大妻女子大学との協定のもと、2019年３月20日から、日本における子ども文化の概念に注目した特別展「子ども誕生」（仮称）を開催する。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

イタリアのトリノで開催された国際文化財保存学会（IIC）で環境に配慮した日本における文化財保存の展開につ

いて発表をおこなった。また、３年目を迎える本研究会の成果の一つとして、京都造形芸術大学との協定のもと、研究メンバーによるリレー講義を実施した。

若手研究者の人材育成の取組み

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の成果とひとつとしておこなった、第34回人文機構シンポジウム国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ――日本と台湾にみる地域文化の活用術」（2018年11月10日）において、当ユニットのメンバーの大学院製２名が発表した。また、国際フォーラム「地域文化を保存する――実践者の視点から」において若手研究者によるコメントや文化財保存修復学会等での若手研究者による発表をおこなった。加えて、国立民族学博物館が主催した特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」において、成形合板の技術を紹介するためのワークショップの内容を検討と運営を京都造形芸術大学、静岡文化芸術大学、金沢美術工芸大学の大学生、大学院生を中心におこなった。これの活動から、次世代をになう研究者の育成に努めた。

その他

来年度から地域文化研究の比較研究として、ドイツ、ポルトガルの実態調査をおこなう準備を整えた。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座である。

調査研究活動

2018年度は、年度当初の計画にしたがい、ユニットプロジェクトを構成する身体、生態、文化・制度の３つのグループで、それぞれの強みを活かした野外調査を実施した。身体グループでは、梅崎（東京大学）を中心に、得られたインドネシア、フィリピンにおける食生活と健康状態の関係についての基礎データを分析するとともに、東南アジア大陸部での比較検証のためのデータ収集調査を、ラオスを中心に実施した。生態グループでは、中井（佐賀大学）を中心に、タイ、日本における生態資源の利用の時間的変動について、タイでは人口移動の範囲と食生活の変化の関係を生態人類学的なアプローチにもとづき、日本では食料資源の集約的な利用によるドメスティケーションの過程を生物考古学的なアプローチにもとづき検証した。文化・制度グループでは食生活の認識や価値観の変容に関わるフィールド調査を、日本、中国、台湾、タイ、太平洋島嶼地域においてアジア系移民を対象に実施した。

また、３つのグループを連結する方法論としてTEMS（The Eating Motivation Survey）の検討を深め、Webによる多言語アンケート調査のためのプラットフォームを構築した。

2）研究会合の実施

ユニット内研究会は全体研究会を１回（７月・民博）で開催し、前年度の調査の報告、当該年度の調査内容についての意見交換を行った。また、地球研で開催されたプロジェクトの全体集会（１月・地球研）に際して、ユニット内での研究懇談を行い、各グループの調査の進捗状況を確認した。身体グループ、生態グループの会合も

定期的に開催しており、生態グループでは特に、外部の研究者を招聘したワークショップ形式の研究を開催した（3月・横浜）。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

成果論集については、The 6th Asian Food Study Conferenceの分科会の成果刊行の編集、出版を進めた。具体的には「食の交流史」の分科会の論文集である、Spreading Food Cultures in Asia: From the Past to Present（Senri Ethnological Studies 100）を刊行した。

国際シンポジウムについては、年度当初に提出した計画にしたがい、民博との共催で、国際シンポジウム 'Making Food in Human and Natural History' を実施し（2019年3月18日、19日）、研究分担者（5名）の発表を行った。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

拠点機関が作成しているWebサイトに公刊された論文、書籍の情報を掲載し、情報発信をすすめた。また、ユニット機関である民博が発行する英文ニューズレターで、Food and Cultureの特集を組み、ユニットの研究者4名の寄稿を行った。

若手研究者の人材育成の取組み

修士課程、博士課程に在籍する学生のフィールド調査の支援と指導を行い、修士論文の提出（1件）、査読付き論文（研究ノート）の刊行を行った。また、若手研究者の研究支援を行い1名が研究職への就職を果たした。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

調査研究活動

① 館内研究会：北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（以下、「月例会」）を10回開催した。(1) 2018年4月26日（第19回、・髙野哲司（総合研究大学院大学）「日本の都市における庭の植物景観の移り変わり――東京都台東区谷中の事例」）、(2) 5月31日（第20回、太田心平（拠点構成員）「Association for Asian Studiesの概要とその2018年大会の参加報告」）、(3) 6月21日（第21回、館内・超域フィールド研究会と合同、リチャード・ノル（ド・サール大学）「不可視の現実を作るということ――シャーマンやその他の呪術宗教的実践者たちは、いかにして精霊や神、悪魔や祖先霊、そしてイエス・キリストさえをも見たり、聞いたり感じたりする技能を開発してきたか」）、(4) 7月19日（第22回、中田梓音（民博外来研究員）「韓国テレビドラマにおける飲食場面の考察」）、(5) 10月11日（第23回・超域フィールド研究会との共催、ナサン・シュランガー（Nathan Schlanger）（フランス国立古文書学校）「アンドレ・ルロワ＝グーランと20世紀半ばの技術の研究（André Leroi-Gourhan and the study of technology in the mid-twentieth century）」、(6) 10月25日（第24回、・ナターシャ・フィジン（Natasha Fijn）（オーストラリア国立大学）による映画 "Two Seasons: Multispecies Medicine in Mongolia" 上映と討論、(7) 11月16日（第25回、グルナラ・アビケイェヴァ（Gulnara Abikeyeva）（北海道大学、Kazakh Leading

Academy of Architecture and Design）“Reality and Myths Presented in Modern Kazakh Cinema”）、(8) 12月27日（第26回、篠田雅人（名古屋大学）“Developing an Early Warning System of Dzud for Sustainable herding in Mongolia”、冨田敬大（立命館大学）によるコメント、Elliot Fratkin（スミスカレッジ）“Climate Change and Nomadic Peoples”、渡辺和之（阪南大学）によるコメント）、(9) 2019年２月28日（第27回、館内・超域フィールド研究会と合同、麻国慶（中国中央民族大学）「中国における北東アジア研究の現状と課題――人類学のアプローチ」、張麗君（中央民族大学）「中国東北地域の陸路通商口岸の文化的機能の再考」、羅惠翹（中央民族大学）「中国とロシアの辺境地域における辺境地域における混血者後裔の調査」）、(10) ３月22日（第28回・歴博合同研究会）。

これらは本事業開始当初より継続して行っており、北東アジア地域研究に関して個々の構成員が研究内容を共有するのみならず、国内外の他機関の研究者を招聘することで連携を深め、さらに最終年度の成果公開への準備となっている。

② 連携拠点との研究会：３月22日に民博・歴博合同研究会を開催。

③ 調査：「自然環境と文化・文明の構造」をテーマとして、個人またはグループが北東アジア地域において考古学と文化人類学・民族学に関する調査活動や分析などの研究を実施した。最終年度の学術叢書出版に向けた研究が推進されている。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

■報告書・成果論集

• 池谷和信（拠点代表）の編集として、Spreading Food Cultures in Asia: From the Past to Presentが2019年３月に刊行された。北東アジアの食文化の拡散について、韓国、日本、中国に関する事例が収められた。先史時代から現代に至る食文化の実態と展望を国内外に示すことができた。

■シンポジウム

① シンポジウムにおけるセッション組織：北東合同シンポにおいて第１セッション “Long-Term History on Ecological-Cultural Diversity in Northeast Asia” を連携拠点である歴博拠点とともに組織した。池谷和信（拠点代表）のイントロダクションの後、マーク・ハドソン（Mark HUDSON）（マックスプランク人類史科学研究所）が “Ancient Globalisation in Northeast Asia: Integrating Archaeology, Language and Genetics”、金大煥（韓国国立博物館）が “A Study on the Diffusion of Wooden chamber in Northeast Asia”、辛嶋博善（本拠点研究員）が “Movement of Local Products in Modern Northeast Asia” をそれぞれ発表し、大西秀之（同志社女子大学）が討論者となって行った。これらは本事業の折り返しに位置づけられるシンポジウムにおいて長期的な時間軸から北東アジア地域を俯瞰し、人類史の視点から北東アジア地域の特異性を浮かび上がらせるとともに、国内外の他機関の研究者を招聘することで連携を強化するとともに、拠点研究員にも国際的な発信の場を与えた。

② NAAN参加：富山大学拠点を中心に行った国際会議において辛嶋博善（本拠点研究員）が “Continually Changing Pastoral Society in Modern Mongolia” を発表し、国際発信を行った。この発表は現代モンゴルにおける社会構造の変容について近年のテクノロジーなどの影響を明らかにしたものであり、北東アジア研究における最先端の成果といえるものである。また、拠点研究員の参加は、人材育成とともに、各拠点との連携体制の強化につながった。

③ 国際シンポジウム：12月８日に国立民族学博物館において、国際シンポジウム「古代ユーラシアにおける乳製品の加工と利用――考古生化学によるミルク研究の最先端と北東アジア地域の位置づけ」を開催した。本シンポジウムは奈良文化財研究所『日本古代の乳製品加工に関する考古化学的証拠の探求』プロジェクト（日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的研究（萌芽）、代表：庄田慎矢）との共催によって行われた。ドイツ・マックスプランク人類史科学研究所のグループから、リーダーのジェシカ・ヘンディ（Jessica Hendy）による「明らかになった古代アナトリアにおける乳加工の証拠」（“Uncovering Evidence of Dairying in Ancient Anatolia”）、ペニー・ビックル（Penny Bickle）（ヨーク大学）による「ヨーロッパの最初の農民はミルクをのんだか？ 新しい考古科学の方法が乳加工の起源の研究に与えたインパクト」（“Did the first farmers in Europe drink milk? A survey of new scientific methodologies in Archaeology and their impact on the origins of dairying.”）、シェヴァン・ウィルキン（Shevan Wilkin）（マックスプランク人類史科学研究所）による「ショットガンプロテオミクスで探る古代モンゴルの乳製品の加工」（“The History of Dairying in Ancient Mongolia”）の３つの講演を行い、辛嶋博善（本拠点研究員）と庄田慎矢（奈良文化財研究所）がそれぞれ民

族学、考古学の立場からコメントした。辛嶋のコメントは、現代モンゴルの搾乳や乳加工を紹介して相違点を指摘したもので、北東アジアにおける乳利用の歴史的連続性を明確にした。本シンポジウムにより、若手研究者が参加しつつ、最先端の文理共同による国際的研究を日本で一般にも向けて紹介することができた。

④ 国際セミナー：２月25日に国立民族学博物館において、ソウル大学人類学科BK21プラス事業団との共催で、北東アジア地域研究拠点特別セミナー（CNAAS Special Seminar Series）を開催した。PARK, Seung Hyun（ソウル国立大学）は“Anthropological Research on Ageing and Reconstruction of a Public Housing in Tokyo”と題して、日本の公営団地の建て替えとそれと関連する高齢化などの問題を人類学的なアプローチから提示した。HAN, Judy Ju Hui（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）は“Mapping a World of Difference: Korean Missionary Encounters and the Idioms of Distance”と題し、韓国の宣教師団の国外での布教活動について、地理学的な視点から論じた。PETERSEN, Martin（デンマーク国立博物館）は“The Korean Collections: With Particular Focus on Those Related with Shamanism”と題し、デンマークにおける韓国に関する収蔵品について歴史的な経緯などを紹介したほか、近年の博物館の活動として日本のサブカルチャーについても取り上げた。現代の北東アジアの現状、および諸問題を様々な視点から論じた。

(2) 教育プログラム等

① 大学院生の研究会への参加：先述の月例会において、総合研究大学院大学地域文化学専攻・比較文化学専攻（博士後期課程）の大学院生、民博外来研究員も出席し、議論に積極的に参加しており、若手の人材育成につながっている。特に今年度は後述する日韓若手研究者育成ワークショップを開催し、大学院生による英語での発表、及び議論の機会を設けた。

② 若手ワークショップの開催：日韓若手研究者育成ワークショップ（Workshop for Young Researchers in Japan & S. Korea）を２月23日に、Ex-CCEA at Department of Anthropology, Seoul National University との共催で行った。日韓の大学院生、若手研究者による７本の発表と日本の研究者４名によるコメントで構成され、日韓を中心に、葬制や医療、サブカルチャー、移民の食など、多岐にわたるテーマが取り扱われた。発表者にとっては英語による発表と議論の機会となり、若手の育成に貢献した。

(3) 展示等

① ビーズ展関連講座：岡山市立オリエント美術館で2018年９月22日から11月25日に開催された特別展『国立民族学博物館コレクション・ビーズ――つなぐ・かざる・みせる』において、２件のトークイベントを開催した。

(1) 11月４日に岡山市立オリエント美術館にて、「人類とビーズ」（ビーズ展をもっと深く知りたい人のための講座）として『文化のビーズ、文明のビーズ――縄文、エジプト、現代社会』を開催した。岡山市立オリエント美術館、パレオアジア文化史学（科研費B01、代表・野林厚志）、及び現代中東地域研究民博拠点との共催でおこない、58名の出席者を数えた。松本直子（岡山大学）は「文化のビーズの発生と変容――縄文時代から弥生時代にかけての玉類の変化」と題し、緑色の装身具に着目して詳細なデータに基づいて縄文～弥生時代を論じた。山花京子（東海大学）は、「地域をつなぐビーズ：古代エジプトにおけるビーズの役割」と題し、認知革命に言及しつつエジプト王朝におけるビーズを、王と家臣という「人と人」とを結ぶ存在として、また交易品として「地域と地域」を結ぶ存在として論じた。である池谷和信（拠点代表）は「ビーズ展示からみえるホモサピエンス像」と題し、文明と文化のファーストコンタクトとしてのガラスの道を論じた。コメントとして、那須浩郎（岡山理科大学）は植物考古学の視点から、ビーズに選ばれる植物の種子の条件を考慮しつつ、素材の伝播や希少性に言及した。谷一尚（林原美術館）は古代ガラス研究の視点から、装身具の役割を指摘した。

(2) 11月25日に岡山市立オリエント美術館において、「時と場所をつなぐビーズ」を開催した（主催：岡山市立オリエント美術館、千里文化財団、及び北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点）。一般参加者は62名を数えた。池谷和信（拠点代表）が「素材から見たビーズの道」と題して世界各地のビーズについて解説をした後、四角隆二（岡山市立オリエント美術館）が、「古代オリエントのガラスの道」と題し発表し、人口素材としてのガラスを石と比較しながら、着色という視点から人類の色彩への欲求を浮き彫りにした。また、ビーズ製作の会社であるトーホー株式会社の坂憲一氏が現代のビーズの製法を紹介しながら、消費地や用途について解説をした。また、３氏によるギャラリー・トークも行った。これらは研究成果の発表であるとともにその一部を社会還元するものである。

② 2018年６月18日に発生した大阪府北部地震の影響により国立民族学博物館の講堂が使用不能となったため一般公開の大掛かりな映画会は中止したが、11月16日、先述の第25回月例会に先立って、カザフスタンのSerik Aprymov監督の“Bauyr（Little Brother）”を国立民族学博物館内にて上映した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ウェブサイトの運用：昨年度に引き続き、「北東アジア地域研究みんぱく拠点」のオフィシャルウェブサイトを運用し、事業の概要、所属メンバーの紹介の他、ニュース、イベント、活動報告、研究成果、出版物の項目を設け、随時更新を行っている（http://www.minpaku.ac.jp/nihu/cnaas/index.html）。また、一部英語による対訳を付している。これにより研究プロセスを国内外に提示している。

若手研究者の人材育成の取組み

- 本拠点に派遣されている辛嶋博善特任助教に北東合同シンポ及びNAANでの発表、国際シンポでのコメンテーターの機会を与えている。＜共通観点３教育・人材育成＞
- 研究会、国際ワークショップや国際セミナー等を通じて若手研究者に参加、発表の機会を提供している。

その他

- 他の地域研究事業との協業：国立民族学博物館内に拠点を置く現代中東地域研究および南アジア地域研究と合同で研究発表等の機会を設けた。(1) 先述の北東アジア地域研究シンポジウムにおいて、現代中東拠点より黒田賢治がコメンテーターとして参加した。これにより中東研究と北東アジア研究の相違を比較することができた。(2) 北東アジア・現代中東民博拠点の合同研究会として、7月20日に3rd Joint Research Seminar in Northeast Asian Studies and Middle Eastern Studiesとして、クリスチャン・ギュセル（Christian Goeschel）（マンチェスター大学）が “Between Style and Substance: West German President Lübke’s journey to Iran, Indonesia, Japan, and the Philippines in 1963” というタイトルで発表した。(3) 8月1～3日に国立民族学博物館において開催されたNIHUプロジェクト「南アジア地域研究」主催2018年度南アジアセミナー「南アジア地域研究のフロンティア――流動する人、モノ、文化を捉える」において、広島大学現代インド研究センターの陳林氏の発表「2000年代以降インドにおける大都市への人口集積とその特性」に対して本拠点の辛嶋特任助教が北東アジア・モンゴル研究の視点からコメントを行った。(4) 1月31日に現代中東民博拠点及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点、科学研究費補助金・研究活動スタート支援「テュルク系ディアスポラの多地域・多言語的ネットワークと20世紀世界史」（代表・小野亮介）とともに、マッコリー大学のトーマス・ウィルコスゼヴスキー（Tomas Wilkoszewski）氏を招き、“Uyghur Medical Practitioner in Turkey: Pluralistic Healing Modalities and Intersubjectivity” というタイトルで講演を行った。(5) シンポジウム「沙漠への適応と生活世界の形成――文理共創的視点から考える現代中東地域研究」を現代中東地域研究民博拠点・秋田大拠点、南アジア地域研究民博拠点、国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」とともに共催し、本拠点の辛嶋特任助教がモンゴル研究の視点からコメントを述べた。これらは研究の水準の向上に貢献するのは当然のこと、さらに隣接地域を対象とする各事業の拠点の連携によって可能となっている。また、拠点研究員により運営や連携が行われたことから、人材育成にも資するものである。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動――持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究

中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾　稔

概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の６拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、国際研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

調査研究活動

当拠点メンバーの中から計11名の研究者をインド（ムンバイー、ラージャスターン、グジャラート）、タイ、マレーシア、イギリス、フランス等に派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するために現地滞在調査を行った。

2017年度に引き続き、研究ユニット１「南アジア社会におけるレジリエンス」を「南アジアにおける社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット２「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計８回（計56名が参加 ＊年度内開催予定分の参加者を含む）と各班を統合した合同研究会を１回、国際セミナーを３回、さらに拠点メンバーの科研事業との共催で国際ワークショップを１回実施し、当拠点独自の成果論文集の出版（2020年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させた「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム（ACSAS）」の第２回国際シンポジウムを韓国外国語大学と共催で開催し（韓国・ソウル、11月16日・17日）、発表者をプロジェクト内から公募で募り、３名の研究者を派遣して研究発表を行った。また、シンポジウム後に開いたコンソーシアム運営会議において、研究成果の刊行や共同的研究ネットワークのさらなる発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しかった。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本を基軸として、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル／ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第１期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館拠点がハブとしての役割を果たし、参加各国持ち回りでのシンポジウムの開催やその成果論文集の編集、さらにはメーリングリストを通じた情報共有などを行って、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

一方2018年11月には、英国・エジンバラ大学南アジア研究センターとの研究交流事業として拠点メンバーを派遣し、上記南アジア研究センターのセミナーで研究発表を行うとともに、今後の研究交流に関して意見交換を行った。

くわえて、本プロジェクトが主催する第10回 INDAS 全体国際シンポジウムにおいて、国内外研究者の招へい手続きの支援をおこなった。

さらに、国立民族学博物館に外国人客員教授（2018年４～６月）として来日していたインド人研究者を当拠点主催の国際セミナーに招へいし、独立後のインドの州の形成過程と地方ごとのアイデンティティの動態に関して知見を共有した。この研究者はインド近現代史に関する著作を精力的に著す一方、上記コンソーシアムに参加しているシンガポール国立大学南アジア研究センターの代表をつとめるなど、東南アジアにおける南アジア研究を牽引する研究者である。この研究者とは、今後も本プロジェクトの運営に関して協力関係を維持することで合意している。それは研究上の貢献や国際的ネットワークの確立はもとより、本プロジェクトが主催する INDAS 全体国際シンポジウムや上記のコンソーシアムによるシンポジウム等の開催に際して、企画や招へい研究者等について助言を得るなど幅広い文脈で有益であり、今後の国際的な学術交流も期待できる。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2016年12月に京都大学で開催した第８回、および2018年１月にネパール・カトマンズで開催した第９回 INDAS 全体国際シンポジウムの英文での成果論集を Routledge 社から刊行する予定であり、編集作業を進めている。同出版社は海外の大学・研究機関でも高く評価されており、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

また、前述した ACSAS 第１回国際シンポジウムの成果論集について、World Scientific 社（シンガポール）からの刊行を目指して編集作業を進めている。同社はアジア地域を中心に広いシェアをもつことから、研究成果のグローバルな発信が期待される。なお、第２回国際シンポジウムの成果論集の刊行については、韓国外国語大学と協議を進めている。

(2) 教育プログラム等

① 国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、当拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染

みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習も実施し、南アジア社会の暮らしをモノから体験する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。

② 同館が定期的に開催するウィークエンドサロンおよび公開講演会にて当拠点のメンバー複数名が講義を行い、南アジア地域の文化について参加者の理解を図った。

③ 国立民族学博物館の活動を支援する団体である「千里文化財団　国立民族学博物館友の会」が主催する民族学研修の旅に当拠点メンバーが同行講師として参加し、自身の調査の現場で研究の一端を紹介するとともに、さまざまな祭礼・儀礼・宗教施設での解説を通じて参加者の南アジアの文化と社会に対する理解の深化を促した。

④ 川島テキスタイルスクールおよび株式会社絨毯ギャラリーからの依頼を受け、当拠点メンバーが南アジアの刺繍や絨毯に関する講義を行い、南アジアの布に関して聴講者の知見の深化に有用な情報を提供した。

⑤ 全国市町村国際文化研究所にて、当拠点メンバーが全国の地方公務員研修者に対して、インドの暮らしと文化に関する講義を行い、地方行政における南アジアを中心とした国際交流の推進に貢献した。

(3) 展示等

① 国立民族学博物館にて2019年２月より開催されている南アジア弦楽器に関する企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」関連の研究会実施の補助等を通じ、同展の開催を支援した。

② 当拠点「布」班の研究成果の一端を国立民族学博物館の企画展として2021年度に開催する計画を立て、当拠点「布」班を中心に企画を進めている。

③ 同館に寄贈されたブータン民族資料の受け入れと今後の展示やデータベース化の可能性に向けて、同資料の研究を支援した。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

当拠点が運営するホームページをリニューアルし、より分かりやすく、魅力的な掲載方法を検討するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。

若手研究者の人材育成の取組み

当拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、当拠点が主催する班別および合同研究会での発表機会（11名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキングペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。加えて、国際学会（マレーシア・７月16～22日、フランス・７月24～27日）や、前述の国際シンポジウム（ソウル・11月16日・17日）では発表者の公募と研究発表に伴う旅費の支援を行い、国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んだ。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化――多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで（1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

調査研究活動

2018年６月18日に発生した大阪府北部地震によって国立民族学博物館の建物にも大きな被害を受けた。既に実施予定の研究集会については会場を館外にするなどの対応を迫られるとともに、レクチャーシリーズの招聘者の一時的停止など国立民族学博物館で実施する研究集会について慎重な計画の見直しが必要となった。そのため建物復旧後には、当初の研究計画から年度後半に研究集会が集中することになった。当初の計画を一旦停止させたものの、これまでの研究成果について再帰的に取組む時間的な余裕が生まれ、研究成果のとりまとめを行うことで、年次計画として設定した到達目標を十分に達成することができた。

① 個から世界への視点による他者観をめぐる研究班については、昨年度から継続して国立民族学博物館共同研究事業「個−世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」（代表・齋藤剛）と連携して研究会を重ねるとともに、共同研究会での議論を反映した個人の出版物の刊行も進んだ。また国際研究集会でのパネルを組織し、成果発信に向けた取り組みを本格化させた。国際研究集会のパネルには、初年度に現代中東地域研究レクチャーシリーズで招聘した研究者をディスカッサントしてきたように、これまでに構築してきた国際的な研究体制を継続的に維持している。

② 本年度より研究計画の後半期に向け、ムスリム移民の排斥に見られるイスラモフォビアの問題など社会的心性に関わる諸問題について、国立民族学博物館共同研究事業「グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス」（代表：山泰幸）と協力し、中東・イスラームという狭い視点ではなく、より広いグローバルな視点から人間の普遍的な他者感との関連で寛容性／不寛容性の問題として検討する研究班を組織した。また中東地域の博物館及び文化財保存に関わる国内の研究者を中心に、「文化遺産とミュージアム」研究班を発足させ、博物館情報の整理を国立民族学博物館で実施しているフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」（代表：西尾哲夫）と協力しながら進めた。

③ 現代中東地域研究をより広角な視座に基づいた地域研究事業へと推進するために、北東アジア地域研究および南アジア地域研究とも連携した研究会を随時開催した。また他の研究資金で実施するシンポジウムなどにも積極的に協力しながら、現代中東地域研究のプレゼンスを示してきた。

研究成果

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

報告書・成果論集

昨年度に一般の参加者が多数訪れた「アラブの春」後の中東社会に生きる若者たちの理解を目的に上映した『ヤギのアリーとイブラヒム』のアラビア語の原脚本のセリフを、英語、日本語に翻訳するとともに、上映会での討議を整理し、資料集として刊行した。また中東社会における博物館研究の基礎資料として、イランにある約500箇所の博物館の概要を網羅的に把握した資料集を刊行した。

シンポジウム

調査研究活動の部分で述べたシンポジウムおよび研究プロセスの国内外に向けた情報発信で述べるシンポジウムに加え、以下の３つのシンポジウムを開催した。人間の普遍的な他者感について、文学や説話をテキストとして西アジアと東アジアとの間の他者感を検証する国際シンポジウムを、関西学院大学シルクロード研究センターと協力して開催するとともに、個人による世界をめぐる認識と言語の動態について、中東地域の旧フランス植民地地域におけるフランス語による「アラブ文学」 について研究者のみならず、実践者である作家も交えたシンポジウムを開催した。また秋田大学拠点と協力しながら、文理共創を踏まえた地域研究への展開を図るために、現代中東地域研究・北東アジア地域研究・南アジア地域研究と合同でシンポジウムを開催した。さらに秋田大学拠点および国立民族学博物館で実施しているフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトと協力し、国立民族学博物館が昨年度に締結したイラン国立博物館において、「文化遺産とミュージアム」を中心に研究報告を行い、研究成果の現地社会への還元を進めた。

データベース

昨年度から国立民族学博物館の共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシアの沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（代表・縄田浩志）と共同で行ってきた民博や国内大学所蔵の中東民族資料に関する調査を、国立民族学博物館フォーラム型「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」と連携し、データベースの構築を進め、国立民族学博物館の館内公開を2019年３月に行った。2019年４月以降に一般公開を行う予定である。フォーラム型データベースとして発展させることで、収集した民族資料のデータに対して日本の社会に成果還元が図られるだけでなく、英語に加え収集したソースコミュニティの言語も使用するた

め中東社会の人々に成果還元を図ることも可能になるという意義がある。

また中東地域内外の博物館等における文化表象に関する動向調査ならびに関連データベース構築にむけて昨年度から公開してきた博物館検索データベースとして新たにイラン編を公開するとともに、パレスチナ編およびモロッコ編のデータ整理を進めた。また国際的に資料としての利用性を高めるため、英語化も進めイラン編の英語版の公開を行った。

(2) 教育プログラム等

① 京都大学拠点および国立民族学博物館拠点で実施している若手共同研究と協力しながら、現代中東の動態と深く関わるイスラームについて大学生および社会人に向けて、大学の15回の講義に習った書籍を刊行し、中東・イスラームに取り組むための門扉の開放を進めた。

② 昨年度までに準備してきたイスラーム世界の現代的多様性をテーマとした教材とそれを用いた実践的教育プログラムの運用を2018年４月より開始し、2019年１月までの間に小・中・高・大学で25件の使用が確認されている。

③ サウジアラビア出身のルームメイトとの交流を中心に描いた漫画であり、宝島社の『このマンガがすごい！2018』でオンナ編第３位となった『サトコとナダ』のエピソードを交えた新書を本拠点特任助教と拠点構成員が著し、最新の研究成果を踏まえながら若い世代を中心とした中東・イスラーム理解の醸成を促した。

(3) 展示等

次年度に文化人類学者片倉もとこ氏によるサウジアラビアでの臨地調査に基づいた国立民族学博物館企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――「みられる私」より「みる私」』（2019年６月６日～９月10日開催予定）の準備を、秋田大学拠点ならびに国立民族学博物館共同研究事業「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（代表：縄田浩志）、『地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）』プロジェクト「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（代表：縄田浩志）および国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト、『中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース』（代表：西尾哲夫）と協力しながら進めた。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信

① 機構本部と協力し、第35回人文機構シンポジウムとして、音楽を通じた日本と中東との相互理解を目的とした研究講演と演奏家による講演と実演をおこなうレクチャーコンサートを東大寺の協力を得ながら実施し、開催通知の広報を行ってから２週間で応募者多数のために応募を締め切るほどの高い関心がもたれた。

② 拠点のウェブサイトに加え、日本中東学会や学会のメーリングリストやフェイスブックなどのソーシャルネットワークを活用しながら研究会等の広報活動を行った。

若手研究者の人材育成の取組み

① 昨年度から実施している若手研究者の研究力強化と拠点の研究目標を相互補完する目的の共同研究「グローバル化時代における文化の資源化と共同性の再構築をめぐる中東的展開」（代表：谷憲一）を推進し、本年度には研究会での報告をもとに個別に学会での研究報告を行ったほか、研究会での議論を盛り込んだ出版物の刊行を行った。

② 中東地域研究の基礎となる言語教育の拡充のために、研究分担者の鷲見朗子と協力し、アラビア語教授・教育ワークショップを実施した。本年度のワークショップでは、文献学の伝統でもある逐語的理解ではなく、意味の分からない語を意味の分かる他の語によって推測する関係論的理解という、会話などコミュニケーションの場において実践的なアラビア語教育法について、アラビア語教育に携わる教員に向けた教授法を実践するワークショップとアラビア語を学ぶ学生に向けた教育ワークショップを実施した。

その他

昨年度申請を促した若手の研究分担者の競争的外部資金として科学研究費若手研究「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」（代表・黒田賢治）を獲得し、若手研究者の自立を促進させるとともに、若手研究者による国際共同研究を推進するために二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究への応募を促した。

2-5　研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

42巻４号（2018年６月14日発行）

• 論文

エスニシティを可視化する手段としての衣服――台湾原住民族サキザヤ族の民族認定を事例として ―― 野林厚志

• 資料

Un document inédit à propos des ouvrages de François Pétis de La Croix（1653-1713） ―― Tetsuo Nishio et Naoko Okamoto

Work Ethic in a Japanese Museum Environment: A Case Study of the National Museum of Ethnology ―― Alex de Voogt, Shimpei C. Ota, and Jonas W. B. Lang

「人種」と「人種主義」をめぐる博物館展示の動向――フランスの人類博物館とアメリカ人類学会の展示会の事例 ―― 亀井伸孝

43巻１号（2018年７月18日発行）

• 論文

「土地」を所有する現在――パナマ東部先住民エンベラから見る「境界画定」 ―― 近藤　宏

• 資料

みんぱく開館40周年にあたって ―― 吉田憲司

Museums and the Anthropological Imagination: Positioning the National Museum of Ethnology, Osaka on its Fortieth Anniversary ―― Anthony Alan Shelton

43巻２号（2018年10月31日発行）

• 論文

アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド――宗教的普遍主義からシンハラ仏教ナショナリズムへの軌跡 ―― 外川昌彦

無縁・有縁・縁を訳すコンテキスト――パプアニューギニア・トーライ社会を対象に ―― 小坂恵敬

• 資料

日本における応援組織の発展と現状――四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論 ―― 丹羽典生

43巻３号（2019年１月25日発行）

• 特集

Nationalism in Timor-Leste

Introduction: A Nationalism of Absence ―― Satoshi Nakagawa

The Distinctive Character of East Timorese Nationalism ―― Michael Leach

Nationalism at Scale in Timor-Leste: Between Rai na' in and Rai Timor ―― Andrew McWilliam

Establishing the Legitimacy of Portuguese as an Official Language in Timor-Leste ―― Wakana Okuda

The Centre of the Land, the Periphery of the Nation: Wars and Migration in Southern Tetun Society, Timor Island ―― Shintaro Fukutake

Reiterated Encounter: On a Reconciliation Ceremony at the Urban Settlement in Dili, Timor-Leste ―― Toru Ueda

'Mice' of Transborder Trade in Timor Island: Timorese Smugglers and 'Reconciliations' ―― Yoshinari Morita

• 論文

An Animic Regime Subjugated: The Pu Sae Ña Sae Spirit Cult in Chiang Mai ―― Shigeharu Tanabe

• 研究ノート

韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察 ―― 神野知恵

・資料

「魂」（bla）を呼び戻すチベットの儀軌「ラグツェグ」（bla ‘gugs tshe ‘gugs）――ニンマ派伝承の祈祷書の訳注と儀軌の記述 ―――― 村上大輔

43巻 4 号（2019年 3 月13日発行）

・論文

カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機――中国雲南省洱海における鵜飼い漁師たちの繁殖技術の事例から ―――― 卯田宗平

フェアトレードを支援する――文化人類学による研究と批判 ―――― 鈴木　紀

グローバル支援の時代におけるボランティア――青年海外協力隊の「コミュニティ開発」ボランティアをめぐって ―――― 白川千尋

フィジー都市部に居住するバナバ人のエスニシティと自己認識の複相性 ―――― 風間計博

減圧症リスクとダイブ・コンピュータ――観光ダイビングにおける身体感覚／能力の増強とリスク認知 ―――― 市野澤潤平

●Senri Ethnological Studies

No.99（2018年 7 月18日発行）

R. Fleming Puckett and Kazynobu Ikeya（eds.）*Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates*

No.100（2019年 3 月12日発行）

Kazunobu Ikeya（ed.）*The Spread of Food Cultures in Asia*

●Senri Ethnological Reports（国立民族学博物館調査報告）

No.147（2019年 2 月 1 日発行）

野林厚志・松岡　格編『台湾原住民の姓名と身分登録』

No.148（2019年 3 月28日発行）

八杉佳穂著『カクチケル年代記』

●民博通信

No.161（2018年 6 月29日発行）

評論・展望　東日本大震災以降の災害研究――人類学と他分野との協動に向けて　　林　勲男

No.162（2018年 9 月28日発行）

評論・展望　水俣病を伝えるという運動――ブルデュー実践理論によるアプローチ　　平井京之介

No.163（2018年12月28日発行）

評論・展望　イスラームの語源は「平和」か――中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化の研究にむけて　　西尾哲夫

No.164（2019年 3 月29日発行）

評論・展望　人をつなぐ技法としてのパフォーミング・アーツ――共生のためにできること　　寺田吉孝

●国立民族学博物館論集

5 号

吉江貴文編『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』（2019年 3 月29日刊行）

6 号

浜田明範編『再分配のエスノグラフィ――経済・統治・社会的なもの』（2019年 3 月29日刊行）

●外部出版

杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス――ユーラシア地域大国の比較から』風響社（2019年３月20日刊行）
長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』風響社（2019年３月20日刊行）
韓　敏編『家族・民族・国家――東アジアの人類学的アプローチ』風響社（2019年３月20日刊行）

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、2010年１月12日に一般公開され、９年が経過した。2018年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』『民博通信』の登録を行った。

2018年度新たに登録したコンテンツは186件で、2018年度末のコンテンツ登録数は4,765件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間840,189件に達している。

また、「タイトル」、「著者名」、「キーワードまたは抄録」に英語表記を追加する作業を217件行い、同一論文のタイトル等を日英両言語で表記するクラウド型のグローバル・リポジトリ事業が完了した。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「音楽から考える共生社会」

実施日　2018年11月２日（金）
場　所　日経ホール（東京）
共　催　日本経済新聞社
参加者　336名
趣旨説明・講演１　「アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽が伝えるもの」
講　師　寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
内　容　在日コリアンが演奏する多様な音楽は、娯楽として享受されるとともに、コミュニティの記憶や、マイノリティとして生きる個人の生活体験を表現する場となってきた。在日コリアン音楽家たちの活動を映像音響メディアで記録・共有するプロジェクトの内容を紹介しながら、音楽が共生の実現に寄与する可能性を探った。
講演２　「共創する音楽――多様な人たちの共生のかたち」
講　師　中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）
内　容　近年、障害をもつ人と支援者のコラボレーションや、多様な背景をもつ子どもたちのアンサンブルなど、従来にはなかった共創的な音楽活動が盛んになっている。これらには、参加者たちが、瞬間瞬間における相互の関わりを通じて、対等に、未知の音楽を創造するという特徴がある。共創する音楽を通して、社会における共生について考えた。
パネルディスカッション
寺田吉孝×中村美亜　司会：河合洋尚

「アンデス文明の起源を求めて――日本人研究60年の軌跡と展望」

実施日　2019年３月22日（金）
場　所　オーバルホール（大阪）、聖心女子大学ブリット記念ホール（東京）
共　催　毎日新聞社
参加者　450名
講演１　「神殿を掘る――文明研究の変貌と展開」
講　師　関雄二（国立民族学博物館教授）
内　容　日本人による南米アンデス地帯の考古学調査は、1958年に開始され、昨年で60年を迎えた。アンデス文明の起源を求めて研究を推進した初期に、世界的な業績をあげたが、その後も、文明観を変える発見や理論構築に貢献してきた。その歴史的な流れと、現在のプロジェクトを紹介し、今後のアンデス研究の行方を展望した。
講演２　「ナスカの地上絵の研究と保護――山形大学の挑戦」

講　師　坂井正人（山形大学教授）

内　容　世界遺産「ナスカの地上絵」に関する学際的研究を、山形大学では2004年から実施している。2012年にはナスカ市内に山形大学ナスカ研究所を設立した。これまで山形大学で実施してきた地上絵に関する学術研究を紹介するとともに、現在、ペルー文化省と一緒に取り組んでいる地上絵の保護活動について発表した。

パネルディスカッション　「新しい文明研究を目指して」
関雄二×坂井正人×中村誠一（金沢大学教授）
司会　卯田宗平（国立民族学博物館准教授）

2-6　学会開催

学会開催

2018年12月８日～９日　日本民俗音楽学会　第32回大会
開催場所：国立民族学博物館

2-7　研究員制度

外来研究員

BAI, Fuying　白 福英（ハク フクエイ）中国
研究課題：中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究――オラド後旗の事例から

CIFCI, Mine（チフチ ミネ）トルコ　文化・観光省、文化財・博物館総局博物館研究員
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

Elgazafi, Yousif Eshag Abdallah（エルガザフィ ユーズィフ スェハグ アブダラ）スーダン　遺跡・博物館国立協会、スーダン国立博物館考古学者・ドキュメンテーション課長
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ERTL, John（アートル ジョン）米国　金沢大学外国語教育研究センター国際文化資源学研究センター准教授
研究課題：考古学の民族誌――考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

GAO, Qian　高 茜（カオ チエン）中国　華東理工大学芸術＆デザイン学部准教授
研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

HAMATWI, Emmanuel（ハマティウィ エマニュエル）ザンビア　Choma博物館・民芸品センター教育部教育担当官補佐
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KUNIK, Damien Benoit（クニク、デミアン ベヌア）スイス　ジュネーブ大学文学部東洋学科特別研究員／SNF Early Post Doc Mobility research fellow
研究課題：日本とフランス文化圏における物質文化研究の比較史――過去・現在・未来

MARZEC, AGNIESZKA（マジェッツ アグネシカ）ポーランド
研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー――在日外国人を中心に

MIAMBA Kenneth Pari（ミアンバ ケネット パリ）パプアニューギニア　パプアニューギニア国立博物館・美術館先史局キュレーター
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MUBAIDEEN, Shatha Samah Mjalli（ムバイディーヌ シャダ サマ マジャリ）ヨルダン　観光・古代遺跡省古代遺跡部技術・保存局建築・遺産部担当官
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MWANESALUA, Shirley（マネサルア シェリー）ソロモン　文化・観光省ソロモン諸島国立博物館キュレーター
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

NAQELETIA, Jotame Suvatu（ナゲリティア ジョタメ ヌヴァトゥ）フィジー　フィジー博物館保存部補佐
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

NAVAS GUZMAN, Ana Carolina（ナバス グズマンアナ カロリーナ）エクアドル　市立博物館財団博物館学と教育部部長
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

PALMER, Kerri Ann Simonia（パーマ ケリー アン シモニア）ジャマイカ　ジャマイカ機関、プログラム調整部（Junior Centre）、館外活動担当官
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

POGHOSYAN, Davit（ポゴシアン ダヴィッド）アルメニア　National Museum of Armenian Ethnography and History of Liberal Struggle マーケティング・協働・コミュニケーション部部長 / アルメニア国立 Pedagogical 大学博物館学・図書館学・書誌学科講師
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

PURSEY, Lance（パーシー ランス）英国　バーミンガム大学博士後期課程
　研究課題：北東アジア前近代史における都市的なものの解明

QIAODANJIABU　喬旦加布（チョルテンジャブ）中国
　研究課題：中国青海省における民間信仰と民族的アイデンティティの動態に関する人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante（サウセド セガミ ダニエル ダンテ）ペルー　立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師
　研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究

Yimin　伊敏（イミン）中国
　研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化――内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHANG, Ying　張 穎（チョウ エイ）中国　四川美術学院・中国藝術遺産研究中心准教授副主任
　研究課題：文化財の保護、展示と研究――日本を例として

ZHANG, Ying　趙 芙蓉（チョウ フヨウ）中国　同志社大学文学部嘱託講師
　研究課題：チベット仏教とモンゴル・シャマニズムの関係性に関する研究――モンゴル地域の土地神信仰をめぐって

ZONG, Xiaolian　宗 暁蓮（ソウ ギョウレン）中国　福岡精華女子短期大学非常勤講師
　研究課題：日中相互間における社会イメージの形成および社会記憶の構造に関する研究――訪日旅行者のインタラクティブな文化交流と相互理解への影響を事例として

荒田　恵（アラタ メグミ）日本　関西大学政策創造学部非常勤講師
　研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

安念　真衣子（アンネン マイコ）日本　日本学術振興会特別研究員
研究課題：ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容――貧困層の親族・移動・暴力に着目して

飯田　淳子（イイダ ジュンコ）日本　川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授
研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討――保健医療福祉専門職との協働

飯塚　真弓（イイヅカ マユミ）日本　高崎経済大学地域政策学部非常勤講師 / 高崎商科大学商学部　兼任講師
研究課題：南インドのバラモン・カーストをめぐる社会変容と宗教実践

市野澤　潤平（イチノザワ ジュンペイ）日本　宮城学院女子大学学芸学部准教授
研究課題：確率的事象と不確実性の人類学――「リスク社会」化に抗する世界像の描出

伊藤　悟（イトウ サトル）日本　日本学術振興会特別研究員 PD（京都文教大学）
研究課題：中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究

伊藤　渚（イトウ ナギサ）日本
研究課題：布と人の関わりを通じた身体観の変遷に関する人類学的研究――ラオス北部タイ系民族の女性の織る布と紋様に注目して

井家　晴子（イノイエ ハルコ）日本
研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上　航（イノウエ コウ）日本
研究課題：カンボジア山地民における音と身体のかかわり

今井　彬暁（イマイ アキトシ）日本
研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

上畑　史（ウエハタ フミ）日本　日本学術振興会特別研究員
研究課題：セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究

浮ヶ谷　幸代（ウキガヤ サチヨ）日本　相模女子大学人間社会学部教授
研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究

宇佐美　智之（ウサミ トモユキ）日本　立命館大学文学部特任助教
研究課題：中央アジア・オアシス地帯における都市の出現・発達過程の研究――サマルカンドおよびその周辺域を中心として

内田　修一（ウチダ シュウイチ）日本
研究課題：都市的環境におけるソンガイの精霊憑依の実践に関する研究

内田　吉哉（ウチダ ヨシヤ）日本
研究課題：梅棹忠夫資料室所蔵　EEM 資料の学術的利用に関する研究

蛯原　一平（エビハラ イッペイ）日本　東北芸術工科大学東北文化研究センター専任講師
研究課題：ポスト過疎時代における資源管理型狩猟に関する民俗知形成のモデル構築

大石　高典（オオイシ タカノリ）日本　東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師
研究課題：消費からみた狩猟研究の新展開――野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究

岡田　浩樹（オカダ ヒロキ）日本　神戸大学大学院国際文化学研究科准教授
　研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近

岡本　尚子（オカモト ナオコ）日本　洗足学園音楽大学音楽学部非常勤講師 / 実践女子大学非常勤講師
　研究課題：「J.-C. マルドリュス遺贈コレクション」中の『詞華集』研究

奥村　京子（オクムラ キョウコ）日本　日本学術振興会海外特別研究員
　研究課題：現代作曲家ジェルジ・リゲティの音楽プロジェクトノート分析

風間　計博（カザマ カズヒロ）日本　京都大学大学院人間・環境学研究科教授
　研究課題：オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

金田　純平（カネダ ジュンペイ）日本　同志社女子大学嘱託講師
　研究課題：笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

金谷　美和（カネタニ ミワ）日本――大阪芸術大学芸術学部工芸学科非常勤講師
　研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

神田　和幸（カンダ カズユキ）日本　中京大学名誉教授 /NPO 手話技能検定協会理事長
　研究課題：新手話学の構成素の実証的検証研究

菊地　浩平（キクチ コウヘイ）日本　筑波技術大学産業情報学部助教 / 総合研究大学院大学・学融合推進センター助教
　研究課題：相互行為としての日本手話通訳を支えるマルチモーダル情報に関する基礎研究

工藤　由美（クドウ ユミ）日本　東邦大学看護学部非常勤講師 / 東海大学文学部非常勤講師 / 慶應義塾大学法学部非常勤講師 / 江戸川大学社会学部非常勤講師
　研究課題：チリ先住民マプーチェの民族医療の都市的展開に関する人類学的研究

栗山　新也（クリヤマ シンヤ）日本　日本学術振興会特別研究員 PD/ 沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員
　研究課題：三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究

児玉　徹（コダマ トオル）日本　筑波大学准教授（筑波会議・TGSW 推進ユニット ユニット長兼務）
　研究課題：ワインツーリズム推進策の国際比較的見地からの政策人類学的な分析

後藤　一樹（ゴトウ カズキ）日本　慶応義塾大学文学部非常勤講師
　研究課題：四国遍路における移動と対話の諸相に関する映像民族誌的研究

小美浪　フミ（コミナミ フミ）日本　アイヌ刺繍家
　研究課題：アイヌ文様の地方性の調査・研究

齋藤　剛（サイトウ ツヨシ）日本　神戸大学国際文化学研究科准教授
　研究課題：個−世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム

佐川　徹（サガワ トオル）日本　慶応義塾大学文学部准教授
　研究課題：統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する

佐藤　吉文（サトウ ヨシフミ）日本　神戸市外国語大学非常勤講師
　研究課題：ティワナク国家とケヤ文化――先スペイン期アンデスにおける初期国家形成プロセスに関する研究

新本　万里子（シンモト マリコ）日本　広島大学大学院社会科学研究科研究員
　研究課題：生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究

杉本　敦（スギモト アツシ）日本　東北学院大学文学部・法学部非常勤講師 / 盛岡大学文学部非常勤講師
　研究課題：農の「EU 化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究

鈴木　康平（スズキ コウヘイ）日本　日本学術振興会特別研究員 PD
　研究課題：ユーラシアステップにおける持続的草原利用の体系化と実践

鈴木　博之（スズキ ヒロユキ）日本　オスロ大学人文学部ポスドク研究員
　研究課題：チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究

高木　仁（タカギ ヒトシ）日本
　研究課題：人とウミガメの民族誌――ニカラグア先住民の商業的ウミガメ漁

高橋　晴子（タカハシ ハルコ）日本　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授
　研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ

竹内　明美（タケウチ アケミ）日本　アイヌ工芸家
　研究課題：アイヌ文様、刺しゅう技術の調査・研究

竹村　嘉晃（タケムラ ヨシアキ）日本　人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 / 南アジア地域研究国立民族学博物館拠点特任助教
　研究課題：移民の身体ポリティクス――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー

田中　鉄也（タナカ テツヤ）日本　日本学術振興会海外特別研究員
　研究課題：国家とのかかわりの中で変容する宗教――インド商業集団による宗教的・慈善的な公益活動

田沼　幸子（タヌマ サチコ）日本　首都大学東京大学院人文科学研究科准教授
　研究課題：ネオリベラリズムの中のモラリティ

田村　卓也（タムラ タクヤ）日本　日本学術振興会特別研究員 PD
　研究課題：ケニア共和国の海村における漁場の成り立ちと利用に関する研究

辻本　香子（ツジモト キョウコ）日本　大阪芸術大学芸術学部非常勤講師 / 関東学院大学建築・環境学部非常勤講師
　研究課題：都市における芸能を主としたイベントの構築にみる音環境の研究

東城　義則（トウジョウ ヨシノリ）日本　帝塚山大学非常勤講師
　研究課題：現代日本社会における狩猟活動の組織化をめぐる人類学的研究

常田　夕美子（トキタ ユミコ）日本　大阪大学人間科学部非常勤講師 / 京都女子大学大学院現代社会研究科非常勤講師
　研究課題：現代インドの村落・都市中間地帯の女性における「理想の生き方」の模索

内藤　直樹（ナイトウ ナオキ）日本　徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域准教授
　研究課題：カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて

仲尾　友貴恵（ナカオ ユキエ）日本　京都大学大学院文学研究科非常勤講師／大阪行岡医療専門学校長柄校非常勤講師
研究課題：タンザニア・ダルエスサラームにおける身体障害者の生活基盤

中川　敏（ナカガワ サトシ）日本　大阪大学大学院人間科学研究科教授
研究課題：文化人類学を自然化する

永田　貴聖（ナガタ アツマサ）日本
研究課題：京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学

中田　梓音（ナカタ シオン）日本
研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

中谷　文美（ナカタニ アヤミ）日本　岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
研究課題：伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって

中野　歩美（ナカノ アユミ）日本　関西学院大学社会学部非常勤講師
研究課題：インド・タール砂漠地域における定住後の移動民に関する人類学的研究

中原　聖乃（ナカハラ サトエ）日本　中京大学社会科学研究所准教授
研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究

中道　静香（ナカミチ シズカ）日本　大阪大学非常勤講師／天理大学非常勤講師
研究課題：『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相

中村　真里絵（ナカムラ マリエ）日本　岡山理科大学総合情報学部非常勤講師／園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師／大谷大学文学部非常勤講師／大阪国際大学国際教養学部非常勤講師
研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡の遺物をめぐる村人の価値観の変容に関する研究

二階堂　祐子（ニカイドウ ユウコ）日本　明治学院大学社会学部非常勤講師
研究課題：出生前検査の「対象となる妊婦」に関する人類学的研究――サブスタンスの地域性と動態

西　佳代（ニシ カヨ）日本　広島大学大学院総合科学研究科准教授
研究課題：1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究

西　真如（ニシ マコト）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特定准教授
研究課題：心配と係り合いについての人類学的探求

野澤　豊一（ノザワ トヨイチ）日本　富山大学人文学部准教授
研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究

登　久希子（ノボリ クキコ）日本
研究課題：社会をつくる芸術――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

萩原　英子（ハギハラ エイコ）日本
研究課題：喫茶文化にみられる和様化と日常性の研究

萩原　卓也（ハギワラ タクヤ）日本　京都コンピュータ学院非常勤講師／びわこ成蹊スポーツ大学非常勤講師
研究課題：身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する――ケニアの自転車競技選手を事例に

早川　真悠（ハヤカワ マユ）日本　摂南大学外国語学部非常勤講師
　研究課題：アフリカにおける価値の計量と個別的アカウンタビリティにかんする人類学的研究

林　千恵子（ハヤシ チエコ）日本　京都工芸繊維大学工芸科学部教授
　研究課題：環北太平洋沿岸地域の先住民口承物語の比較研究

平田　晶子（ヒラタ アキコ）日本　日本学術振興会特別研究員（京都文教大学）
　研究課題：テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究

藤井　真一（フジイ シンイチ）日本　日本学術振興会特別研究員
　研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究――ソロモン諸島の事例から

藤岡　幹嗣（フジオカ モトシ）日本　立命館大学映像学部准教授
　研究課題：島に関わる暮らしの調査と撮影――鹿児島県三島村硫黄島

藤田　瑞穂（フジタ ミズホ）日本　京都市立芸術大学学芸員
　研究課題：拡張された場における映像実験プロジェクト

松岡　佐知（マツオカ サチ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員
　研究課題：高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割――南インドの事例から

松田　有紀子（マツダ ユキコ）日本　日本学術振興会特別研究員（PD）
　研究課題：花街の担い手コミュニティによる「伝統」継承をめぐる歴史人類学的研究

松平　勇二（マツヒラ ユウジ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 兵庫県立大学国際交流機構特任助教
　研究課題：才能祭祀マシャウィの分析によるバントゥ系民族の現代的宗教動態の研究

宮嵜　英寿（ミヤザキ ヒデトシ）日本　大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員 / 宝塚大学看護学部・造形芸術学部非常勤講師
　研究課題：家畜糞尿の利用をめぐる地域間比較研究

村尾　静二（ムラオ セイジ）日本　総合研究大学院大学学融合推進センター客員研究員
　研究課題：デジタル時代に求められる映像人類学――新たな映像民族誌の創造に向けて

盛　恵子（モリ ケイコ）日本
　研究課題：セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

山　泰幸（ヤマ ヨシユキ）日本　関西学院大学人間福祉学部教授
　研究課題：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス

山本　文子（ヤマモト アヤコ）日本　和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師
　研究課題：ミャンマー都市部における精霊信仰の知識の再編についての研究

横田　浩一（ヨコタ コウイチ）日本　亜細亜大学国際関係学部非常勤講師 / 聖心女子大学文学部非常勤講師 / 川村学園女子大学非常勤講師
　研究課題：潮州系華人の宗教領域における統治と放縦に関する研究

渡辺　裕木（ワタナベ ユキ）日本
　研究課題：メキシコ先スペイン期の遺跡に与えられた自国のアイデンティティー形成に果たす役割

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

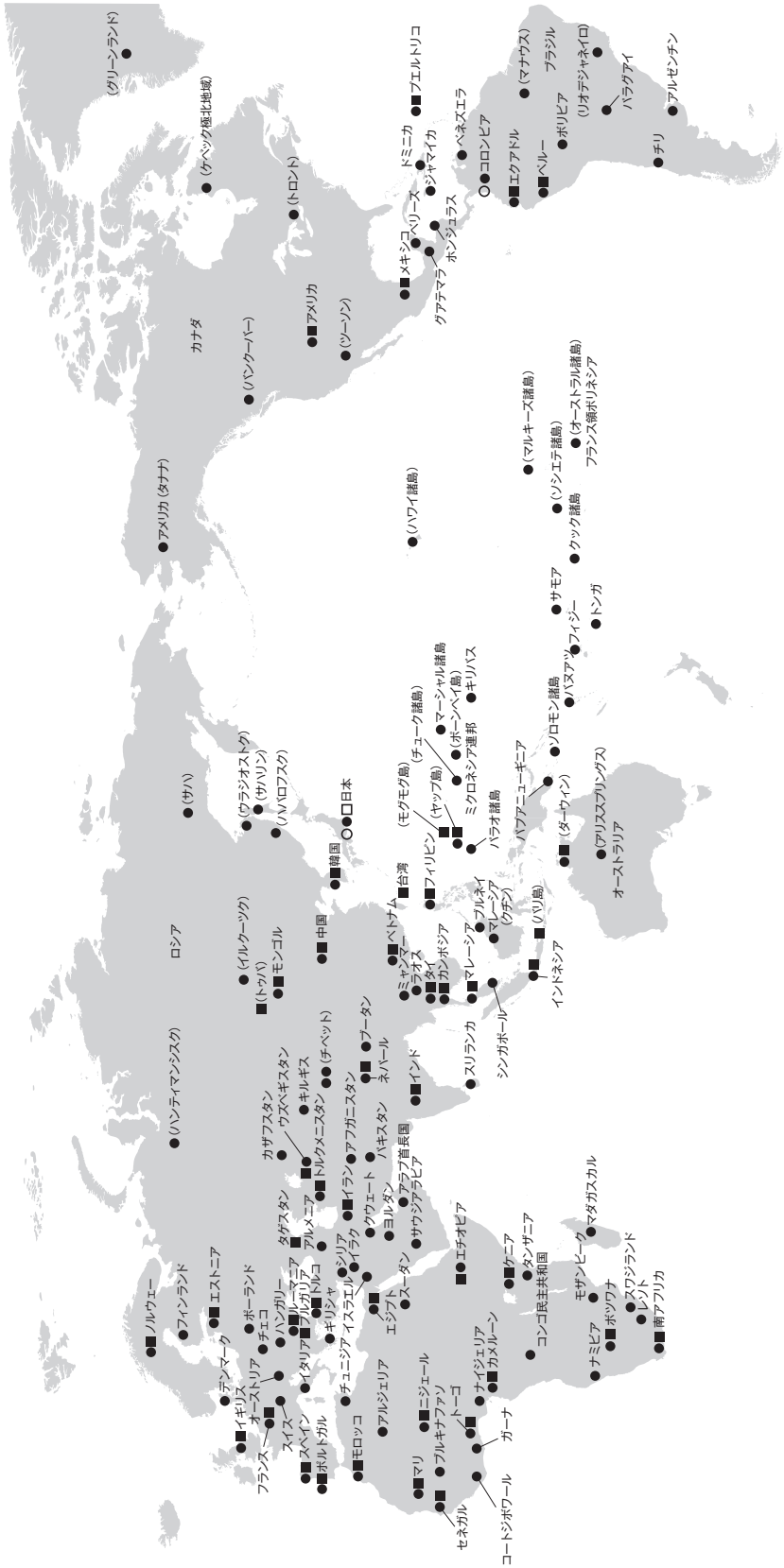
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけではなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2018年度は、国立大学３人、私立大学１人、計４人の大学院生を受け入れた。

2-8　データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

●標本資料および映像取材地域



●標本資料の収集・利用状況

・2019年３月31日現在の収蔵資料数（未登録資料含む）

海外資料／179,127点（未登録資料含む）　国内資料／165,838点（未登録資料含む）　総点数／344,965点（未登録資料含む）

・大学・博物館等への貸し出し

貸し出し件数／18件　総点数／621点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

川瀬　慈　エチオピア、ティグライ州の女性の門付け儀礼“アシェンダ”の映像民族誌制作
エチオピア　2018年８月16日～８月29日

寺村裕史　みんぱく映像民族誌『オアシス都市の暮らし（仮題)』の制作
ウズベキスタン　2018年９月15日～10月３日

・2019年３月現在の収蔵資料数

映像資料／8,223点　音響資料／62,651点　総点数／70,874点

・資料の利用

利用総件数／132件（内、大学47件）　資料利用総点数　5,690点（内、大学418点）

特別利用（館外での上映・試聴など）

利用件数／56件　資料利用点数／677点

館内利用など

利用件数／76件　資料利用点数／5,013点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2018年度図書室の活動

１．利用者サービス

1）2018年11月から、一般利用者が図書室休室日に博物館内で図書を返却できるサービスを開始した。

2）2019年１月、「図書室利用細則」を改正し、「文献図書資料等事業利用内規」を廃止した。

3）利用者支援の一環として、図書室案内・見学対応等を行った。

① 外来研究員オリエンテーション
② 総研大生オリエンテーション
③ 民博事務系新任職員研修
④ JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発コース」
⑤ 若手研究者奨励セミナー
⑥ 人文知コミュニケータースキルアッププログラム

＊その他、他大学等からの見学対応

２．資料整備関連

1）遡及入力事業として、国立情報学研究所 NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2018年度は冊子体については、モンゴル語・アラビア語等特殊言語資料の遡及入力を行った。マイクロ資料については、原資料が北米の大学の博士論文であるもの1,005件、図書2,127件、新聞雑誌８タイトル（376件）の遡及入力を行った。

2）書庫２層・３層を中心に約22万冊の蔵書点検を行った。

3）購読雑誌について、教員への希望調査に基づき高額な雑誌を削減して経費の節減をはかりつつ、新たに希望があった購読雑誌・契約データベースを導入した。

３．施設整備

1）2018年６月の大阪府北部を震源とする地震により、書庫内資料の相当数が落下・飛散したことをうけて、書棚の落下防止テープを貼付した。（３～５層の未貼付箇所）

2）前年度に引き続いて、書庫内の湿度対策として除湿機２台を追加で設置した。また、書庫内各所に壁掛けの

温湿度計を設置し、職員が体感とともに数値を目視確認することで温湿度変化に敏感に対応できるようにした。

4．広報、社会貢献その他

1)「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行した。

2) 中学生の職場体験学習を受け入れた。

豊中市立第十四中学校　2名（2018年10月7日）

箕面市立第四中学校　2名（2018年11月9日）

●2018年度新規受入数

日本語図書	1,706点	外国語図書	1,533点		
AV資料他	37点	製本雑誌	715点	合計	3,991点

●2018年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	266,112点	外国語図書	412,158点	合計	678,270点
日本語雑誌	10,143種	外国語雑誌	7,028種	合計	17,171種

●利用状況（2018年度）

入室者	全体	8,427人
	館外者	1,320人
時間外入室者		138人
うち日曜、祝日		44人
貸出	図書	11,559冊
	雑誌	310冊
うち館外貸出図書		2,455冊
HRAF利用受付		4件（カウンター受付件数）

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	1,063（125）件
		国外（うち謝絶）	14（14）件
		来室	2,417件
	依頼	国内	272（19）件
		国外	2（0）件
現物貸借	受付	国内	485（27）件
	依頼	国内	451（19）件
		国外	1（0）件
事項調査		受付	20件

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2018年度の問合せ件数は、278件であった。

問い合わせ者別　（件）

教員（大学）	50
大学院生	6
大学生	6
教員（小・中・高）	6
学生（小・中・高）	1
博物館・美術館関係	26
図書館	5
教育・研究機関	8
マスコミ関係	4
会社・団体	35
一般	55
民博教職員	76
計	278

問い合わせ者の所属機関別　（件）

公的機関	大学・大学図書館	64
	博物館・美術館	35
	小・中・高	7
	その他教育機関	3
	研究機関	6
	公共図書館	3
	地方公共団体	1
	各種団体	4
民間	研究機関	0
	会社	24
	団体	9
個人	館外	54
	館内	67
	不明	1
計		278

資料の利用目的

（件）

調査・研究	研究*1	88
	論文作成	2
	学習*2	1
	図書館から	4
	授業で利用	47
	その他	24
	小計	166
館内利用	刊行物作成	3
	館の事業	7
	参考資料	1
	資料の複製	3
	小計	14

業務用	展示用	48
	番組制作	6
	出版物作製	29
	参考資料	5
	入手方法	1
	その他	1
	小計	90
その他	寄贈申出	7
	その他	1
	小計	8
合　計		278

*1　大学生以上の調査を「研究」とする
*2　高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、泉靖一、岩本公夫、梅棹忠夫、大内青琥、沖守弘、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田統、杉浦健一、土方久功、馬渕東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2018年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、丸谷彰、江口一久、栗田靖之・別府春海、内田勣、小林保祥アーカイブの目録を Web 公開した。また、研究アーカイブズ資料の利用について利用細則の改正を行い、資料形態・利用目的にかかわらず、可能な限り利用者に負担をかけず、かつ事務作業も繁雑にならないようにした。受入については寄贈受入れ規則を新たに制定し、価格評価・資産計上の流れを定めた。また、個人情報が含まれる資料の利用方法、権利処理が困難である資料の公開についても方針を検討した。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは19件である。2018年度の利用状況は閲覧・視聴が23件、貸付が１件、特別利用が13件、事業利用が５件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2017年度までの作成件数	285,122
2018年度の作成件数	1,175
2018年度のアクセス件数	351,478

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2017年度までの作成件数	69,713
2018年度の作成件数	3,680
2018年度のアクセス件数	80,613

・標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。

2017年度までの作成件数　62,523
2018年度の作成件数　4,903
2018年度のアクセス件数　4,576

• 韓国生活財
ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。
2017年度までの作成件数　7,827
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　5,020

• ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）
宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。
2017年度までの作成件数　2,992
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　1,115

• 映像資料目録
本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。
2017年度までの作成件数　8,199
2018年度の作成件数　24
2018年度のアクセス件数　2,782

• ビデオテーク
本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。
2017年度までの作成件数　775
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　2,178

• 音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、１曲または１テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。
2017年度までの作成件数　849
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　320

• 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。
2017年度までの作成件数　170
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　629

• 京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。
2017年度までの作成件数　22,361
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　1,031

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。
2017年度までの作成件数　7,889
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　2,532

- アフリカ　カメルーン民族誌写真集――端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査のなかで撮影した写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	6,530
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	1,501

- 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2017年度までの作成件数	21,971
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	2,490

- ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	3,879
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	2,414

- 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2017年度までの作成件数	62,651
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	1,425

- 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2017年度までの作成件数	351,802
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	735

- 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2017年度までの作成件数	643,677
2018年度の作成件数	3,667
2018年度のアクセス件数	725,166

- 梅棹忠夫著作目録（1934～）

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。

2017年度までの作成件数	6,667
2018年度の作成件数	58
2018年度のアクセス件数	3,254

- 中西コレクション――世界の文字資料――

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2017年度までの作成件数	2,729
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	38,770

- 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2017年度までの作成件数	33,450語（40,596頁）
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	469

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）
Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2017年度までの作成件数	7,637
2018年度の作成件数	80
2018年度のアクセス件数	328

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2017年度までの作成件数	3,696
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	1,191

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2017年度までの作成件数	39,826語（文例：15,706件）
2018年度の作成件数	1,252語（文例：0件）
2018年度のアクセス件数	19,356

• 衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	27,701
2018年度の作成件数	3,729
2018年度のアクセス件数	50,255

• 身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1）服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2）服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3）服装関連外国語雑誌記事、4）服装関連日本語図書、5）服装関連外国語民族誌で構成。

2017年度までの作成件数	176,403
2018年度の作成件数	3,391
2018年度のアクセス件数	9,875

• 近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2017年度までの作成件数	11,908
2018年度の作成件数	−3
2018年度のアクセス件数	860

• 身装画像――近代日本の身装文化
和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2017年度までの作成件数	6,161
2018年度の作成件数	579
2018年度のアクセス件数	23,210

• 津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース
日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	333
2018年度の作成件数	45
2018年度のアクセス件数	80,352

• 3次元CGで見せる建築――東南アジア島嶼部の木造民家
佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2017年度までの作成件数	34地点	52棟
2018年度の作成件数	2地点	5棟
2018年度のアクセス件数	477	

●館内で利用できるデータベース

• 標本資料詳細情報（館内専用）
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2017年度までの作成件数	264,460
2018年度の作成件数	13,164
2018年度のアクセス件数	86,337

• カナダ先住民版画
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち――カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2017年度までの作成件数	158
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	111

• 音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2017年度までの作成件数	849
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	69

• 京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	42,195
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	812

• 梅棹忠夫写真コレクション
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	35,481
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	1,818

• オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	7,999
2018年度の作成件数	0
2018年度のアクセス件数	81

• 朝枝利男コレクション
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数	3,966
2018年度の作成件数	0

2018年度のアクセス件数　139

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数　8,842
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　24

• 沖守弘インド写真（日本語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2017年度までの作成件数　22,120
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　41

• 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2017年度までの作成件数　620
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　14

• タイ民族誌映像――精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2017年度までの作成件数　10,082
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　0

• 東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2017年度までの作成件数　4,393
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　10

• 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2017年度までの作成件数　3,696
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　192

• 国内資料調査報告集

日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2017年度までの作成件数　21,373
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　7

• 焼畑の世界――佐々木高明のまなざし

佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。

2017年度までの作成件数　454
2018年度の作成件数　0
2018年度のアクセス件数　―

2-9　みんぱく施設の利用

博物館施設の利用状況

●展示場を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知淑徳大学（64）、追手門学院大学（270）、大阪大谷大学（70）、大阪学院大学（56）、大阪教育大学（20）、大阪芸術大学（11）、大阪工業大学（10）、大阪樟蔭女子大学（48）、大阪成蹊大学（43）、大阪大学（55）、大谷大学（7）、岡山大学（4）、沖縄県立芸術大学（28）、尾道市立大学（25）、金沢星稜大学（73）、関西大学（71）、関西学院大学（44）、畿央大学（6）、岐阜大学（10）、九州大学（16）、京都産業大学（32）、京都精華大学（20）、京都造形芸術大学（70）、京都橘大学（83）、京都ノートルダム女子大学（12）、京都府立大学（42）、近畿大学（67）、甲南女子大学（20）、甲南大学（80）、神戸学院大学（16）、神戸市外国語大学（7）、神戸女学院大学（96）、神戸女子大学（145）、神戸親和女子大学（16）、神戸大学（15）、滋賀県立大学（31）、滋賀大学（6）、四天王寺大学（8）、就実大学（55）、杉野服飾大学（12）、摂南大学（12）、園田学園女子大学（17）、多摩美術大学（26）、筑波大学（11）、帝塚山学院（55）、同志社大学（52）、獨協大学（10）、名古屋外国語大学（18）、奈良女子大学（27）、奈良大学（13）、梅花女子大学（184）、阪南大学（13）、平安女学院大学・平安女学院大学短期大学部（21）、桃山学院大学（50）、龍谷大学（277）、流通科学大学（35）、Lakeland University Japan（15）

＊注　利用申請手続をおこなった大学・研究機関等

• 来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- 多様な文化コンテンツを展示しているので、異文化をよりわかりやすく理解することができると思ったから
- 講義内容に関連した展示を見学することにより、学習の視野を広げるため
- 収蔵庫の見学により、博物館における研究とその成果の蓄積、公開のプロセスを理解するため
- 学芸員資格科目のミュージアム実習（館見学）のため
- 雨天のため第２候補の民博を選択した
- 貴館を見学したいという学生たち自身の強い希望があったため
- 大学のキャンパスから近く、アクセスが容易であったため
- 本学社会学部での教育内容と関連の深い展示内容であるため
- 万博資料展をぜひみておきたいと考えたため
- EXPO70に関するワークショップを行っていたため
- 博物館実習の授業の一環で来館
- 文化の表象というテーマの授業において、文化がいかに展示されているかを学ぶため
- 「文化」の多様性やその具体的なイメージを学生にもってもらうため
- 「国際理解」の授業で昨年も利用し、学生の反応が非常に良かったため
- 博物館実習の一環として民族衣装や染織品の展示方法を拝見させていただく場として
- 世界各地の生活文化を学ぶことができるから
- 奈良へ行く途中に寄れる場所で、学生にとって有意義な場所を探していたので
- 見学時点に関西圏で催されている展覧会の中から、内容および展示デザインが学生にとって参考となると考えたため
- 毎年利用しているので（５年連続）
- 文化人類学的な素養を学ぶため。また、民博は施設が充実し、展示が豊富であるから
- 多様な文化について考えさせるために、あらゆる国、時代の展示物や興味深い資料が多く収集されている民博を選んだ
- 近くでまとまった人数で見学ができること。世界の文化が展示されていること
- 学部「工芸理論」の一環として
- 学生の要望と私自身が貴館に興味があったため
- 博物館資料保存論の学外授業
- オセアニアコーナーにある伝統的航海術を見学させたかった
- 世界には様々な民族、文化が存在することを実感できることを期待した

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園［大学・短期大学］、同志社大学［文化情報学部・文化情報学研究科］、学校法人立命館［立命館大学、立命館高等学校、立命館宇治高等学校、立命館守山高等学校、立命館慶祥高等学校］、学校法人塚本学院［大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校※通信課程含む］、京都大学、京都市立芸術大学（2,365）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1）既存施設・設備の有効活用への取組状況

- 施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2018年度は11回開催した。

2）施設の維持管理の取組状況

- 特別展示館の１、２階展示場について、老朽劣化していた床材を耐久性の高い材料へと改修した。
- 設置後30年程経過している第８展示棟エレベーター６号機について、巻上げ機、ロープ、制御盤等の主要な設備の更新を行った。
- 衛生的環境を確保するため、2018年度も館内害虫駆除を行った。
- 展示場中庭トップライトについて、経年から全体的にひび割れが発生しており防水シートにより全面補修した。
- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

3）省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

2-10　受賞・特許

受賞

●2018年度の職員受賞者

齋藤　晃　　2018年７月20日　　第33回大同生命地域研究奨励賞

知的財産形成・特許出願など

2018年度　なし